

TS転生したら現代異能  
バトルゲーのモブキヤ  
ラになってました

不死浪シキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

前世では冴えない男子大学生だった彼が、転生したらノベルゲーのモブ少女になっていた！

今生の名前は終シオン。BGMやSEが聞こえるだけの微妙に弱い異能持ちだ。

持ち込んだ原作知識と、貧弱な転生チートを駆使してシオンが願うのは、原作の故人ヒロイン生存ルート。

物語序盤で死んでしまう推しの子を助けて、主人公とどうにかしてくつつけてあげたい。

そうこの世界においてシオンは恋のキューピッドになりたいのだ。

原作からシナリオがずれた結果爆誕したサイコレズが側で目を光らせているがきつとなんとかなる。

頑張れシオンちゃん。負けるなシオンちゃん。

推しの子のルートをどうにかして見届けるのだ！

# 目次

誰だって推しの死は辛いモノ | 1

自爆しかありません | 6

少年の知る少女、振る舞いが人を規定する。 | 11

お近づき | 19

具体的方策 | 28

入部1 | 33

入部2 | 37

眩しいものを見るような目は | 44

一年三人衆+αの活動記録1 | 53

一年三人衆+αの活動記録2 | 60

学生生活は危険がいっぱい | 68

馬の骨 | 74

当たるも八卦 | 80

買い物は立派な遠出 | 88

お茶の間にいのーぶ！の活躍を | 94

世の中には結構ロリコンが多いらしいが | 102

私には関係ない | 109

海辺にも危険はいっぱい | 114

お酒には気をつけよう！ | 124

私の好きな人 | 132

お目覚め | 138

お家凸 | 146

146  
チョロい人間にはゴリ押しが有効です

立ち退き	154	筋肉痛の予感	222
チヨロい人間は甘やかしておけばすぐ墜ちる	161	えっちなことはいけないことだと思います	229
人の振り見て我が振り直せ	168	嫉妬なんて犬の餌にもならないのでしないほうがいい	244
難しいことは考えないほうが楽	176	背中に乗ってふみふみするマッサージは子どもの特権	251
浴衣はスレンダーな人に向いているらしい	184	顔も性格もいい女の子に告白されて落ちない童貞はいないわけで	262
邪な妄想が捗るけれど裏切りみたいなものだしやめたほうがいい	190		
清楚な顔してる人ってたまにえげつない趣味してる	199		
他力本願	206		
映画とポップコーンとコーラ	213		



## 誰だって推しの死は辛いモノ

「いのーぶー」というゲームがある。

「怪異」なる怪物が跋扈する現代日本によく似た世界で、主人公たる烈火ホムラクくんが仲間とともにバトルを繰り返す異能バトルゲームだ。

あらずじとしては大体こんなだった気がする。

19世紀後半に出現しだした怪異は、その勢力を徐々に増し人類の生存圏は減少の一端を辿っていた。そんな中で怪異に立ち向かった人々がいる。

それこそが「異能持ち」。生まれつき魔法や超能力などを持つ新人類の誕生により、怪異は撃退され人類は安息を手に入れたのだった。

そして20XX年現在、烈火ホムラクくんは中央都立高等学校に進学し、なんやかんや勧誘された異能部のメンバーと日夜部活動に励んでいるのだ。

といった塩梅だ。

簡単な話、このゲームは超能力者の主人公烈火ホムラクくんが高校で超能力者だらけの部活動「異能部」に所属し、怪異をバンバン倒しつつハーレムを形成するものだ。ちなみにR18のエロゲームだ。

私はCG全回収した。大満足。

あと推しについても少し語りたい。自分の好きなものを語りだしたら止まらない早口オタクなので。

私の推しは主人公の幼馴染み二人の内の一人、須藤ヤカちゃんだ。パッケージの左半分はこの娘のドアップであり、発売前からキャラ紹介文とともに愛されてきた少女だ。

公式サイトの紹介曰く運動神経バツグン、勉強もできるパーフェクトで天真爛漫な女の子。幼い頃から烈火ホムラ、鈴木ミナミとはごく近所さんで3人でいつもつるんできた。生まれつきの異能持ちで、光魔法を駆使した戦士の資質を保有している。高校に進学し異能部に所属した彼女は、ホムラ達とともに様々な怪異と戦っていくが――？

とのことだ。

そして最序盤で死ぬ。

そう死んでしまうのだ。

この子はなんとストーリーを通して故人ヒロインとしての役割を担っている。

異能部に所属して初めての戦闘を経たあと、帰り道に奇襲を受け即死する。しかもホムラさんとミナミちゃんの目の前で。

その光景は二人にとってのトラウマになり、「異能部」存続の危機にもつながるストー



リー上重要なシーンである。

だがそんなことどうでもいい。

発売前から推してた子が序盤で死んだのだ。しかもどのルートでもこの子は生存することはしない。あまつさえグラントエンド——I度本編でトゥルーエンドをクリアしないと派生しないルートのエンディング——では、墓参りに来たホムラの独白とともに幼い頃の回想編が差し込まれる。

無邪気に遊んでいた主人公たち幼馴染みトリオの回想と、ストーリーでは死んだ帰ることのないヒロインという事実が化学反応を起こして、多くのプレイヤーが死んだ。私も死んだ。つらい。

当初はパッケージ詐欺だと炎上するなどひどい有様だった。公式サイトでもデカデカとメインヒロイン名乗ってる女の子が、ほとんど活躍の機会もないまま死んだのだ。あまりにもひどい。

これはこれでストーリー的には美しかったし、泣けるエロゲーではあったけど。オタクは推しが死んだら辛い生き物なのだ。辛い。

まあそれはさておきだ。

先程からなぜこんなにもエロゲの内容と推しについて語っているかというのと、どうやら私はこの「いのーぶ！」の世界に転生しているようだということを理解したからだ。

まるで電波みたいなことを言ってるなと引かれても仕方ない。私だって前世でゲームの世界に生まれ変わりました！なんて言ってる人間がいたら異常者扱いするだろう。だがこれは本当だ。

この世界には怪異がいる。異能もある。なんなら私自身異能持ちだ。しかもモブの女の子になってる。私の前世は普通に男だったんだが…

前世の記憶を掘り起こしてみれば、私の体はストーリー上で「物静かな女の子」という名前のモブだ。立ち絵はない。

いわゆる卒業ルートのエンディングで表示されるイラスト内に映り込んでたことがあるので、見覚え自体はある女の子の体。

発育は悪く身長も胸も尻もない。手足はスラリとしてるがそもそも身長がないので微妙だ。少女というよりは少年体型って感じ。

顔立ちは非常に整っている。整っているのだが、いかんせんエロゲーの世界だ。登場人物全員美男美女だし、前世でのゲーム知識内では立ち絵のなかったただのモブも全員きれいな顔だ。

あとはジト目と無表情が目立つ。頑張って目を開けて表情を変えようとはしてるのだがあんまり上手く行かない。無愛想に見えてしまう。

最後に付け加えるなら異能もある。転生チートかなにかだと思うが、本来この「物静かな女の子」は異能持ちではなかった。しかし今の私には場の雰囲気や人の行動を音楽として聞く異能を持っている。

簡単な話サウンドエフェクトやBGMが聞こえる異能だ。あと身体能力を強化できたりするが、主要登場人物の超人めいたそれと比べると貧弱極まる。

まあそんなこんなでいの一ぶ！の世界に転生していた私としては、一つ目標がある。これすなわちヒロイン須藤ヤヤカの生存。そしてまだ見ぬヤヤカルートを見届けること。

もうすぐ訪れるであろうヤヤカちゃん死亡シーンをどうかして妨害することにある。

## 自爆しかありませんまい

「流石はミナミだな、大活躍だったじゃないか」

「そ、そうですか……？ えへへ」

「えーちよつと私はー？」

「はいはいヤヤカもすごいすごい」

夕暮れ近づく歩道を歩く賑やか三人衆。

一番体格のいい赤髪の少年が我らが主人公ホムラクくん。趣味で体を鍛えているだけあって見事な細マツチヨだ。長年、半袖の夏服から覗く腕が筋肉質でえっちすぎるといふ指摘があつたのも納得だ。

そんなホムラクくんに褒められて照れているのはミナミちゃん。物腰の柔らかい黒髪の美少女。性格は内気なところがあるが胸部の立派なものは主張が激しい。誘蛾灯めいてオタクどもを寄せ付ける胸とふともも。ご立派がすぎる。

最後に私の推し、ヤヤカちゃん。流れるようなプラチナブロンドと見事なナイスバディ。いかにもロシアなどの外国人ですという外見だが、日本人だ。エロゲーの世界なので外観は多様性に溢れてる。

そんな三人が仲睦まじそうに歩いている。

私の記憶が正しければ、今日この三人は異能部として怪異と戦った帰りであり、そしてその途中に奇襲を受けヤヤカちゃんが死ぬ。

そんな日である。

当然ヤヤカ推しとしてそんな未来は認められない。

事前に襲撃ポイントに先回りした私は、バス停のベンチに腰掛けて妨害の準備をしていた。

私の行動が原因でヤヤカちゃん死亡イベントの奇襲ポイントは多少変動したりするかもしれないので、できるだけ目立たないようにしている。

「あつシオンちゃん！ やっほー！」

目立たないようにしていたはずだったんだけど。

近くまで来た陽キヤの鑑みたいなの陽キヤことヤヤカちゃんに普通に挨拶されてしまった。

「や……やっほ……？」

我ながら声ちつき。どもって陰キヤみたいになってしまった。陰キヤではあるが。

「やあこんには。えっと……」

「柊シオンさん、ですよね？」

はい終シオンさんです。ホームラくんには名前覚えられていなかったみたいだ。同じクラスだけでもあ息を潜めて学生生活送ってたから、名前知られてなくてももしかたない。

「こんなところで会うなんて奇遇だね！ なにか用事でもあったの？」

まさかヤヤカさんあなたが死ぬから来ましたなんて言えない。というかそろそろ襲撃がある頃合いだから、全霊で警戒してて会話するだけの余裕がない。

「……ヤボ用……やらなきやいけないこと……ある」

「やらなきやいけないこと？」

——ツ！

来る。不穏だったBGMが転調した。更に必殺ワザチャージ完了時のSEが聞こえた。ザコ怪異の使う遠距離攻撃の必殺技の合図だ。

異能を展開している状況であればともかく、無防備な生身で受ければ死は免れない一撃が飛来してくる。

「……『展開』!!」

「わっ急にどうしたの!?!」

「ッ！ ヤヤカ危ない！」

意識領域を拡張。体内異能抑制器官を緊急停止。人類の獲得した超能力、すなわち異能を展開。

途端に衣装が変貌する。学生服が黒と紺で統一された装飾過多のワンピースに変わり、胸部、腰、各関節、こめかみを金属の防具が覆う。これが異能持ちが自身の異能の制限を取っ払い、戦闘に特化した状態に移行する『展開』。

亜空間より召喚した音叉の形をした槍を構え、飛来する遠距離攻撃を迎え撃つ！

彼方から飛んできたエネルギー弾と穂先が激突し、火花を散らして拮抗した。

……ゲーム上はザコ怪異だつたはずだが、やっぱりモブの私には荷が重い。奇襲には対応できたがこのままではエネルギー弾を抑えきれず吹っ飛びそうだ。

真つ先に状況に反応したホムラくんが、『展開』を開始したが少し遅い。もはや猶予はない。エネルギー弾の圧力に屈してもう膝が折れそうだ。

こうなつたら仕方ない。自爆しかありませんまい！

展開していた異能、衣装、槍を指向性を持たせて暴発させればどうにかしてエネルギー弾だけは弾けそうだ。奇襲を仕掛けてきたザコ怪異は展開を完了させたホムラくん任せれば大丈夫だろう。

「……ホムラ……くん……あとはおねがい」

「シオンさんなにを!?!」

はいドーン！

もう限界なので自爆します。多少は怪我すると思うけど命には代えられない。

あとは頼んだ！

アディオス！

衣装、槍の縫合が解け前方に向けて爆風を放つ。その爆風と反動をもろに受けた私は吹き飛ばされて、そして意識はそこで途切れた。



## 少年の知る少女、振る舞いが人を規定する。

「流石はミナミだな、大活躍だったじゃないか」

「そ、そうですか……？ えへへ」

「えーちよつと私はー？」

「はいはいヤヤカもすごいすごい」

俺こと烈火ホムラにとつて今日という日は特別だった。

なにしろ異能部入部しての初めての部員としての活動だったからだ。

副部長先輩の占星系の異能によって、事前に判明していた地点で怪異を待ち構え撃滅したのがほんの数時間前。

俺は持ち前の炎で、ミナミは類稀なる弓の才能で、ヤヤカは圧倒的な光魔法の暴力で怪異をなぎ払った。

普段から体を鍛えている俺はともかく、引つ込み思案なミナミやどこか抜けたところのあるヤヤカまで、物怖じすることなく戦えたのはちよつと驚きだった。

今日湧いた怪異は大したことないザコだったというのもあるが、まあ勝利は勝利だ

し、街のみんなの平和を守れたし、政府から支給される賃金で財布は潤うしで大成功だろう。

帰りはどこかファミレスにでも寄って3人でご飯にしようかな。

「えーと私はホームラとヤヤカが好きなどころにしよっかな」

「じゃあじゃあ隣街のステーキ屋行ってみたい！前から気になってたんだよね!!」

「ちよつと遠いけどまあいいか、近く通るバスあつたし」

そんな浮かれた気分ですり路についていた俺たちだったが、途中で珍しい人物を見た。

「あつシオンちゃん！ やっほー！」

「や…やっほ…?」

バス停でバス待ちしている先客がいた。ヤヤカがやかましい声量で挨拶したものである。完全に萎縮してる気がする。すごく小さい声で挨拶が返ってきた。

シオンさん。確か同じクラスの子だ。いつもイヤホンをつけて一人でいる物静かな女の子。

ちよつとびつくりするほど小柄で、何考えてるのかよくわからない顔をした人だ。

えーつと、名字はなんだっけ？

普段全くと言っていいほど関わりがないからとつきに出てこない。

「やあこんにちは。えっと……」

「柘シオンさん、ですよね？」

ミナミの責めるような視線が痛い。同じクラスの子の名字を忘れてたわけなので甘んじて受け入れるけど。

シオンさんはそんな俺の様子を気に留めた様子もなく、俺たち3人をまじまじと見ている。なんだろう、そんなに俺たちにはぽつと見ただけでわかるような変なところあったりするのかな？

「こんなところで会うなんて奇遇だね！ なにか用事でもあったの？」

沈黙を嫌うヤヤカが矢継ぎ早に質問した。シオンさんはちよつと萎縮してる。ヤヤカは圧が強いのだ。小動物のように縮こまってしまったシオンさんがちよつとかわいいので許すが。

ふと、シオンさんの雰囲気が変わった。

なんだろう。言葉にしにくい。

緊張しているのだろうか、張り詰めた様子。なにか切羽詰まった緊迫感のようなものを感じる。

「……ヤボ用……やらなきやいけないこと……ある」

「やらなきやいけないこと？」

反応は、劇的だった。シオンさんが息を呑むのが見えた。悪寒がする。シオンさんが身構える様子につられて、俺も周囲を精査した。

超高速でこちらに飛来する熱源を捉えた。

「……『展開』!!」

「わっ急にどうしたの!?!」

「ツー・ヤヤカ危ない!」

間に合わない。

確信があった。

気づくのが遅れたのだ。まさか警報を掻い潜って存在する怪異がいるなんて想定していなかった。

己の油断と想定のおかしさを呪う。

間に合わない。間に合わない。間に合わない!

俺では間に合わない!

飛んでくるエネルギー弾は正確にヤヤカを狙っていた。

展開を急ぐ。急ぐ。このままじゃ犠牲が出る。

だめだ。どうしても時間が足りない。

そんな中、間に合っていたのは。

「——つくう……！」

シオンさんだけだった。

一瞬の間に展開を済ませて召喚した槍で、エネルギー弾を迎え撃った。

いつも変わらないシオンさんの顔に、苦悶の表情が浮かぶ。

足りていない。

絶望的に異能の出力が足りていない。

換装したコスチュームの至るところが形象崩壊を起こし、光る粒子に変わっていく。

頼む、耐えてくれ。

もう少し、もう少しで俺の展開が完了する。

そうしたら加勢できる。すぐにでもエネルギー弾なんて弾き飛ばして、殲滅できる。

俺ならきつとできるから、それまでの数瞬をどうか耐えてくれ！

でも。

どう見ても出力が不足している。

押し込まれたシオンさんはその圧力に悲鳴のような呼気を吐き、槍による強引な防御は今にも突破されそう。

間に合わないのか。

俺は。

頭の中で勝手に算盤が弾かれていく。

エネルギー弾の出力を鑑みれば、俺もミナミもヤヤカも多分怪我を負うけれど命に関わるものではないだろう。だってこの位置関係なら光弾はまずシオンを捉える。彼女という肉の壁が俺たち3人を守ってしまう。

だめだ。そんなの許してはいけない。

くそっ！

展開は完了していないが、強引に割り込むしかない。危険極まりない行為だが、このままではシオンさんの命が危ない！

そう思っていた時だった。

「……ホムラ……くん……あとはおねがい」

思わず聞き漏らしそうなほど細かい声だった。

「シオンさんなにを!?!」

次の瞬間、シオンさんは槍と兵装の全てを光へと変え目の前で爆発させた。爆風に煽

られたエネルギー弾は空へと進路を変え、遙か彼方で爆発した。

自爆だった。

反動と至近距離で自身の爆風に巻き込まれたシオンさんの体が、力なく吹き飛ばされるのを視界の端で捉えた。

「きゃあー！」

「なに!!？」

なんとか展開を終え、吹き飛ばされるシオンさんに追いつき抱きとめる。シオンさんが地面に叩きつけられるのはどうにか阻止できた。

腕の中の小さな体を覗き込む。

重症だ。

至近距離でもろに自身の爆発に巻き込まれたのだ。至るところに怪我を作った痛々しい体を見る。

「ヤヤカ『展開』を！ シオンさんの治癒を急げ！」

「——っ！ シオンちゃん！」

光魔法のエキスパートであるヤヤカならまだ助けられる。

軽い。あまりにも軽すぎる体。

シオンさんの行動は謎めいていた。怪異による襲撃を予期していたかのような行動。

わからない。

どうやってこの奇襲を予測したのかわからない。

なぜ一人で迎え撃とうとしたのかわからない。

なぜ自分の危険を顧みず俺たちを助けてくれたのかわからない。

何が目的でこんなことをしたのかわからない。

でも二つだけ確かなことがある。

一つは、彼女が身を挺してくれなければ今この場にいた誰かは死んでいた——それはきつと真つ先に狙われたヤヤカだったろう。

もう一つ、俺は頼まれたということ。

この奇襲を仕掛けてきた怪異を仕留めてほしいと頼まれた。

「ミナミ弓を頼めるか、援護がほしい。ヤヤカ、シオンさんを頼む。俺は向こうをやる」

「は、はい任せてください！」

「安心してシオンちゃんは私が全霊をかけて助けるから」

異能部1年としての活動、その延長戦が幕を開けた。



## お近づき

目が覚めた。格子状の模様の天井と、吊り下げられた点滴の器具が目に入る。

息が詰まるような倦怠感。全身が重いし喉がイガイガする。とりあえず顔でも洗いたい気分。

「…あー！ シオンちゃん起きたー！」

視界に金髪美少女ことヤヤカさんがエントリーしてきてひっくり返りそうになった。もとより寝てたが。

「…あの…おはよ」

「うんおはよう！ ちよつと待っててみんな呼んでくるから！」

バタバタと騒いで飛び出していくヤヤカさん。どうやらここは高校の医務室らしい。走らないでくださいと怒られてるのが聞こえてきた。

少ししたらナースとドクターがやってきて今の私について説明してくれた。

異能の展開中に自爆をしたところ、爆風に煽られて至るところに火傷、裂傷、打撲があったとのこと。ヤヤカさんの異能によつて傷を治してもらわなければ痕が残ったかもしれないと怒られた。

どうやら私は2日間寝込んでいたようで、その間の授業は出席停止扱いらしい。ホムラ、ヤヤカ、ミナミの幼馴染み三人衆はその間かわるがわる見舞いに来ていてくれたそうだ。

今後はこんなことしないようにとのお叱りの言葉を右から左へ受け流していると、医務室の外の廊下が少し騒がしくなった。ヤヤカさんが誰か連れてきたみたいだ。

「失礼しまーす！」

「同じく失礼しますー！」

「えへへ、こんにちは終さん」

案の定幼馴染み三人衆だった。ドクターがお見舞いに来てくれた人達だねと気を利かせ、席を外してくれるとのことだ。ホムラ達に友達にあんな無茶させてはいけないよと釘を刺して出ていった。

：もしかして私と三人衆は友達だと勘違いされてるのだろうか。クラスではいつも私が一方的に観察してるだけだし、ほとんど会話もしたことないんだけど。

そういうえばホムラもヤヤカも私を下の名前で呼んでたから、普段から仲のいい関係だと思われたのだろうか。ふたりとも誰が相手でも下の名前で呼ぶ癖があるから勘違いさせてそうだ。

「…その…おはよ」

「シオンちゃんもうお昼だよ！ あ、この椅子使っていい？」

「…どうぞ」

「そのシオンさん、体調はどう？」

「…問題…なし」

三人が椅子に腰掛けるのをぼーっとしながら眺める。座った皆はなぜか神妙な面持ちをしている。なにやら言いにくいことを言い出そうとしてるみたい。

最初に沈黙を破ったのはホムラだった。

「…シオンさん、俺たちを守ってくれてありがとう。シオンさんがいなかったらどうなってたか分からなかった。だからその本当にありがとう」

「…気に…しないで」

「ううんシオンちゃん気にするよ。あなたが身を挺して守ってくれなかったらきつと私は大変なことになってた。たぶん何もできずに死んでたんだと思う。いっぱいケガまで作ってそれでも助けてもらったんだから、もう感謝してもしきれないよ」

「私もお礼を言わせてください。あの時私はなにが起きたのか全然わからなくてなにもできなかった。終さんが助けてくれたから、私達3人はこうして無事にいられました。本当にありがとうございました」

最後にホムラは自分たちにできることならお札に何でもすると行ってきた。

：弱ったな。私としてはヤヤカルート見たさに身体を張ったわけで、要するに私利私欲のために動いただけなのだ。感謝されること自体は嬉しいけど、そこまで手放しにありがとうと連呼されると気が引けてしまう。

お札の方はどうしよう。なんでもって言われたけど思いつかない。

ホムラとヤヤカに付き合ってくれて頼むか？

いやでも二人にはきちんとお互いの気持ちを伝え合い、恋心を育んでいった末のお付き合いをしてほしい。他人に頼まれたから恋人ごっこするのは解釈違いだ。この案は却下。

あ、でもそうだ。このままだとホムラにとつては幼馴染みが二人いるわけで、熾烈なヒロインポジの奪い合いが起きる可能性がある。一応ミナミちゃんはストーリーリー上で、ホムラとヤヤカがいい雰囲気になったらもとより身を引くつもりだったとの供述があるが、ヒロイン同士で争いが起きる可能性を否定できない。

それなら私がかしてホムラとヤヤカの関係を取り持ち、ミナミのメンタルケアもできるようなポジションにつけたら解決ではないだろうか。そうだそれがいい。

そう私は恋のキューピッドになればいいのだ。

あとミナミのメンタルケアも行ってヤンデレ化も防ごう。ルート次第ではミナミは

ヤンデレヒロイン落ちすることがあるのだ。

できれば他ヒロインとくつついたホムラを後ろの方で腕組みしながらしたり顔で祝福するルート。つまり後方彼氏（彼女？）面しているミナミに仕立て上げられるように介入したい。

そうと決まれば話は早い。私を幼馴染み三人衆の近くに置かせてもらえばいいのだ。

「…お礼…なんでもいいって…言った？」

「ああ！俺たちにできることならなんでもする」

「…じゃあ…私も入れて…異能部に」

「柊さん、それは…！」

それは危険だと言いたいのだろう。まあ確かに私の異能は貧弱極まりない。仮に『展開』を使った状態でホムラと模擬戦でもやらせてもらえば、デコピン一発で沈む自信がある。

これは私が弱いというよりは異能部に所属している連中がべらぼうに強いっていう点が大きいが。

でも納得してもらいたい。

一応交渉材料はあるのだ。

直接役に立つことは難しいが、索敵などには有用な異能が私にはある。

「…私の異能は…音を聞く異能」

「音を？」

「…私には雰囲気…動作の予兆が音楽として聞こえる」

「予兆が？ それはアレかな。予知夢の音バージョンみたいな感じ？」

「そうかその予兆を聞く異能で、あの怪異の襲撃も予期していたんだな！」

「うん…だいたい…そんな感じ…でも…精度は…あんまりよくない」

「なるほど…不確実な予測だから誰にも相談せず、一人で対処しようとしてたつてことね」

なにやら勝手にこちらの話を解釈して都合よく勘違いされている。

まあ奇襲は原作のイベント知ってたからですよーなんて言えるはずもない。まあBGMやSEを聞く異能の一環だと勘違いしてもらっておこう。

一人で対処しようとしたのは単純に頼める相手がいなかったからだがまあいいや。

「でもやつぱり危ないよ」

「…いやよく考えてみる。今回自爆までして俺たちを助けようとした人が、今後も似たようなことしない保証があるか？」

「そうねきつとここで入部を断つても、一人でまた誰かを助けようとしそうだわ」

「その時にシオンさんを守ってくれる人はいない。それくらいならいつそ異能部に入っ

でもらって俺たちがフォローしたほうが安全だと思わないか？」

「そっか…たしかにそうですね。このままだととにかく分らないし、それなら入部してもらって首輪をつけちゃったほうがかえって安全かも」

「…首輪ってお前、流石に言い方がアレだぞ」

「私もアレだと思おうよ！」

なにやら3人でひそひそ喋り始めた。

私は音に関わる異能持ちなだけあつての耳はいいぞ。聞こえてるからな首輪とかなんとか。お前たち私のことをなににしかすか分からない爆弾の類だと思ってるだろ。

「わかったシオンさん。それなら俺たちから部長に掛け合ってみるよ」

「…シオン」

「え？」

「…さんは…つけなくて…いい」

「わかったよシオン」

「柰さん、私も下の名前読んでいいかな？」

さん付けが少し煩わしかったので言ってみたら、ミナミもなんか乗ってきた。原作だとかなりの引っ込み思案な子だったからちよつと驚いたけど、他人行儀な名字呼びよりは距離感が近くて嬉しい。

人との交流はあんまり好きじゃないが、原作の有名キャラなら話は別だ。有名人とちよつとお近づきになれたような優越感がある。

「…もちろん」

「じゃあ決まりだな！ 後で必要な書類とか授業のプリントは届けるから待つててくれ！」

「体に気をつけてね！ 私が見たところ大丈夫そうだけどキミはまだ病み上がりだから！」

「私からも、お大事にしてください。一緒に『異能部』で活動できることを楽しみにします」

そう言つて三人衆は医務室から出ていって私一人になった。

なんかかんやあつたけどヤヤカの死亡シーンを回避できたし、二人を引っつけられるよう介入できそうなポジションにつけたのは大収穫だ。

あとはどうにかして二人が恋人になれるようにアシストするかと、ミナミが病むこと



なく二人を祝福できるかだ。

そのためには色々頑張らなくてはいけないだろう。

頑張れ終シオン。私は恋のキューピッドになる！

## 具体的方策

つい一週間前、恋のキューピッドになるとの決意を立てた。立てたのだが、具体的に何をすればいいのだろうか。

原作の設定が生きていれば、高校への怪異強襲イベントや水着回、体育祭に文化祭と様々なイベントがこれから起こることになると思う。その中でホムラは様々な女の子と関わりフラグを立てていくのだ。

しかしそれはあくまで原作の話。ヤヤカが今の時点で生存しているルートは存在しないし、そもそも私自身本来の設定と乖離したイレギュラーだ。本当に自分の知識通りにイベントが起きるとは限らない。

まあ原作の知識を活かして立ち回るのであれば、学園内で起きる事件をそれとなくホムラに耳打ちして、窮地に陥った女の子たちを助けてもらうのが一番だろう。しかし放っておくと委員長や副部長とのフラグを立ててしまいうので危険だ。どうにかしてヤヤカとの好感度をあげられるイベントに誘導していきたいのだが…

異能の力で聞こえてくる日常パートのBGMをイヤホンで遮断して授業を聞き流す。

高校側には事前に申請してあるので、校舎内でイヤホンを使っても怒られない。

おっと授業が終わった。出された課題の範囲をメモしておかないと。

「おつす、シオンちゃん！ 体の調子はどう？」

「…へいき」

「ヤヤカさんそんな大きい声出さないほうがいいよ。ごめんねシオンちゃんびつくりさせちゃったね」

授業が終わった途端ヤヤカとミナミが声をかけてきた。ホムラは教師に頼まれて課題の冊子を職員室へ運びに行ったようだ。

正直めちゃくちゃびつくりした。ヤヤカの声が高いのだ。

驚かせたお詫びとばかりにミナミからキャラメルをもらってしまった。前世は甘いものはあんまりだったが、この身体はむしろ甘いものが好物になっていたのでありがたく頂戴する。

ドクターから授業に出席していいとの許可を得てからかれこれ3日だが、その間幼馴染み三人衆は授業が終わるたびに私の席近くにたむろするようになった。

他愛もない雑談や授業でメモを忘れた場所の穴埋め、昼食などを共にするようになったのだが、私だけ場違い感が強い。

なにしゃべったらいいのかわからなくて、いつも聞かれたことだけ答えてそれ以外は無言になってしまう。コミュ障か？

せつかく輪の中に入れてもらってるのに、キューピッド的立ち回りができていないのはさすがにもつたいない。なにかこちらからアクションを起こしていかなくては。

「…ふたりに…聞きたいこと…ある」

「ウチらに聞きたいこと？ いいよいいよ何でも聞いてー」

何でも聞いていいのか。じゃあ早速踏み込んだこと聞かせてもらおう。

「…ホムラくんのこと…どう思ってる？」

「ホムラのこと、ですか？」

「あー、ン？ なるほどなるほどヤヤカさんわかっちゃいました！ シオンちゃんってばホムラのこと気になるのね？」

「…それは…ない」

「本当にい？」

「…ほんと」

「絶対にい？」

「…ぜつたい」

真顔で否定した。たしかに私の質問のしかたが悪かった。

ミナミは唐突に始まった恋バナの予感に顔を赤くしてる。はわわって感じた。流石はヒロイン。かわいい。

「ふーん、そうなんだ。アイツ結構優良物件だけどね?」

「ゆ、優良物件ってあはは…」

「まあアイツをどう思ってるのかっていうと、アレだね。腐れ縁って感じ。つるんでバカやってたまに怒られて、一緒にいて楽しいって思えるようなヤツだよ」

…?

それって好きってことでは?

脈アリじゃん。放っておいても勝手にひつつくんじゃなからうか。

待って待って落ち着け。前世では判定ガバガバカプ厨と呼ばれた私の好き判定は信用ならない。

「うーん、私もいつしよにいて楽しいっていうところは同じです。ホムラはお人好しなところあるからちゃんとお見張っておかないと、平気で無茶するし放っておけない人って感じ」

しまった、こつちも脈アリだ。

でもまあミナミはオカン気質なところあるし、ヤヤカルートの障害にはならなさそうな気がしないでもない。二人がくつついたときに子どもの巣立ちを見るような目をし

そうだ。

「お、みんなただいま。やっとお手伝い終わったよ」

「おー無事にシオンちゃんに振られたホムラじゃん、南無南無」

「あはは、南無南無」

「え？ 何の話??？」

困惑した様子のホムラ。そのいかにも困ったと言いたげに垂れた眉が面白くて、思わずクスリと笑ってしまった。

## 入部1

腰まで伸ばした髪は流麗な濡羽色。スラリと長い手足に引き締まっていながらも女性的な柔らかさを備えた身体。手元の書類から視線を上げた先輩は、凜としたよく通る声で告げた。

「入部届を出せばすぐに入れるようなモノじゃないってことはキミはもちろん知ってるよね」

私は首肯で返す。

目の前の少女は三年生の先輩。異能部の部長を務める才色兼備の女性。名は神原ヒサギ。

異能はなんの特異性もない単純な身体強化。パワー、タフネス、スピードの全てが最高ランクに高く、更には日々から鍛錬しているため武器を用いた戦闘はもちろん徒手空拳すらこなす怪物的戦力。作中では単身で最強の名を縦ほしままにする異能持ちだ。

そんな彼女と応接用のソファで向かい合っているのは単に入部のためだ。

異能部は怪異への対抗戦力として運用される特殊な部隊のため、入部も一筋縄では行かない。

「知つての通り異能部は学内での扱いこそ部活動となるが、その実態は政府によつて管理された武装組織だ。活動上、怪異との戦闘は避けられないしその際にはどうしても危険がつきまとう」

頷きをもつて返す。

言われたとおり異能部は危険だ。戦闘に駆り出される以上、ケガなどのリスクはつきものだ。だがしかし、その程度では私の決意は折れない。

「だからある程度の戦力がなくてはならない。これはキミ自身の身の安全を確保するためだけではなく、地域住民の方々の安心を守るためにも必要なものだ」

ヒサギ先輩が立ち上がり歩き出す。ついてこいと言いたげな後ろ姿を追いかけ私も席を立つ。

コツコツと踵を鳴らして歩く先輩がやってきたのは、中央都立高等学校の誇る特殊舗装体育館だ。

中に入ると観客席には何人か座っている。見知った顔もいる。幼馴染み三人衆とか原作の登場人物である部員たちだ。

「来たまえ、靴はそのままでもいい」

「…失礼…します」

「この体育館は同意書にサインした者に限り、内部での異能によるケガなどを無効化する



る特殊な結界が敷かれている。痛みまでは消せないが模擬戦にはもってこいの施設だ」  
提示された書類をさっと読み流す。体育館の使用における誓約書だった。自分の名前をサインすると奇妙な感覚が体を走り抜けた。

この体育館はヒサギ先輩が言った通り中でのケガなどが無効化される。原理はよくわからないが、先程の誓約書が鍵なのだろう。

ちなみにこの体育館はもっぱら模擬戦のために使われるのだが、原作では非常にハードなSMプレイのために利用されたことがあったりする。あんまりだ。

「さて説明するまでもなく理解してくれるだろうが、一応警告しておく。これから私はキミを試す。全霊をもつて私にキミの力を見せてほしい。それが出来なくてはキミの入部を認めることはできない。やめておくなら今のうちだぞ」

「……やり……ます」

「そうか、では全力を尽くしてくれ」

BGMが切り替わる。ほのぼのとした日常のそれから、トレーニングモード用のものに変化した。先輩がどこかから取り出した簪を髪にさす。

「……いき……ます。『展開』……っ！」

「来たまえ。『展開』」

意識領域を拡張。体内異能抑制器官を緊急停止。人類の獲得した超能力、すなわち異能を展開。

衣装が変貌する。学生服が黒と紺で統一された装飾過多のワンピースに変わり、胸部、腰、各関節、こめかみを金属の防具が覆う。魔法少女と騎士のあいの子といった外見のコスチューム。これが私の戦闘形態。展開後の姿だ。

亜空間に手を伸ばしその先にある音叉の形をした槍を引き出し構える。

対してヒサギ先輩は白の小振袖に紺の袴という、落ち着いた様相のコスチュームである。

異能部部員たち本来の『展開』ではもつとド派手な演出音とカットインとともに変身シーンが描写される。あと『GOLDEN DAWN!!!』とか『Coronal mass ejection!!!』とかキャラ固有のSEもあってめちゃくちゃかっこいい。特撮モノみたいなノリで派手っ派手の演出だ。

今回それがないということは異能の出力を絞っているということだろう。要は手加減されているのだ。

装飾が省かれた低出力の『展開』のまま、ヒサギ先輩は虚空より現れた薙刀を中段に構えこちらを見据えてきた。

## 入部2

やはり威圧感が凄まじい。作中最強の名は伊達ではない。ただ相對しているだけで尻尾巻いて逃げ出したくなる眼光だ。

先程からこちらは穂先を動かしたり、距離を変えたりしているのだが、ヒサギ先輩は中段に構えたまま微動だにしない。

これでは埒が明かないどころかいずれ私の集中力が保たなくなるだろう。なによりこれは私の力を先輩に見せるためのものなので、私から打ち込んでいくのが筋だ。

不動のヒサギ先輩の構えに対し、私は姿勢を極限まで低くする。過剰な前傾姿勢と穂先を身体の後ろまで回した異形の構え。

「ほう？変わったことをするね」

BGMやSEを聞くのが私の異能だが、展開中であればもう少し強力になる。具体的には音の媒介である空気を多少操ることができるといふものだ。手先からちよつとした突風を吹かせたり、少し遠くにそよ風を生んだりすることができる。

だから今回はこうする。

最小限の踏み込みから石突きによる最短距離の打突。薙刀を握る右上腕を狙う。

それと同時に音叉の形をした穂先から指向性を持たせて突風を吹かす。ジェットエンジンジンの逆噴射の原理で、本来の私の身体能力では出せない速度へと一步踏み込ませる。

私の構えから予測されるであろう「遅いだろう」という予感を覆す不意の一撃だ。

あとついでに目に向かってそよ風を吹きかけてやろう。目眩ましにでもなれば上々だ。

「…っ！」

「——ほう？」

しかしどうやらダメそうだ。ガードの発生のSEがすでに聞こえていた。

「これは驚いた、目元にそよ風が吹いてくるとは予想外だった。場合によっては有効だろう」

「…っ、う…」

ジャストガード成立音とカウンター成功音が鼓膜を揺らした。

簡単に穂先を捌かれたと思ったなら天地がひっくり返って、私は寝そべっていた。どうやってか投げられたらしい。全然反応できなかった。背中を強打した痛みに息が漏れ

る。

突きはなんなく捌かれてしまったし、ちよつとした小細工として目元に吹きかけたそよ風のほうが評価されててなんだか悔しい。

少しふらつきながら立ち上がったが、その間追撃をされることはなかった。

「驚いた、驚きはしたけどあまりに軽いな。先程のが全力か？」

煽られているわけではない。多分本当に私の打ち込みが全力だったか疑うレベルで軽かったのだ。一応穂先を押し付けて高周波を浴びせるなどすれば多少は破壊力を上げられるが、そんなことできる状況は考えにくい。

「…参ったな、これは、流石にな」

ヒサギ先輩は困った様子だ。

原作において彼女はバトルフェイズのチュートリアルを務めてくれる。SDキャラたちがわちやわちやと戦うバトルではあるが、リアルタイムでガードや攻撃、必殺技の選択を要求されるなげに奥の深い仕様なだけあって、かなり丁寧に指導してくれる。

チュートリアル中に素つ頓狂な操作をしても文句一つ言わず教えてくれる彼女が、これはダメそうだという表情をすることにちよつと危機感。

これは自分の得意分野でアピールしなくてはまずそうだ。

「…先輩から…来て…ください」

「ほう、そちらの方が都合がいいか？」

……！

来る。通常攻撃のコマンド音。原作では通常攻撃に音の違いなんてなかったが、今私には音がどのような動作の前触れなのか感覚的に理解できる。

薙刀と槍がすれ違うように打ち合わされ、互いの軌道が変わる。先輩がどのような通常攻撃を使うのかSEから判断し、その軌道上に自分の槍を置きに行くイメージ。

恐らくは十二分に加減されているであろう速度の薙刀を落ち着いて捌いていく。私にはパワーもスタミナもまるでないが、動作を事前把握できるSEを聞く異能と過敏な身体感覚があれば、攻撃を凌ぐだけならなんとかなる。

まあこの前のエネルギー弾のように、後ろに誰かを庇ってる状況ではないなすことも捌くこともできず受け止めるしかないのです、なんでもかんでも凌げるわけではないが。

「ほう、ほうほう！ なるほどよくやる。私の動きが視える、いや聞こえているんだな！  
これはおもしろい！」

「……っ……はや……おも……」

先輩の動きがどんどん速く重くなっていく。どこまで耐えられるのか試しているつもりなのだろう。本当に際限なく強くなっていく。だんだんついていけなくなつてそろそろ限界。

そういったところで先輩の手が止まる。

「そうかだいたい理解した。なら仕上げといこう。最後の試験だ、ちゃんと見切れよ」  
「……」

槍を握りしめる。手汗で滑りそうだ。

甲高いSE。特殊技チャージの音だ。覚えている。この技の名前、性質、消費MP、そして発動条件。

ああなるほど。

先輩の姿がかき消えるように加速し、私のもとに迫る。とても目で追えてなどいないが、その技の挙動なら知っている。

挙動だけでない、その性能は網羅している。例えば威力とかデメリットも。

私は槍を手放して両手を広げた。

姿勢を落とし前に踏み込む。

凄まじい速度で私の目前まで接近した先輩が、不自然な挙動で止まった。

その腰に絡まるように飛びつき、転倒を狙う。狙ったが全然動かないな。大地に根を張ったかの如き不動。なんだこれ。重：

え、どうしようこれ。タックルのつもりですがみついたけど全然動かない。

見上げれば驚いたような目でこちらを見る先輩と視線が合った。気まずい。

「なぜわかった？」

「…なにが…？」

「私がなぜあそこで止まるとわかった？」

「…特殊技…『螺旋槍・百舌鳥』…成立条件…未達成」

「見えた、いや聞こえたのか？ 私の技が」

ヒサギ先輩の放った必殺技『螺旋槍・百舌鳥』には事前に異なる種類の技を出していないと成立しないという特殊技である。多分技の速度を見切り、反応できるか確認するためにあえて途中でキャンセルされ止まってしまいう特殊技をチョイスしたのだろう。

いくらケガをしないとはいえ、まともに先輩の特殊技を受けてしまつては痛みで失神しそうだし気遣いしてもらえたわけだ。

まあ私はその厚意につけ込んであわよくばイッポンいただこうと思つたのだが全然だめだった。転ばせられる気がしない。体幹おぼけか？

「…そうかわかった。うんいいだろう、少し火力に難があるがそれだけ動けて予測能力もあるんだ。きつとキミは異能部で活躍できる」

「…わっ」

頭に手を乗せてわしわしと撫でられた。

思わず瞑ってしまった目を開けると、先輩は腰を落として目線を合わせている。



「入部を認めるよ柊シオン。私は部長としてキミを歓迎しよう。これからよろしくたのむ」

「…よろしく…おねがい…します」

「はは、喋るのがあまり好きではないなら無理しなくていい。その敬語も私相手なら省いて構わないよ」

「…ありがとう…せんぱい」

そんなこんなで私の異能部への入部が決まった。

## 眩しいものを見るような目は

先日無事に異能部への入部が決定し、部員の方々には挨拶だけさせてもらった。扱いは非戦闘員となるらしい。確かに私はザコ怪異相手でも単独で撃破することが難しいので順当な采配だ。

私は日常パートと戦闘パートのBGMを聞き分けたりできるので、索敵やら怪異の出現タイミングをある程度絞り込める。普段怪異出現の予測をしている副部長の負担軽減や、予測精度の引き上げという方向で貢献していけそうだ。

ちなみに副部長先輩の予測に曰く、次の怪異出現は明日の放課後あたり。同時に2箇所に出るとのことだ。そのうち片方は大型の強めな怪異、もう片方は雑魚がたくさん湧くらしい。

「それで俺たち1年が出動ってわけだな」

「二箇所に出現するなら二手に分かれるのがいいよね」

「そうですね」

ということとで幼馴染み三人衆十異物<sup>私</sup>達はファミレスで作戦会議だ。異能持ちの人間

はライセンスを取得して怪異に対処する限り、いろんなお店を特別料金で利用できる。なので異能部の面々は作戦会議をするときは部室ではなく、ファミレスとかでやることが多い。

「まあ順当に考えるならヤヤカとミナミでデカいほう、俺が一人でザコか？」

「うーんどうでしょう確かにホムラの炎は集団に強いですけど、撃ち漏らしの可能性を考えると私が行ったほうが良くないですか？」

「それでも撃ち漏らしが出る可能性は変わらないでしょ。いくらなんでも一人で全部倒し切るのは厳しいよ」

先程から会話に入れてない。この体になつてから口がうまく回らなくなつてしまったので、あんまりおしゃべりに参加できないのだ。

…それにしてもこれはまずい、一人だけ本当に異物だ。悠長にデザートのコーヒーゼリーをつついている場合ではない。

「…わたしと…ミナミで…ザコやる…？」

「え、いやそれはどうなんだ？ 危なくないか？」

危ないか？ まあ確かにそうかもしれない。

でもここでミナミと一緒に雑魚狩りに行けば、ホムラとヤヤカはボス相手に共闘&amp;mp; ;二人の仲も縮むかもしれない。最高だ。そのままくつついてくれ。

「…でもそれ結構いいんじゃないですか？」

「ミナミまで変なこと言うなよ。シオンは非戦闘員だ。明日は待機してもらおうはずだろう？」

「でも部長は私達4人で対処してくれって言ったんですよ。初めから先輩は私達全員が活躍する前提で話してました。なのにシオンちゃんだけ置いてけぼりは良くないと思う」

予想外にもミナミから援護射撃をもらえた。そういえばこの子原作だとホムラとヤヤカの仲を応援している立場だった。ヤヤカが死亡して以降はヒロインとしての株が急上昇したとはいえ、この世界ではホムヤヤ派のまま。心強い味方だ。

「たしかにそうだね。ほらさつき言ってた撃ち漏らしもシオンちゃんの異能があれば防げるんじゃないかな。逃げられてもどこに行ったとか調べられない？」

「…いける…よゆー…」

ザコが逃げた先を追いかけることくらい簡単だ。戦闘パートのBGMが大きい方を探すだけでいい。もしくは逃走する雑魚を追いかけるイベントのときの特殊BGMが聞こえるかもしれないし、いずれにせよ怪異の逃げ先ならいくらでも判別できる。

「うーんだけどやっぱり危ないだろ？」

「大丈夫ですよ、面制圧に関しては私は大得意なのでシオンちゃんの前までは通させま

せん」

「まあまあそんなに不安だったら私達でデカいほうをちやちやつと片付けて加勢に行けばいいでしょー！」

「…たよりに…してる」

ホムラは心配性だな。もとよりお人好しなタイプの人で困ってる人間は片っ端から助けないと気が済まない性格だ。いくら危険が少ないとはいえ、非戦闘員として扱われている私が前線に立つのは不安になるのだろう。

「そうか…そうだな。一年で協力して対処してくれて言われたのにシオンだけ置いてけぼりは悪いしな。わかった2対2で分かれてやろう」

「…ん…りよーかい」

「ただし無理は禁物だからな。ミナミも頼むぞ、危ないことしないか見張つといてくれ」

「もちろんです」

「ヤヤカは俺とデカいほうだ。さっさと片付けちまうぞ」

「おっけー！」

そうやって明日の作戦は決まった。

ホムラとヤヤカの仲が進展することを願うばかりだ。



シオンがデザートを食べ終えたあと精算を終え、ファミレスを出た。シオンと俺たちの家は離れた位置にあるためここでお別れだ。振り返れば小さな背中が遠退いていくのが見える。

ここまで離れてしまえばシオンには聞こえないだろう。俺は口を開く。

「俺はやっぱり心配だ。シオンには待機してもらった方がいいと思う」

「まあだそんなこと言ってるの？ 部長もシオンちゃんの自衛能力は十分だって言ってたよ」

「私もホムラはちよつと過保護すぎると思うよ」

過保護か。たしかにそうかもしれない。

シオンの異能は戦闘向きではなく出力も弱い。だけど本人はそれに自覚的であるし、彼女はいくら幼く見えても俺たちと同じ高校生だ。自分で危険性を判断することはきつとできるだろう。

でも、それでも心配だ。

初めてシオンが異能を使つたのを見たときを思い出す。

俺たちが感知し得なかった奇襲に反応し、身を挺して守ってくれたときのことだ。彼

女の瞳には危うい狂気があったのだ。

「たしかにシオンは自己防衛くらいできるだろうな。それだけの能力はある」

「だったらいんじゃないの?」

「ダメだ。自己防衛はできてもアイツはするつもりがない。わかるだろ?」

反論しようとしたヤヤカが沈黙する。シオンは自己防衛はできる。だが俺たちに危険が及ぶとなれば平気で身をなげうつ。そういつた確信がある。

彼女の瞳の中の狂気を思う。彼女はなにか俺たち三人に対して特別な感情を抱いているように見える。なにか眩しいようなものを見ている、そんなようにみえて仕方ない。

ミナミもヤヤカも彼女の奇妙な感情に思うところがあるようだ。俺たちが覚えていないだけで、彼女と関わったことがあったのかもしれない。一方的に俺たちの事を知っているような雰囲気があった。

多分その感情が、平気で身を挺する彼女の精神性に大きく関わっているんだと思う。

「違いますホムラ。だからこそ一緒にいないといけないんです」

「それは…:どういう意味だ?」

ミナミの言っている意味がよくわからない。シオンを危険から遠ざけたいのにあえて危険なところへ同行させるとはどういう了見だろう。

「考えてもみてください。シオンちゃんは異能で危険を察知することができます。それはシオンちゃん自身のものだけじゃなくって私達の危険もです」

「そうだな。シオンがケガをしたのも俺たちの危険を悟ったからだった」

「それなら一人で待機しているシオンちゃんが、私達の危険に気付いたら何をすると思いますか？」

「たぶんなにがなんでも飛び出してくるよね。シオンちゃんそういうことしそう」

「そうだな…いかにもやりそうだ」

その通りだ。必ずやる。というかやった。次もきつとやる。

「ホムラ、あなた自身が言っていたことです。その時私達が隣に居ずに誰が守るんですか。あの子が身体を張るのならもつと強い私達が身体張らなくてどうするんです」

「…それは、そうだけど」

でも俺はミナミにもヤヤカにも身体なんて張ってほしくないのだ。傷ついてほしくないのではないのだ。

「はいはいホムラの言いそうなことはもう分かるからそれ以上言わないで！ 誰にも身体を張ってほしくないとか言うんでしょ！ それ一番身体張ってるホムラにだけは言われたくないよ！」

「そうです。自分は平気で無茶するくせに私達は駄目だっというんですか？ それはズ



ルいですよ。そう言いたいならホムラだって無茶しないでください」

うっ。痛いところをつかれてしまった。

「…わかったわかった。降参だ」

「わかればよろしい」

「でもいいのか？今回シオンの隣に居るのはミナミだ。その…シオンのこと、頼んでもいいのか？」

「頼まれるまでもありません。私自身シオンちゃんのことには気に入っちゃいましたので。二人きりになれるのなら役得と言ってもいいくらいです」

役得って…

たまにミナミは変な言い方をするな。

そりやたしかにシオンは俺たちのピンチに颯爽と現れ、救ってくれたのでヒロイツクな感じがあった。あれでシオンが男だったら吊り橋効果で一目惚れなんてこともあるのかもしれない。

だがミナミもシオンもついでにヤヤカも女の子だ。幼馴染み二人に浮いた話はないかっただけとは言え、そういう女の子同士との恋愛？みたいなのに興味があったりした雰囲気を感じたことはなかった。

もっという二人が恋愛に興味持ってる様子を見たことがないな。高校生になって

も俺たち三人組は悪ガキ三人衆みたいな雰囲気のままだ。

「…ヤヤカも頑張ってください。二人きりですよ二人きり」

「…わかってるわ」

たまに幼馴染み二人が言っていることがよくわからない。

何の話をしているんだらうか。

妙に大人しくなったヤヤカ、不自然なくらい上機嫌なミナミと共に帰路を歩いた。

## 一年三人衆＋αの活動記録1

授業もホームルームもようやく終わって現在時刻5時前。副部長の予測によればそろそろ怪異の出現時間になる。

周囲には警報が鳴らされており、住民の避難も人払い兼怪異逃亡阻害用結界の敷設も完了した。

私は既に展開を終えている。紺のワンピースにプロテクターのついたような軽鎧。バトルドレスと言ったほうが誤解なく伝わるだろうか。

対して隣に立つミナミはセーラー服のままだ。彼女ほどの異能の使い手なら、展開時の演出に攻撃判定が追加されるらしい。この間のヤヤカ死亡シーンになるはずだった完全な奇襲は例外みたいなものらしい。見てから展開は余裕で間に合うがそもそも見えなければ間に合わないとのことだ。

「ふーんシオンちゃんの格好やっぱりかわいいですね」

「…そう?」

「はいかつこよさと同居した可愛らしさを感じます…あ、コラあんまり離れると危ないので逃げないでください」

ミナミはしげしげと私のコスチュームを観察している。素材の手触りを確認したいのか、ちよつと手に取ったりされた。褒められるのは素直に嬉しいが、流石に恥ずかしいのでやめてほしい。

「こつちの槍は…音叉ですか？ 音が出たりするんですか？」

「…だせる…がんばれば…音楽も鳴らせる…」

「それはすごいですね。今度余裕のあるときに聞かせてください」

「…っ…くる…かも」

「…そのようですね」

エネミーが近辺にいるときの警戒BGMが変化。エンカウント音と共に眼前の空間がひび割れる。

割れた空間から雪崩込むように現れるのは小鬼。緑の体表に尖った鼻と耳、極端な円背で姿勢は猫背になっている。体格に見合った小さめの棍棒とポロキレに見を包んだ怪異。通称ゴブリンがどんとと姿を現す。

「…多い」

「そうですか？ それほどでもないように思いますが…」

一応ザコ中のザコであるゴブリンだが、そのぶん数が多い。60以上いるのではないだろうか。周辺に敷かれた逃亡阻害結界が十分な仕事をしているようで、私達を敵と見

定め逃げ出す素振りが見えない。

流石に相手が雑魚とはいえ欲望に煮え滾った大量の目で睨まれたら怯んでしまう。緊張に手汗が浮かんできた。ちよつと怖い。

突然肩に手を置かれて驚く。振り向けばミナミの手だった。知らずしらずの内に強張っていた身体がほぐれていく。

私の様子に微笑みを浮かべたミナミは、頭につけていた三日月形の髪留めをパチリと外し一歩前に出る。

「…大丈夫ですよ。安心してください」

「…うん」

「いい返事です。ではやってみましょう…『展開』!!!」

三日月のヘアピンを握りしめて叫ぶ。

『LUNAR CATALYSM!!!』

周囲一帯から光が消失しその中央で淡く輝くミナミ。その輝きが断続的に増加し、その度に身体の随所にプロテクターが装着されていく。和洋折衷の鎧とも袴ともとれる左右非対称の防具。ティアアラ、バングル、タッセルなど各部に見られる装飾は三日月。

髪留めが姿を転じた大型の弓から、天に向けて放たれる嚆矢。

彼女は銀の弓手にして月の狩人。

『In every heroic tale there is a hidden sacrifice.』

鎧矢にて戦を告げる蹂躞者が次なる一矢を番え顕現した。

「…か…かつこいいい…」

「えへへ、見惚れててはいけませんよ？」

ヤバイ。かつこよすぎか？

原作通りの展開シーンではあるが、やはり迫力が違う。見ているか前世のオタクども。私はミナミちゃんの変身を最前席で体験したぞ。

しかし惜しむらくは鳴り響いた英語は私にしか聞こえていない点だ。これほどのかつこいい変身シーンが世界中の人間と共有できないのは人類の損失だ。

ミナミの展開時に巻き起こされた爆風は私にはなんの影響も起こさなかったが、敵であるゴブリンたちは風に煽られひっくり返っている。味方にダメージの行かない範囲攻撃も異能持ちの特権だ。フレンドリーファイアは絶対に起きないのだ。

「それでは手早く片付けましょう。もし視界外にゴブリンが逃げていれば方角を教えてください。見えさえすれば外しません」

「…いない…目の前なので…ぜんぶ」

「そうですか。わかりました」

ゴブリン達が体勢を整える前にミナミは片をつける気だ。弓を天へと向け矢を引き絞る。

『LUNAR CATAclysm!!!』

SEと技名が鳴り響く。必殺技の構えだ。矢の先端に光が集っていく。

そんなミナミのただ事ではない雰囲気に対応して、ゴブリンたちが色めき立つがもう遅い。

「…受けなさい。『ルナ・カタクリズム』!!!」

大気を切り裂いて矢が空へと飛翔する。一条の光となった矢は、空のある一点で無数に枝分かかれし大地に向けて降り注ぐ。

分裂した矢達が雨の如く降りゴブリンは悲鳴を上げて逃げ惑う。

矢の豪雨がそのピークに達したとき、大地に突き立った矢のすべてが光り輝き爆発した。

『LUNAR CATAclysm!!!』

再びのSEと技名。

「こんなものですね」

終わっていた。蹂躪であった。

本来ミナミの必殺技である『ルナ・カタクリズム』は、戦闘中に通常攻撃を命中させ

た際に上昇する『満月レベル』に応じて威力の向上するスロースタートな技だ。

しかし今回は初回の攻撃が必殺技。つまり『満月レベル』は初期値。最低威力で放たれていたということだ。

それでこの威力。圧倒的すぎる。昨日撃ち漏らしを懸念していたのが馬鹿らしくなる。

「…？ どうしたんですか？」

「…その…つよいなって…」

「そうですね。先輩達に比べればまだまだ未熟者ですが…」

「…うん…つよいよ…かっこいい…」

「ふふ…そうですね、では素直に褒められておきます」

BGMは戦闘終了後の経験値精算時のものに切り替わっていた。勝ったのだ。私何もしていないけど。

きつとホムラとヤヤカも似たような強さなのだろう。一応二人の加勢に行こう。もう終わってるかもしれないが。

そうして私とミナミはあとの二人の戦場へ向かった。

「では行きましょう。しっかりつかまってくてください」

「…うん」



スピードはともかくスタミナに不安のある私は、ミナミの背中におぶってもらって移動する羽目になった。流石に恥ずかかった。

一年三人衆十 $\alpha$ の活動記録2

「まだ始まってなかったみたいですね」

「……うん……」

「いくら副部長の予測が正確でも5分くらいの誤差は出てしまいますからね」

建物の上をびよんびよん飛び越していくミナミの脚にかかれれば、移動はあっという間だった。まだ二人の戦場からは少し離れているがどうやら怪異は現れていなかったらしい。

二人は落ち着いた様子で雑談しているみたいだ。

「……あ……くるかも」

パリパリと空間がひび割れ、中から巨大な鬼が姿を見せる。緑の体表のゴブリンとは打って変わってこちらは赤鬼。日本昔話などに出てきそうな黄色と黒のボロを履いた体長5メートルはあろうかという巨体だ。

鬼がのっそりと姿を表している間に私達はホムラたちと合流できた。

「お、そっちはもう終わったんだな」

「はい……シオンちゃんが撃ち漏らしの有無を把握してくれるのが大きかったです」

「おーそれはいいね！ よくできましたヤヤカさんが褒めてあげます！」

「ヤヤカ、前をちゃんと見ておけ。もう始めるぞ」

ふざけている場合ではない。もう赤鬼はやる気満々といった様子だ。ホムラは私とミナミを下げさせる。当初の予定通り二人でやるということだろう。

巨大な棍棒を肩に担ぎ上げて咆哮した。鼓膜が破れそう。地面が音圧でビリビリと震える。

「…ふうん、あんまり大した事なさそうね」

「油断はするな。慢心なく対処するんだ」

「そうね。じゃあ私から始めるわ」

ヤヤカはそう言うと言から下げたネックレスに手をかけて、一歩前に踏み込んだ。

「いくよー『展開』!!!」

十字架のネックレスを引き千切り叫んだ。

『GOLDEN DAWN!!!』

ヤヤカを中心として大地に光の魔法陣が刻み込まれていく。陣の外周縁部から立ち昇った光の柱が枝分かれし、ヤヤカの踵から頭まで絡みついていく。光が編まれ、層をなし、万物の侵攻を押し留めるバトルドレスを形成する。

白亜のごとき戦闘用フォームに刻まれる紋様は天使の翼。頭には虹の王冠。手に取

るは光の十字剣。

彼女は光の魔法使いにして剣士。

『When the earth is full of prayers, the golden dawn will come.』

大地を祈りで満たす夜明けの権化が今顕現した。

最高だ。かつこよすぎる。

本来の原作では彼女の変身シーンはなかったのだ。展開を行うことなく彼女は奇襲で死んでいた。

それがこうして見る事ができた。

公式サイトで光魔法の使い手なのに戦士として紹介されていた理由がわかった。ヤカは光魔法で剣を象っているのだ。魔法使いなのに戦士とはこれいかにという長年の謎が解けた。

最高。感無量だ。

赤鬼はヤカ力の放った光に目が眩んだようであたらを踏んでいる。気持ちはわかる。こんなの見たら目も眩むわ。

「じゃあ俺もだな」

ホムラが腕をまくりながら一歩踏み込んでいく。

「いくぞ!!!『展開』!!!」

ホムラは右腕のバングルを逆の手で引き抜くようにして叫ぶ。

『Coronal mass ejection!!!』

ホムラを中心にして熱波が戦場を駆け抜ける。中央にて座す彼は自身が放つ炎の光でシルエツトと化した。

総身を炎に転じたホムラの体に巻き付くようにして構成されていく赤い軽鎧。融解した大地へと手を突き刺し引き抜くは刀身が炎の大剣。

彼は炎の戦士にして嵐の如き剣闘士。

『Light the flames and burn up all your enemies.』

自身を燃ゆる太陽と定義した戦士が、炎となりて顕現した。

こつちも最高だ。やっぱり主人公といえは炎属性。原作は多分に特撮モノへのリスパクトを含んでいただけあって、変身シーンには滅茶苦茶な熱量を注いで作成していた。

目の前のホムラは原作以上の迫力で展開をしてくれた。もうこれを見ただけで今まで生きてきた意味があるように思える。

今なら死んでも悔いはないかもしれない。嘘言つた。必殺技も見てから死にたい。

別に死にたいわけではないが。

「よし……じゃあ——」

「——やっちゃおうか！」

二人は全くの同時に駆け出した。

速い。とてもではないが目で追えない。

瞬く間に戦場を駆け抜ける金と赤の軌跡が、鬼を四方八方から打ちのめしていく。

SEで判別する限りはなんのスキルも使用していない通常攻撃だ。それでもこうまで凄まじいのか。

しかし赤鬼も雑魚とは一線を画する怪異だ。これほどの連撃を受けても倒れることなく反撃している。途方も無いタフネス。この耐久力は原作でボスとして扱われていただけのことはある。

「結構しぶといね」

「たしかにな」

上から叩きつけられた棍棒を、二人が息を合わせて剣で弾き返した。なんだそのコンビネーションは。お二人は付き合ってるのですか？

渾身の反撃を弾かれた赤鬼は体勢を大きく崩している。その隙を逃すほど我らが主人公ホムラは甘くない。

「いいで決めるー！」

『Coronal mass ejection!!!』

鳴り響くSEと技名。彼らの切り札の名は展開時に既に開示されている。

ホムラの剣から炎が消え刀身が黒く染まっていく。内部に膨大な熱量が集中している。

赤鬼がどうか体勢を整え正面を見据えたとき、既にホムラの必殺チャージは阻止不可能な状態まで進行していた。それを理解した赤鬼はイチかバチかの賭けにでる。

すなわち突撃だ。

頭上に掲げられた棍棒が豪速で振り下ろされる。

しかし、もう遅い。

黒く染まった剣が輝きを取り戻す。水平に構えられた剣の切り上げと共に解放される、圧倒的熱量と質量。

「いくぞ『コロナルマスイジェクション!!!』」

音はなかった。ただただ光に埋め尽くされていく世界。その中で鬼のシルエットがヤスリにかけられたように削り取られていき、ついに消える。

『Coronal mass ejection!!!』

遅れての爆音、爆風。そしてSEと技名。

コロナルマスイジエクシオン。一定時間のチャージと引き換えに単体高倍率のダメージを叩き出す必殺技。

ホムラが作品を通して愛用した、初期必殺技であり最強の必殺技でもある。

「こんなもんだな」

「…私もパなしたかったんだけどな」

ヤヤカがなにやら活躍できなかつたことについて文句を言ってるみたいだが、私はそれどころではない。

いやーかつこよすぎる。こんなの情緒がめちやくちやになつてしまう。

「…シオンちゃんは必殺技とかつて好きなんですか？」

「…うん！」

「おーすごい今まで見たことないくらい目がキラキラしてる！」

「…ヤヤカのも…みたい…！」

「いいよ！　じゃあ早速パなしちゃうか！」

「やめろヤヤカ。ここにはなにもマトはないんだぞ。周りに被害が出る」

「うえーそれもそうか…ごめんねシオンちゃん。また機会があったらお披露目するよ」

「…みたい…そのときは…おねがい！」

ヤヤカのもぜひ見たかった。



だけどこれ以上望むのは罰が当たりそうだ。

3人の展開と2人の必殺技を生で見れたのだ。今夜はもう興奮で寝られるか怪しい。

## 学生生活は危険がいっぱい

中央都立高校のグラウンドは非常に広い。体育の授業ではその広大さを活かして4クラス同時に行われる。

今日の授業ではソフトボールをすることになっている。もうすぐある学校行事の球技大会で、全校生徒が楽しく参加できるように練習を重ねている段階なのだ。

「いつも思うけどシオンちゃん着替えのとき隅っこに行っちゃうよね」

「…っ！」

更衣室の隅でそそくさと体操服に着替えていたらヤヤカがひよいと顔をのぞかせた。

いや…だつて恥ずかしくないか？ 肉体的には同性とはいえ肌を見るのも見られるのも普通に恥ずかしい。

ましてや私の前世は男。他の人の素肌を見るのは気が引ける。悪いことしてる気分になるし変な気分にもなる。たいへんよろしくない。

というかヤヤカも見ないでくれ。まだセーラー服脱いだばかりでほぼ下着姿なんだ。ほら他のクラスメイトもちらちらこっち見てる。

「…もしかして恥ずかしいの？」

「……………うん……」

「……ほうほうこれはこれは」

「こらヤヤカ離れなさい。シオンちゃんごめん私が壁になっておくから今のうちに」  
新しいオモチャを見つけたとでもいいかげんな表情のヤヤカを押し退けたのは、どこからともなく現れたミナミ。正直助かります。

ミナミが壁になってくれたおかげで他のクラスメイトの視線も感じなくなった。

「……シオンちゃん上の体操服前後逆ですよ」

「……ほんとだ」

でもよく考えたらミナミにはめちやくちや見られてるわけなのであんまり状況変わらなくないか？

ごく自然に前後逆の体操服を脱がされ正しい向きで着せられながら、私は考えるのが面倒くさくなって思考を放棄した。なんかミナミは世話焼きのオカンみたいな雰囲気あるしまあいいやろ。



打席に立ったはいが重すぎるバットに振り回されて転んでしまったシオンちゃん

を見る。何度見ても小柄で本当に高校生か疑ってしまいそう。

立ち上がって再びバットを構えたシオンちゃんはいつもの無表情。だけど大きな金色の目の淵にはちよつと涙が溜まっててかわいい。次の投手の投球が来る。

あ、打った。

「おーいけー!!」

「当たった当たった!」

チームのみんなが声援を飛ばしている。もちろん私も応援中。

でもボテボテのピッチャーゴロ。シオンちゃんはびっくりするほど脚が速いけど流石に限度がある。あえなくアウトだ。もとよりツーアウトだったので、これで攻守交代。三塁まで進んでいたランナーも得点することなくかえってくる。

チャンスをものにできなかつたシオンちゃんはずいぶん落ち込んでいる様子だ。表情は全然変わっていないのにここまで落ち込んでいるのを感じるのは驚き。

他のチームメンバーにも気にしないでつて声をかけられながら自分の守備位置に走っていった。

シオンちゃんはもともとあんまり目立たない子だった。消極的というよりは、いつも積極的に埋没しようとしているというかなんというか。まるで自分は本来ここにいるべきじゃありませんっていいたげな感じの子だ。

その雰囲気がちよつと変わったあの日の出来事を思い出す。

初めての異能部としての活動。そしてその日の帰り。バス停でばったり出会ったシオンちゃん。そして、奇襲。

私——須藤ヤヤカにとつて終シオンという子は命の恩人だ。

あのとき、あの場で狙われていたのは私だった。シオンちゃんが割り込んでくれなければ私はあそこで死んでいただろう。

あのときのシオンちゃんはかっこよかった。ピンチに訪れるヒーローみたいで素敵だった。私がホムラのことを、す、好きになってなかったなら危うく惚れていたかもしれない。

というか実際ミナミはシオンちゃんに惚れ込んでしまつてる。あれはもうぞつこんだ。本人が言っていたんだし間違いない。

実を言うと私はミナミからシオンちゃんの外堀を埋めるためのお手伝いを頼まれていた。その代わりに私とホムラが、その、恋人的な意味で付き合えるようになるための手助けをしてくれる。

云わば恋人作ろう同盟だ。ミナミはシオンちゃんを手籠めにできて、私はあの鈍感木念仁ホムラと恋人になる。

流石に「手籠めにする」という言い方はどうかと思うのだが、ミナミ本人が言つてた

原文ママなのでしかたない。たまにミナミは言ってることが過激だ。

まあ私にとってミナミは16年つるんできた幼馴染だ。大切な人だから恋路は応援したいし、多分ミナミならシオンちゃんも幸せにできるんじゃないかな。あの子義理堅いし、好きな人のためになら頑張れる子だし。

おっと、こちらに打球が飛んできた。

サードを守っている私は転がってきた打球を捕り、ファーストへ送球。一塁の子はきつちり捕球してくれてアウト。

あつという間に敵チームの下位打線は凡退して攻守交代だ。

「ねえヤヤカ、最近終さんと仲いいみたいね」

「うんそうだね！部活も一緒になったしね！」

ベンチに戻るとチームの子が話しかけてくる。一塁のランナーコーチに向かったシオンちゃんについて聞かれているのだ。

「なにかコツみたいなのあるの？あんまり他人と関わるの好きそうじゃない雰囲気あつたけど」

「コツ…とかはないけどとりあえず話しかけてみたらいいと思うよ！お菓子とかあげればすぐに仲良くなれると思う。案外あの子ちよろいし」

「ちよろ…いや確かにそんな気はしなくてもないかも」

多分ミナミに餌付けされてる様子を思い返しているのだろう。あの子は見た目に反さずお菓子が好きだ。しかも駄菓子を餌にされたら不審者にもほいほいついていってしまいそうなくらいちよろい。

「うーんお菓子か。でもそれはやめておこうかな。ミナミちゃん怖いし」

「あーたしかにそうかも！」

「男子なんかミナミちゃんの一睨みでビビりまくって近づこうとしないし」

ミナミ。どうやらあなたの牽制は効いているようです。でもちよつと怖がられてるぞ。幼馴染としてそれはどうかと思わないでもない。

別のチームに振り分けられて遠くで試合をするミナミが、小さくくしゃみしているのを見つけて思わず笑ってしまった。

## 馬の骨

球技大会の結果は16クラス中6位とパツとしない成績だった。男子の部ではかなりの好成绩だったみたいだが、女子はあんまりだった。まあ仕方ない。

クラスメイト達とわちゃわちゃソフトボールできたのは楽しかったし親睦を深めるっていう点では大成功なのだろう。

「えーお前ら球技大会は楽しかったか？」

「負けて悔しいです！」

「そうかー。んじゃその悔しさは中間テストの方にぶつけてくれー」

担任の気の抜けた声から飛び出す中間テストなる悪夢。当然教室はブーイングの嵐。試験まであと2週間を切っているのだ。

「俺に文句言っても変わんないからなー。赤点とらないように頑張ってくれー。他連絡あるやつはいるか？ ないならホームルームは終了ということで」

とは言っても所詮高校1年前期の中間テストだ。これでも授業とかは真面目にやってるし復習もバツチリ。そこまで心配する必要はないだろう。

問題は彼だ。



「やべえ試験勉強全くやってないわ。っていうか範囲どこからだっけ？」

「私がメモしてあるので後で教えます。早速今日から試験対策ですよ」

「わかんないところは私達が教えるから安心しなよ」

「…いつも悪いな。助かるよ」

我らが主人公ホムラくんは作品を通して赤点常習犯だ。一応育成の過程で賢さを伸ばしておくとなんかなくなりますが、かなり絵面が地味で面白みがない。ただ委員長ルートの条件に賢さステータスが関わるので生真面目メガネ委員長を攻略したいときには気をつける必要がある。

まあそんなことはどうでもいい。問題はそのままだとホムラが赤点とりそうということだ。赤点取って補習を受けることになる、補習の教室で別の女の子の好感度を稼いで別ルートに分岐してしまう。それは避けたい。

しかしミナミとヤヤカが勉強に付き合ってくれるみたいだ。これなら安心。二人とも天才だからもう大丈夫。

「シオンちゃんも一緒にやりませんか？」

…あれ私もやるの？



「…? なんかれ割り切れなくなっただけど」

「どれどれ…あーココの係数おかしいよ。移項したときに計算ミスしたんじゃない?」

「ちよつと待つて…ほんとだ確かにミスつてた」

「まあ公式と解法覚えてるみたいだし良さげだね。本番でケアレスミスしなければいいんだけど」

私達は今日もまたファミレスに来た。あんまり注文せずに居座るのは気が引けるが「街の平和を守る異能部御用達!!!」なるのぼりが立つてるのを見て別にいいかとも思った。異能部をダシに宣伝してるようだ。商売根性たくましいな。

席は私とミナミ、ホムラとヤヤカが隣同士だ。もちろん私の采配。この機に二人にはもつと距離を縮めてもらおう。

「飲み物取つてきますね」

「…わたしも…」

ミナミが空のグラスを持つて席を立つたのをいいことに私も同行する。二人きりの時間を捻出してあげるのだ。

「…意外です。シオンちゃんコーヒーも好きなんですか」

「…うん…すき…」

「甘い物好きみたいですし苦いのは駄目なのかなって勝手に思っていました」

ドリンクバーで飲み物を補充しながら他愛もない雑談をする。

試験勉強で肩が凝ってきた。少し休憩したい気分。

「シオンちゃん二人のことどう思います?」

「…どうって…?」

ミナミがポツリと呟く。

「二人はさつきと付き合っちゃったほうがいいと思いませんか?」

「…!」

まさかの爆弾発言。

仮にも原作でのメインヒロインからの付き合え発言だ。ちよつと衝撃がでかい。

「どう見ても二人は相思相愛じゃないですか。ほらあれ見てくださいよ!」

「…たしかに…」

ちよつと位置をずらして私達のテーブルを視界に収める。ヤヤカが身を乗り出してホムラに勉強を教えている。あれもうカップルじゃん。二人はお付き合いされているのですか?

とうかそれはミナミ的にどうなんだ? ミナミ自身ホムラへの好感はあるはずだ。

そうでもなければ幼馴染3人で高校までつるむなんてこと考えられない。

「…ミナミは…いいの？」

「私ですか。もちろんいいですよ。もう小学校の頃からいつくつくのかなんてやきもきさせられてきたんです。さっさと告白なりして私を安心させてほしいです」

流石はミナミさん！

この後方正妻面は彼女にしかできないだろう。頼もしすぎる。

「私にとつては二人とも大事な人です。でもホムラをそういう風には見れないんですよ。なんとというか手間のかかる弟つて感じですよ」

ホムラくん。君は今ミナミに振られました。脈なしですね南無南無。代わりにヤヤカとの関係を手助けしてもらえろぞ。よかつたな。

「それに今の私には好きな人がいますしね」

「…え…？？」

待て待て待て待て。それは聞いてない。ホムラ以外でミナミに好きな人が？

誰だそいつは。どこの馬の骨ともしれない野郎にうちのミナミは渡さないぞ。

「…だれ…そいつ…」

「ふふ…まだ秘密です」

ばちんとサマになったウインクで返された。

えー気になりすぎる。一体好きな人とは誰なんだ。事と次第によつてはその馬の骨

をぶん殴る必要もあるだろう。

ヤヤカルートの開拓の強い味方を得られたと思つたら、ミナミがどこぞの馬の骨に誑かされてるといふ情報まで得てしまった。

それからは試験勉強しても全然頭に入つてこなくて大変な目にあつてしまった。

## 当たるも八卦

「おーションちゃんも結構いい点だね」

「……うん……」

「ホムラも平均点以上とれてるみたいだし」

「……うん……」

「私もミナミもバツチりだったよ」

「……うん……」

中央都立高校では試験で上位100人の点数と名前が張り出される。掲示板の前は人でごった返していたのでヤヤカに見てもらった。とてもじゃないが私では人垣で掲示板が見えない。

多分ヤヤカは学年1位だろう。彼女はアホっぽい雰囲気がないでもないが実際のところ本物の天才だ。授業聞いてれば理解するし別に聞いてなくてもなんとかしてしまふ。なんだそれは羨ましいな。

その点ミナミは秀才タイプ。努力家な彼女はコツコツ勉強して無事高得点を叩き出していた。

それにしてもミナミに好きな人がいるとは。一体誰なんだ。頭の中がそれでいっばいであんまり周りのことを考えている余裕がない。

「そろそろ部活も始まるし気をつけてかないとね——聞いてるかなシオンちゃん？」

「…うん…」

「おーいもしもし」

「…うん…」

「もしかして上の空ですかー？」

「…うん…」

原作でミナミに浮ついた話は出てこない。正ヒロインとしてホムラといい関係になることはあるのだが、それ以外の男とくつつくことはない。寝取られ展開で脳が破壊されることもなかったのだ。

しかし好きな人がいると本人が言っていた。誰なのか気になって仕方ない。

「…ヤヤカ…」

「はいはいヤヤカさんですよ！ようやくこっち見てくれたね」

「…ミナミの好きな人ってだれ…？」

「うえい!!」

ヤヤカなら知っているかもしれないと思って聞いてみたが、どうやら知らなさそうだ。多分ミナミに好きな人がいるということ自体初耳だったのだろう。驚きのあまり素っ頓狂な声上げている。

「…いるんだって…好きな人…」

「あーうんまあいても不思議じゃないんじゃないかなー？ 私は知らないけど」

「…だれ…その馬の骨…」

「う、馬の骨って…」

ウチのミナミをおいそれとよくわからん野郎に任せられるはずがない。多分ホムラもヤヤカも同じ意見だろう。他人の恋路を邪魔するつもりはないが悪い男に騙されてないか目を光らせておく必要がある。

「シオンちゃんは気になるの？ ミナミの好きな人」

「…うん…」

「それはなんで？」

「…なんでって…」

なんでだろう。言われてみればそれもそうだ。私とミナミの関係は言ってしまうえばクラスメイトで同じ部の部員。

ただ私が原作知識なんてものがあるから勝手に思い入れしてるけれど、あくまで私達



は他人同士だ。

「…なんでだろ…よく…わかんない…」

「ふーんそつか。ミナミのこと大切に思ってるんだね」

「…たいせつ…?」

「違うの?」

「違う。」

でもそう確信できるのはなぜ?

やっぱり原作ヒロインでお気に入りのキャラだからだろうか。きっとそれが一番の理由。でもそれだけじゃないような。

「…よく…わかんない…」

「そつか。じゃあ分かるうとすればいいんじゃないかな?」

「…?」

「知りたいんでしょミナミの好きな人のこと。それならシオンちゃんなりに知ろうとすればいいんじゃない?」

それもそうか。いったん自分の中の感情は置いて、とりあえずミナミの好きな人調査でもしよう。ヤヤカルートの開拓はこの際保留だ。

ミナミが悪い男に捕まってないか調べてみる必要がある。

とりあえずはミナミが交流を持ったことがありそうな男子生徒にそれとなく聞き込みでもしよう。



まず同じクラスの生徒は除外だ。理由は簡単。ミナミは幼馴染＋私以外に対しては同じ態度で接してるから。

めっちゃめっちゃガードが堅いなこの子。下心がありそうな男子達だが普通に玉砕してる。南無南無。

私の知らないところで他のクラスの男子と交流があつたりするのかもしれないが、それならいつもつるんでいるヤヤカが知らないはずもない。こちらの線もなさそうだ。

となればあとは異能部の部員だ。その中でミナミと関わりのある男子部員となれば何人かに候補は絞れる。

「この星の輝きが示すのは8日後の危機だな。これまでのデータを参考にすれば恐らくはゴブリンや——なにか思考が逸れてないか？」

「…だいたいしようぶ…」

候補の一人目は副部長だ。

メガネがトレードマークな短髪的美形。いつも眉間にシワを寄せた不機嫌そうな顔

をしているがその実情に厚い漢だ。背も高く細身で異能がなければモデルとして生きていけそうだ。

星読みの異能と頭脳で怪異の出現を予測する異能部の参謀。原作では主人公へのアドバイスやスケジュールの進行などを担当していた頭脳キヤラ。

それが彼。異能部副部長、星見カイト先輩だ。

私は週に一回程度先輩の怪異出現予測に付き合っている。今日もその一環で部室を訪れたわけだ。

「問題なのはこの日だな。出現場所までは突き止めたんだが、そもそも実際に現れるのが怪しい。国の怪異科の方でも同様の予測が出たようで警報の等級をどうするか悩みどころだ」

「…なるほど…シヨツピングモール…」

先輩の示す地点は巨大シヨツピングモール「ヨモグイ」だ。こんなお客さんがたくさん訪れる場所に怪異が出たら大変だ。かといっていざ警報を出して怪異が出現しませんでしたとなれば経済的損失も計り知れない。

先輩達が頭を抱えるのもよくわかる。

まあここは任せてほしい。

今こそシオンさんの異能の魅せどころだ。

「シオン、頼めるか？」

「…五日前…万全を期すなら三日…」

「そうかでは三日前に偵察を頼む」

あらかじめそのショッピングモールを訪れBGMを聞けばいい。その中に不穏な音が混じっていれば間違いなく現れる。集中しないと判別はできないが、逆に言えば集中さえすればその場に怪異が出るか予測可能だ。

「君の異能は範囲や期間には乏しいがそのあたりさえフォローできれば非常に強力だ。シオンが来てくれたおかげでこれまで不鮮明だった出現予測の精度が上がったよ」

「…よかった…です…」

やはり褒められるのは気分がいい。

しかしこうして会話している限りだとミナミとの関係性なんか全然わからないな。そもそも先輩は堅ブツだしだれそれと付き合うなんてことしなさそう。

それに副部長のところに行くということもミナミに伝えても特段変わった様子はないな。もしも副部長先輩が好きなのだとしたらちよつとくらい反応が変わってもおかしくない気がするのだが。

「それでシオン君。なにか悩み事でもあるのか？」

「…わかり…ます…？」

「そうだな。なにか頭から離れない考え事があるように見える」

そんなに態度に出てただろうか。これは反省しないと。

「気休めに過ぎないが占っておこうか」

「…いえ…わるいです…」

「気にするな」

そう言うとき先輩はメガネを押し上げ私の目と手をそれぞれ凝視した。湧き上がる巨大な力の気配。先輩の異能が働いているのだ。

BGMも星々の巡りを意識したであろう神秘的なものに変わった。

「ふむそうだな。あまり変わった様子は見られない。ただ強いてあげるなら——」

「…あげるなら…?」

「——恋愛運が変化している。なんだこれは女難の相のようにも見えるが…? すまないうまくいかなかったようだ」

「…いえ…ありがと…ごさいます…」

私は肉体的には女なのに女難とはこれいかに。まあなにか失敗したんだろう。

先輩のは占いなのでファンブルすることだってある。しょうがない。それより心配して占いてくれただけでも嬉しい。気持ちだけで十分というやつだ。

先輩との会話ではあまり収穫がなかったが、今日のところはよしとしておこう。

## 買い物物は立派な遠出

ミナミの好きな人調査は保留だ。というのも、候補者と関わるのが難しいからだ。残る男子部員は2年生の2人。しかし中間テスト終了後から遠征に行っており会えない。これは帰ってくるまではどうしようもないな。

それと先輩との約束でショッピングモールの偵察に行くことになった。その旨を三人衆に伝えたところ、ついでだから一緒に行って買い物もしようということになった。夏に向けて水着を買いだいたいのだとか。まだ梅雨も明けたばかりだし早いとは思うのだが、水着セール中なのだそう。

私はもう高校のスク水のままでも良くないですかって言ったらミナミが怖い顔になった。だめらしい。笑顔のままでも凄むのやめてください。こわい。とてもこわかった。

「おーいいねいいね！ こっちも着てみてよ」

「待ってください。シオンちゃんはそういうのじゃなくなつて、こんなお淑やかな感じの方が似合います」

「…つかれた…もうこれにする…」

「あの、俺外で待ってていいか？」

ミナミとヤヤカは自分の水着そっちのけで私にアレコレと渡しってくる。試着とかめんどくさいしサイズだいたいあってればいいんじゃないですかって言ったら二人とも怖い顔になった。だめらしい。めっちゃこわかった。

あと本来の目的である怪異出現予測だが、間違いなく出そうだ。耳をすませばBGMに不穏な調子が混じっている。その旨はささつと先輩に通話&amp;mp;メッセージアプリの「コネクト」で送信しておいた。

「やっぱり肩出した方がいいでしょ。せっかく綺麗な肌してるんだし」

「うーん私としては、やっぱりこのハイネックのがいいと思うんですよ。あんまり露出多いのはシオンちゃん嫌がりますから」

「シオンちゃんはどうちがいいと思う？」

「…よくわかんない…これにする…」

結局今着せられてた黒い水着になった。首元まで布があるやつで上下が分かれてる。一緒に勧められたパレオも買った。

ミナミとヤヤカは自分のぶんをあつさり決めた。なんじゃそりゃ。私は一時間弱着せ替え人形にされたのに。聞けばヤヤカは天性の美的センスで、ミナミは入念な下調べのもと選んだらしい。

ちよつと不平不満をこぼしたら、スク水でいいやなんていう人間にワガママ言う資格はないとのこと。ついでに私服についてもお小言をいただいでしまった。やぶ蛇だったか。

「可愛いのおしゃれしなきゃもつたないよ」

「私もそう思います」

「…あ、俺？ 俺は別になんでもいいんじゃないや——いたあつ!？」

なにか不都合なことを言い始めたらしいホムラがヤヤカに脛を蹴られている。

他人の服装にいちやもんをつける幼馴染三人衆はというと、私服もぼつちり着こなししている。

ヤヤカはカーキのパンツになんか英語のロゴつきのTシャツ。ラフな雰囲気だがもともとの美少女指数が高いからかカッコよく決まってる。これがオシヤレってやつなのか？

ミナミは白いフレアスカートにこつちも英語のロゴが入ったTシャツ。淑やかな雰囲気とカジユアルさのさじ加減が絶妙だ。流石は美人さん。

ホムラは普通のパンツとポロシャツだ。野郎のファツションなんか言うことないと思うけど、本人の顔とガタイがいいせいで何もしてなくてもかっこいいな。

私はいいい加減なTシャツにいい加減なGパン履いてたのだが怒られた。なんだよ伸



びをする猫のデフォルメイラストがでかどかどプリントされたTシャツは、けっこうお気に入りだったんだけど。

今は連れ込まれたお店で購入した服に変えている。こういうのって買ってすぐに着てもいいんだ。初めて知った。

購入したのはホットパンツにオーバーサイズなパーカーだ。ダボツとしててずぼらな雰囲気になってそうな気がするが、二人には絶賛されたので着てる。オシャレってやつなんもわからん。

というかパーカーがぶかぶか過ぎてパンツがかなり隠れてるな。下になにも履いてないように見えそうで困る。

「そこがいいんですよ」

「そこがいいんですよ」

「…ん、俺？ いや俺はよくわからないたあつ!？」

今度はミナミに脇腹をつねられるホムラ。

この男ファッションには無頓着であると判明している。ちゃんと出会い頭に人の服装を褒めたりしているが、それはとりあえず女の子の格好を可愛いと褒めてるだけ。服装なんて全然理解してない。

要するに私の同類。勝手に親近感。

「昼メシはどうする？ フードコート行ってもいいし、ちよつと外出て探してもいいけど」

「ラーメンいこうよ！ この辺に確か美味しい味噌ラーメンの店があつたはず」

「私もいいですよ。シオンちゃんはラーメン好きですか？」

「…すき…」

ミナミに手を引かれ歩く。買い物客でごった返しているので、小柄な私は人波に飲まれやすいのだ。うっかりはぐれないように手を握っておくよう言われている。

それにしてもラーメンか。前世から好物だったがなかなか食べに行く暇がなかったな。それに今の胃袋にはあんまり入らないから、出かけてもなかなか外食に踏み切るのが難しかったのだ。

その点今は違う。誰かに大盛りで頼んでもらつてそれを取皿に分けてもらえば解決。こんな画期的なやり口があるとは幼馴染三人衆と関わるまで思わなかった。

やはり持つべきものは友というわけか。いや私が一方的に三人を友達と思つてるだけで、むこうにしてみればただの部員に過ぎないかもしれないが。

いやー三人とも誰にだつて優しい人だからな。勘違いしちゃいけない。もしかして自分に気があるのかもしれない、みたいなのはこじらせ非モテ仕草だ。自分がそうはならないように自戒していかないと。

あとラーメンは美味しかったです。豚骨ベースで味噌を割ったこってりめのスープと歯ごたえのある太麺。私は肉があんまり好きじゃないのでチャーシューは遠慮したが、そちらも肉厚でぷるぷるしてた。多分美味しいのだろう。

ミナミに大盛りで頼んでもらって無事分け合いっ子することができた。ごちそうさまでした。また来たいなこの店。次来たら味付け卵とメンマのトッピングを頼もう。

## お茶の間にいのーぶ！の活躍を

シヨッピングモールに出現するであろう怪異の対処について1年生で会議をしていたところ、とある団体からメールが届いた。内容は夕方の有名報道番組からのアポイントメントだった。

この世界において異能持ちはかなり希少だ。2千人に1人程度しかいないとされている。しかもその出力はほとんどが私と同程度なのだ。このような異能持ちの中でも志願者は、特殊な訓練を経て国の怪異科に所属することができる。一般的には彼ら怪異科によって街の平和が守られることになるのだ。

しかし異能部は違う。途方も無い異能の才をもつ人間が、高校生活を続けながら街を勝手に守護していた結果、なし崩し的に部活動として認定されてしまったのだ。その途方も無い才能の持ち主とは今の部長と副部長のことなのだが、まあそれはおいおい語ろう。

要するに今の異能部は世間的に見るなら、ハチャメチャに強い異能持ちだらけで構成された特殊な部隊という扱いだ。私？ 私は非戦闘員なので特段強くなくてもオツケーだ。

まあそんな感じで世間様から見れば特殊で特別な異能部は、話題に事欠かないおもしろ部隊なのだ。たまに新聞やら雑誌などからインタビュウを受けたり、テレビで放送されることもある。

今回もその一環で取材させてほしいとのことだ。今年の1年生の実力を世間に知らしめ、近隣住民の安心を守るのが目的なのだとか。

「うーんそうですね。そのあたりまで下がっていただければ安全かと思います」「やばいと思つたら連絡するんで、そしたら逃げてください」

今は取材陣がどこまで立ち入っても大丈夫なのかラインを決めているところ。だだっ広い駐車場にコーンを設置していく。

私としては落ち着かない。テレビに映るといふのは前世含めて初めてだし、なんか展開してるときの格好はコスプレしてるみたいで恥ずかしい。とりあえずミナミの背中に隠れておこう。

「えっと終さんでよろしかったですか。私アナウンサーの武田と申します。少しお話よろしいですか」

「シオンちゃん、ちよつとだけでいいから自己紹介お願いします」

「…はい…」

いつまでも隠れてては駄目らしい。三人衆はまだ展開をしてないが、私はとづくに済

ませている。万が一の索敵漏れに備えて異能の力を底上げしているのだ。

「ありがとうございます。ではお名前などお聞きしても？」

「…柘シオン…1年…音楽の異能もち…」

「音楽ですか。それはどんなものなんでしょう」

「…予兆…雰囲気…音楽として聴く…こんなふう…」

今自分の耳に聞こえているBGMを音叉の槍を震わせて再現する。実際にはもつと多種多様な音が聞こえているのだが、流石にそこまでは再現できない。今最も大きいBGMだけ流している。

アナウンサー含め取材陣は大いに盛り上がってる。うおおおおってしてる。異能だかっこいいヤッター！ってかんじだ。小学生か？

「えー失礼、取り乱してしまいました。では今聞こえているこの不穏な音楽が、あなたの異能の一端ということですね。なるほどこうやって予兆を捉えることで、サポートをしているということですか」

「…うん…でも…これだけじゃない…」

「と言いますと？」

今度は報道番組のメインテーマを再現して流した。取材陣は異能すごいヤッター！してる。素直すぎる。小学生か？

そんな感じでインタビューを受けているうちに、副部長先輩が予測した時間が迫ってきた。三人衆は出現予測場所に、取材陣と私達は少し離れた位置につく。

今回私は戦わない。もとより非戦闘員というのもあるし、いざ取材陣の方に怪異が近寄ってきてしまった場合、その足止めを担う程度だ。

私は相変わらず音叉の槍からBGMのたれ流し。音響の人はマイクを近づけて收音している。

そしてBGMの転調。取材陣がそれに驚いているうちに、怪異の出現が始まった。

パリパリとヒビ割れていく空間。その向こうから姿を見せる大量の怪異たち。今回出現するのは背中に鎧武者を乗せた馬、骸骨の歩兵などアンデッドっぽいエネミーたち。一体一体は弱いが途切れることなくやってくるのが厄介なところ。

「じゃあ始めるぞ」

「うん」

「了解です」

バックルに手をかけるホムラ。ネックレスを掴むヤヤカ。髪留めに手を伸ばすミニ。

3人の声が唱和する。

「展開!!!」

『Coronal mass ejection!!!』

『GOLDEN DAWN!!!』

『LUNAR CATAclysm!!!』

もちろん展開のSEも垂れ流す。このめちやめちやかっこいい変身シーンをお茶の間に放送してくれ。

爆豪、光、ド派手な変身音。それらが全て去ったあとに残される三人の異能持ち。

炎の戦士、夜明けの魔法使い、月の狩人が顕現する。

『LigHt the flames and burn up all your enemies.』

『When the earth is full of prayers, the golden dawn will come.』

『In every heroic tale there is a hidden sacrifice.』

「よし、皆やるぞー！」

「くわよー！」

「任せてくださいー！」

取材陣が湧いた。変身かっこいいヤッター！私もそう思います。自分に聞こえてい



る音を再現しようとコソコソ練習していた甲斐があった。

戦闘の方も凄まじい速度で進行していく。

ミナミが最低威力のまま必殺技『ルナ・カタクリズム』を連打し雑魚を一掃。防御に徹している騎兵はホームロとヤヤカが直接攻撃で撃破。

MPを消費する特殊技を使うまでもなくどんどん怪異が溶けていく。圧倒的すぎる。

ちなみに原作における必殺技は、キャラ固有のゲージやレベルを消費することで発動可能なだけでMP消費はない。ミナミの必殺技『ルナ・カタクリズム』は必殺技の中でも特殊な部類で、満月レベルを全消費して、消費したレベルに応じた威力になる。なので一応満月レベルを0消費することでも発動は可能だ。

まあそのためあれは通常攻撃より威力が低かったりする。原作においては格下の雑魚狩りでレベル上げる際重宝した。いわゆるルナカタレベリングだ。

「ヤヤカ構えろ！ そろそろお出ました！」

「おっけーまかせて!!!」

バラバラに吹き飛ばされて散らばっていた骸骨たちが、ある一点に向けて急速に集まります。骨が乱雑に組み合わせられてできていくのは、巨大な骸骨武者。このバトルのボスエネミーだ。

興奮しっぱなしだった取材陣が更にテンションを上げている。気持ちはわかる。ポ

スの登場に対して既にヤヤカが必殺技のチャージに移行しているのが見えたからだ。

「よし一気に決めちゃうよ！」

『GOLDEN DAWN!!!』

鳴り響くSE。ヤヤカの光の十字剣が解れ、光の帯がアスファルトに浸透し、巨大な陣が構成されていく。

「隙はこちらで作ります！ ホムラ、合わせて！」

「まかせろ！」

無防備なヤヤカを襲おうとしたボスに、炎の大剣と矢が吸い込まれ爆発。二人のコンビネーションによって、ボスはその巨体を大きく後退させた。

莫大な光量を放ち始めた陣の真ん中でヤヤカが抜き放つのは、やはり普段使っている光の十字剣。しかしその規模が違う。

悠に身長の十倍を超えるであろう刀身が示すのは、内に秘める熱量。『祈りレベル』に応じた威力が変動する必殺技。

ミナミの矢がボスの足を爆破し、体勢を崩して降りてきた顎をホムラが大きく打ち上げる。ホムラの馬鹿力でそのまま宙を舞うボスに、ヤヤカが踏み込みとともに十字剣を解放した。

「いくぞ、必殺！ 『ゴールデン・ドーン』!!!」

振り下ろされた剣は、そのまま光の奔流となつてボスを襲った。光は咄嗟に掲げられた盾に直撃すると、拮抗することなくそのまま巨大骸骨を焼き切る。

空の彼方へと駆け抜けていく閃光。その先で強引に割り開かれる雲がその威力を物語る。その威力と比較すればあまりに些細な余波が、爆風を巻き起こし木々が揺れる。

『GOLDEN DAWN!!!』

「よーし一丁上がり!!!」

元のサイズに戻った剣を肩に担ぎ、ヤヤカが晴れやかな笑顔を見せる。

いつの間にか静まり返っていた、取材陣がどつと歓声を上げた。気持ちはわかる。

私は後方でしたり顔をしておく。まあ私は三人衆の魅力なんて昔からお見通しでしたか？

厄介古参勢仕草をしているうちに、その日の戦闘は終わってしまった。多分これ私いらなかったな？

世の中には結構ロリコンが多いらしいが私には関係ない

例のショッピングモールでの撮影がオンエアされたのは、それから2週間してからだった。本来ならもう少し早く放送する予定だったとのことだが、なにやら加工に時間がかかってしまったらしい。

家にテレビはないのでミナミの家で録画を見ることにした。どうせならみんなで見ようということで、三人衆＋私のいつものメンツで集合。ネタバレ回避のためにまだ誰も見てないらしい。

いざ録画を見るとやっぱりこれコスプレ感強くないですか？ 私は恥ずかしい。三人衆は顔がいいのでこういうコスチューム着ても違和感ないが、私だけコスチュームに着られてる感が半端ない。

画面下部では「#いのーぶ」をつけて眩こうキャンペーンの文字列が流れている。これはSNSのつぶやいたーでのキャンペーンかな。私はやってないからよくわからないけど。

「ホムラが敬語使ってるのみるの新鮮だよね！なんか笑っちゃう」

「失礼な。そういうヤヤカこそ普段敬語なんか使わないくせに、猫被ってるだろこれ」

幼馴染三人衆のインタビューはあまり流されなかった。以前の放送で三人は一度自己紹介しているのだ。その時のVTRが冒頭で流された以上、わざわざ似たような話を繰り返す必要もないというわけか。

でもそのせいで私のVTRの尺が長くなってないか？ えっ、私周りから見たらこんなにもじもじしてるのか。全然自覚なかった。

「番組のメインテーマを演奏してもらった」なるテロップがデカデカと表示される。スタジオも盛り上がりつつある様子だ。わざわざ動画投稿サイトからこの曲を探して、練習しただけの甲斐があるというもの。

ついで映像は戦闘時のものに切り替わる。私が流してたSEは加工されたらしく、めちゃめちゃ音質が良くなってるし派手になってる。よくやった。お茶の間にいのーぶの活躍をお届けできている。

「シオンにはこんなふうに聞こえてるのか？」

「…うん…」

「なんというか、その、アレだなゲームみたいだ」

その通りゲームの音です。

そのままVTRでは三人衆がバカスカ怪異をしばき倒しているシーンに移る。とても目では追えませんがアナウンサーが熱狂してる。スタジオも大興奮だ。

そして最後にヤヤカの必殺技。

『GOLDEN DAWN!!』なる金色のテロップが表示される。フォントもカメラワークもスローによる演出も完璧だ。本職を忘れたらしいスタジオのスタッフ達がおおおおおつて騒いでいる。気持ちはわかる。

「おーなんか私めっちゃかつこよくない!？」

「シオンちゃんにはこんなふうに聞こえてたんですね」

録画の内容を見終えて一息つく。ミナミの家は大きな屋敷だ。両親は国外にいらしく一人暮らした。エロゲーの世界だし仕方ないね。原作だと寝室がエツのシーンで使われていた。

「これだけ凝った編集してりやオンエアも遅くなるよな」

「そうですね。つぶやいたーでも編集についてトレンドになってますよ」

「へー私つぶやいたーやってないしよくわからないけど、これは話題にもなるわね」

ミナミがスマホでつぶやいたーの画面を表示している。あ、アイコンがデフォルメされた三日月なんだ。ちよつとかわいい。

「ふーんなにこれ。変身シーンまとめてみた？」

「VTRの映像をトリミングしたものです。これをアップしたのはかなり有名な人です。かなり拡散されてるみたいです」

「これって著作権とか大丈夫なのか？」

「どうなんでしょう…？特に不都合もないですし気にしなくてもいいような」

多分アウトでしょ。

まあいいや特段困るものでもないし、変身シーンは色んな人に見てもらいたい。かつこいいいので。

「こつちのはなに？」

「あーそれはシオンちゃんの方ですね。初めてメディア露出したので話題になってるみたいです」

「そうなんだ。ちよつと見せてくれよ」

「…やめたほうがいいと思います。読んで不快になるものも多いですし」

えつなにそれ。全然仕事してないことを怒られてる感じだろうか。

もとより非戦闘員なので許してください。

「どちらかというところ…そうですね、世の中ロリコンが多いんだなって感じですよ」

「…？」

よくわからん。

ロリコンってのはまあロリに欲情するタイプのアレだろう。しかし私は華の高校生だ。ロリではない。

つまりどういふことだ？

ちらつと画面を覗くと「高1ってマジ？中1の間違いでは???」って文面が見えた。なんか実力不足をバカにされてるっぽい。確かに私が中坊にも劣る戦力外っていうのは否めないが、これはちよつと不愉快だ。

「まああんまりこういうのは見ないほうがいいですよ」

「そういうものか」

そういうものらしい。精神衛生上、誹謗中傷なんてものは見ないにこしたことはないな。



ついこのあいだ中間テストがあつたような気がするが、実際にはそれなりの月日が流れた。ミナミの好きな人調査は全然進んでないし、ヤヤカとホムラをくつつけよう作戦も上手く行かない。

やきもきしつても何もできないまま期末試験が近づいてきてしまった。このままじゃ1年の前期が終わってしまう。かといつて今から介入することも少ない。手詰まりだ。

これは夏休み以降に発生するイベントの方で暗躍したほうが良さそう。とりあえず



は夏休み中に出現するであろう怪異について、副部長星見カイト先輩に聞きに行くという。

異能部はかなり特殊な部活なので3年生の引退も相当遅い。というか3年生は、卒業後そのまま国の怪異科に就職することが決まっている。それに伴っていくらかの授業が免除されるぶん、異能部OBとしてどんどん動くようになる。

とはいえ副部長はまだ現役。早速出現予測をしてもらう。

「そうだな。この8月8日の怪異だが、これはどうやらビーチに現れるようだ。場所を厳密には絞り込めないから、1年だけでなく2年にも出てもらうか」

お、きたきた。ビーチに現れる怪異。これは原作での水着イベントの一環だったはず。

ヒロインたちと水辺できゃっきゃしている中現れるタコつぼい怪異。原作はエロゲーなので当然触手によってヒロインが拘束されてしまう。ちなみに女性ユニットの中から好きなキャラを選んで捕まえてもらうことができるし、バトルフェイズで敗北するとそのまま触手プレイが始まる。

各キャラ毎にスチルがあるがバッドエンド扱いだ。まあ怪異自体はデバフが厄介なだけで対して強くない。わざと負けようとしないうり勝ってしまうので、前世ではちよつと苦勞した覚えがある。

「…まかせて…ください…」

「済まないな。3年は万が一に備えてこの街を離れられない。後輩たちにはかり任せることになるが、よろしく頼む」

正直スケベ触手怪異の方はどうでもいいや。弱いしホムラたちが倒してくれらるう。

問題はこの水着イベントでホムラとヤヤカの距離を縮めること。あの朴念仁に恋愛を意識させるにはどうすればいいか、今のうちから考えておかなくてはいけないな。

## 海辺にも危険はいっぱい

期末試験を乗り越え、ちょこちょこ出現する怪異をしばいて、皆でミナミの家に行き遊ぶ。そんないつもどおりの日常を過ごした。それから特に事件もないまま前期が終わってしまった。

ヤヤカは期末試験でまた学年1位を取っていたがそれはいつもどおり。ホムラは他のクラスの女子のピンチをさっそうと助けてしまったらしく、危うくフラグ建設になりかけていたがそれもいつもどおり。ミナミはなぜか私の食事の好みを把握してしまつたらしく、外食では何も言つてないのに私のぶんの注文までするようになった。助かります。

夏休みが始まってからも生活はあまり変わらない。みんなで集まって課題をやつたり、ゲームをしたり、外出したり、怪異をシバいたり。

そうこうしている内にアレの期日が迫つてきた。

すなわち水着イベント。ポロリはないがえつちな女の子たちだらけのスペシャルイベント。

今こそホムヤヤカツプル成立の時。必ずこの機に二人の距離を縮めさせる。



今回向かうビーチは電車を乗り継ぎ一時間弱の場所。午後に出現する怪異対策のためという名目だが、遊ぶ気満々なのでもちろん朝からでかけてる。

到着次第、早速着替えて水着のお披露目だ。

「ホムラ、その、どうかな？」

「ああ、うん、その似合ってると思うぞ」

うおおお！これは来たな。二人とも意識しまくってる。

ヤヤカは露出の激しいビキニ。バストの前の部分がクロスしたデザインでセクシード。これはえつちすぎる。あと頭に乗つけたサングラスがお茶目でいいと思います。

ホムラは普通にトランクス状の水着だ。うわ腹筋バキバキじゃないか。色んな場所にある傷の痕が男らしさを底上げしてる。原作でも昔から無茶をするタイプだったし、まさに男の勳章ってかんじだ。

「じゃあ二人は日焼け止め塗っててください。私はシオンちゃんとやるので」

「え!?俺がヤヤカにやるのか!？」

「背中まで一人で塗れるわけじゃないでしょう。ちゃんとペアになってやらないと」

「そ、そういうことではなくだな」

ナイスミナミちゃん。他人に日焼け止めを塗ってもらうのはこの手の王道だろう。塗る方も恥ずかしいし、塗られる方も変な声が出そうになってえっちだ。やらしいね。案の定ホームラはドギマギしてるしヤヤカは顔を赤らめている。これは脈アリだ。そのままくつついてくれ。

「じゃあシオンちゃん、そこでうつ伏せになってください」

あ、そうかこれ私も塗られるやつじゃん。

幸い私の口から変な声が出ることはなかった。この体くすぐったいと声も出せなくなるんだね。ミナミがかなり心配性なきらいもあつてか手つきがねちっこくて地獄を見た。

抗議の声もあげられなかったし、身体が痙攣して逃げ出せないしでかなり切羽詰まってしまった。塗り終わった頃にはもう疲れてしまって帰りたい気分。帰っちゃだめ？ だめですか…



パラソルの下で体力を回復しながら三人衆を見る。持参したボールで早速遊んでいく様子だ。

それにしてもミナミもたいがいえつちな格好だな。胸の方にもボトムの方にもリボンがあしらわれた白い水着を着てる。白い肌、白い水着に濡羽のように黒い髪が映える。可愛いというよりは綺麗なかんじ。

私はこの前ショッピングモールで買った黒い水着だ。首元まで覆われてるしパレオもあるしで露出は少なめ。下着みたいに露出の多い水着は流石に恥ずかしくて着れない。

それにしても三人衆はよく目立つ。ビーチ上の視線をかなり集めている。全員美形だし、そもそもネット上でも有名人だったからだろう。

そしてついでに私の方もチラホラ見られてる。この前テレビに映ってたし、奇異の視線が送られてくるのもある程度は仕方ないか。先程まで三人衆と喋ってたのも注目を集める原因になっているのだろう。

しかしあんまりいい気分ではないな。見世物になつてみたいだし、なにより水着という格好が落ち着かない。居心地の悪さを感じてると三人がこちらに戻ってきた。

「いやー疲れた！なんか飲み物買ってくるよ！」

「俺は腹減ったし出店みてくるわ」

「じゃあシオンちゃんはどうする？ 私はちよつとだけ泳いでこよやかなと思うけど」  
これはアレだな。ホムラとヤヤカが二人で出店を見て回れるように働きかけてるんだ。ここはミナミに乗っておこう。

「…わたしも…ミナミとおよぐ…」

ホムラとヤヤカが二人仲良く歩きだしたのを見て一安心。いい感じに互いの好感度を上げてほしい。

あと私もミナミと泳ぐと言った手前、有言実行せねば。

まあ私は泳げないんですが。

「シオンちゃん泳げないのに来ちゃったんですか!？」

「…うん…」

いざ水辺までできて動かなくなった私を見て、ミナミが驚いている。いや前世では泳げたけど今生では初めてなので…

「わかりました。私が泳げるまで教えてあげます」

「…ありがと…」

ミナミに教えてもらってる内に泳げるようにはなった。前世の記憶もあるおかげで、そこまで時間はかからなかった。でもちよつとスパルタ気味で大変。あつという間に疲れてしまった。

お酒には気をつけよう！

怪異の出現時間が迫っていた。

ビーチには規制線がはられ警報が鳴り響く。国の怪異科が区画ごとに設置している結界機構が作動して、既にここは隔離空間へと変貌している。万が一にも怪異が逃げ出さないようにしているのだ。

「今日のやつはデバフ？とかいうのをまいてくるんだったな」

「…うん…」

「いきなり不意打ちもしてくるんだっけ」

「気をつけて慎重に戦いましょう」

原作では怪異出現とともに不意打ちで触手の拘束攻撃がとんでくる。バトルフェイズではなくイベントシーンなので回避不可能だった。枠組みとしてはヤヤカ死亡シーンと同じだ。プレイヤーがどう立ち回っても避けられない。

実際のところそこまでの拘束攻撃は速くないので、多分私が不意打ちの予兆を聞き取って連絡すれば大丈夫だろう。触手プレイは画面の向こうで見てるからいいものであって、現実で苗床エンドなんてものは見たくない。断固阻止だ。



副部長の予測で絞り込めた出現ポイントは2箇所であった。そのため応援として2年生の先輩も1人來ている。ここから3キロ程度離れた位置で待機中だ。

1年生4人と先輩1人がトントンの戦力として扱われているわけだが、まあ原作での先輩の強さを鑑みれば妥当だろう。レベルが一回り違うからね。

あ、これはそろそろ来るかな。エンカウント音が聞こえる。

「…くるよ…!」

パリパリと割れていく空間。その隙間から不意を打って触手が伸びてくる。矛先はヤヤカだ。

「シオンちゃんの言った通り本当に來たわね。甘いわ『展開』!!!」

「俺たちも続くぞ! 『展開』!!」

「いきます! 『展開』」

『GOLDEN DAWN!!!』

『Coronal mass ejection!!!』

『LUNAR CATALYSM!!!』

3人の展開の風圧に負けて割れた空間に押し返される触手。よし、回避不能イベントを回避できた。

そのうちに3人が展開を完了させていく。

『When the earth is full of prayers, the golden dawn will come.』

『Light the flames and burn up all your enemies.』

『In every heroic tale there is a hidden sacrifice.』

巻き上げられた砂の中から姿を現す夜明けの魔法使い、炎の戦士、月の狩人。

いやー何度見てもかっこいいな。今日は舞台がビーチということもあつてコスチュームもいつもより開放的。異能の出力が高い人たちは気分や成長によって見た目も少し変わるのだ。

「聞いてたとおり、なんか気味の悪い見た目だな」

「なにかしらこれ。タコかイカかな？」

「…殺しましょう。これはこの世に存在させてはいけないものです」

のっそりと姿を現した怪異。うねる触手と巨大な頭部。割と愛嬌のある顔をしているが駄目だ。もう触手がエロすぎる。見るだけでそういうコトするやつだつて分かる。

あとミナミだけにやら物騒なことを言っているな。触手の用途が分からない純情幼馴染二人にはまだ早かったが、むつつりのミナミは殺意を装填するに足るなにかを感じ

じ取ってしまったようだ。

私はミナミのそばで待機。相手の攻撃はデバフこそ厄介だが目で追える。触手が伸びてきても余裕を持って捌けるだろうというところで、ミナミの護衛に回っているわけだ。

ヤヤカとホムラがそれぞれの剣を構え位置を変えていく。海にでも逃げ込まれたら厄介なので退路を予め防いでおくのだ。

「それにこれ変なおいするな…?」

「お酒の匂いみたいだね」

その過程で風下に立ってしまったようだ。

この怪異は粘液にふれると『酩酊』という状態異常を引き起こす。継続的にHPとMPが回復する代わりに行動妨害を受けるといったただただ面倒なデバフだ。たぶん粘液がお酒か何かでできているのだろう。

「これはあんまり吸ってたくないな。さっさと仕留めよう」

「でも水辺だから気を付けてね。水蒸気爆発とか洒落にならないから」

「うっ、それもそうか」

「ほら構えて、そろそろ向こうもやるつもりみたい!」

タコっぽい怪異の触手による薙ぎ払いを難なく躲しつつ、ホムラとヤヤカが切りか

かつていく。ミナミも二人の連携を援護するように精密な狙撃を始めた。こうなるともう私は暇だ。やることない。

この怪異は防御力こそ低いものの、常時自身の体力を回復し続ける非常にめんどくさい特性がある。そのため討伐に時間がかかってしまうのだ。原作ならパパッとホムラで必殺技ぶつぱするとところだが、水辺で炎の必殺技なんかしたら水蒸気爆発でとんでもないことになる。通常攻撃と特殊技で地道に削るしかない。

「このっ！切った端から再生しやがって!!」

「キリがないわね!」

「でも再生速度も段々遅くなってます。このまま削りきりましょう!」

ズバズバと抵抗なく触手に沈み込む剣。触れた端から切り飛ばしているのだが、それに拮抗する速度で再生されている。とはいえ怪異の体力も限りがある。そのうち倒せるだろう。

というかホムラもヤカもデバフを受ける様子がないな。普通に粘液に触れているのに。これはもしかしたら怪異に比べて二人のレベルが高すぎるのかもしれない。一定以上のレベル差が開いていると状態異常はレジストできるのだ。

まあ二人が大丈夫だからって、うっかり私が触れようものなら一発でデバフを貰うだろう。原作で言うレベルに換算したら私はレベル1ホムラにも劣るので。

この調子ならそんなこと万が一にも起こるはずないけどね!

「あら風向きが変わりましたね。たしかにこれはお酒の匂い——シオンちゃん!」

「…ふえ…?」

あれ。なんで私は横になってるんだっけ。頭がふらふらする。体はぼかぼかしてき  
た。

なんだか皆切羽詰まった声を上げてるな。

お酒の匂い。アルコールの匂い。

頭がくらくらする。

「シオン!」

「バカホムヲ目を離すな! ミナミそっち行った!」

「くっ…! シオンちゃん!!」

足首にぬるりと生温かいものが巻き付いて身体がふわりと浮く。ジェットコース  
ターみたいだ。景色がぐるぐる。頭の中もぐるぐる。たのしい。

着地は生温かいベッド。なんだかベチャベチャだけど柔らかいからいいや。

右足だけに巻き付いてたなにかが身体中に伸びてくる。くすぐったいな。それにあ

つい。こんなにお天気なのにあついもの押し付けられたらあつくてあつくてあついへん。「この……シオンを離せ！」

「シオンちゃん大丈夫!? 返事して！」

みんな叫んでる。頭がぐわんぐわんしてよくわからない。どっちから聞こえてるんだろ。

びちゃびちゃ。ねちやねちや。体はもうぐるぐる巻きだ。おふとんにくるまつてるみたい。ちよつと息苦しい。

そうだ。名前呼ばれてた。なにか言わないと。

頭がふらふらする。お酒を飲んだみたいだ。

今歩いたならきつと千鳥足だ。酩酊気分。

酩酊。なんだっけ？ 気をつけなきゃいけないことだったような。

「……あ……う……」

そうそう。怪異だ。

粘液に触れたら酩酊して行動できなくなっちゃうんだ。そうなるとどうなるんだっけ？

頭がふらふら。脳みそがぐるぐる。

なにか大変なことになっちゃうんだ。たぶん。あついな。今日はとてもあつい。

あつくてあつくて仕方ないから、巻き付いてくるものをどかさそうとする。

「…む…ぐ…?!」

それがお気に召さなかったのかな。悪いことをした子を懲らしめるように、口になにか突っ込まれてしまった。そして流し込まれる液体。

胃の焼ける灼熱感。口から鼻を伝い脳を貫くアルコールの匂い。体が跳ねる。動悸が激しくなる。

吐き出そうにも口に突っ込まれたあついものが栓になつてうまく行かない。

脳が揺れる。

何も考えられない。

酸素が足りない。あつい。今日はとてもあついな。

それに苦しい。動けない。体が跳ねる。

逃げられない。

だれかたすけて。

「…ふ…ぐ…!」

「…殺す」

『LUNAR CATACLYSM!!!』

なんだかいつも優しい誰かが、本気で怒った声が聞こえたような気がする。遙か天空

で炸裂音。

そして天から降り注ぐ癒やし雨。巻き付いていたものが次々に弾け飛んで体が軽くなる。

「今助けます！ 弾けて『ルナ・カタクリズム』!!」

『LUNAR CATAclysm!!!』

爆裂する光。怪異が消し飛ぶ。

体の支えがなくなつて宙に放り出される。前も後ろも上も下もわからない。頭がぐるぐるしてる。体は言うこと聞かなくて動かない。こわい。

地面に振り落とされる恐怖に目を瞑ったけど、一向にそんなの訪れなくて恐る恐る目を開ける。そこにいたのはミナミだった。私はミナミに抱えられているみたい。

「シオンちゃん！大丈夫ですか!!」

「…あ…」

わ。すごい形相だ。折角の美人が台無し。心配で心配でたまりませんって顔に書いてある。そんな顔じゃなくつて、もつとこういつもどおりのほうが素敵なんだけどな。

「ミナミ、ちよつと看せて!」

「大丈夫かシオン!」

二人も大慌てだ。なんでそんなに慌ててるのだろう。ちよつと可笑しいや。言うこ



とを聞かない腕を持ち上げてミナミの頬を撫でる。

びつくりしたみたいで、険しかった顔がちよつと緩む。そうそうその顔。

「これは酔つてるだけ…みたい。後遺症とかも起きないと思う」

「そうかよかった…まさか匂いだけで酔うとは思わなかったよ」

「ごめんなさい。怖い思いさせました…」

ミナミにぎゅつと抱きしめられる。あついし苦しい。

それにあたまのふらふらもつよくなってきた。ねむたいな。

せつかくみんなでビーチに来たのに、私だけおねむなのはちよつと気が引ける。でも眠たいものはねむたい。

この際ちよつと休憩させてもらおう。

おやすみなさい。

## 私の好きな人

私こと鈴木ミナミにとって彼女との出会いは、そこまで劇的なものではなかった。

高校の同じクラスの子。びっくりするほど小柄で小動物みたいなかわいい子。でもぜんぜん目立たないし、目立ちたがらない。

いつも教室のすみっこでイヤホンをつけていて、たまに何考えてるのかよくわからない。いぼーとした顔で私達を眺めていた。

多少変わった子ではあったけど、それ以上でもそれ以下でもないただのクラスメイト。それが終シオンに対する私の率直な認識だった。

それが覆つたのがこの間の事件だった。

あのヤヤカが狙われた奇襲のとき、私は何もできなかった。まるで気付かなかったし、気付いても反応できなかっただろう。

あそこで動いていたのは正に終シオンただ一人だった。あの子はたった一人で私達を守った。

あの小さな背中を覚えている。

槍を振りかざして割り込んだあの険しい表情を覚えている。

敵わないと知ってなお挑むその決意を覚えている。

その身を顧みない捨て身の献身を覚えている。

かつこよかった。

彼女はヒーローだった。

不覚にもときめいてしまった。

でもそんなヒーローであるシオンちゃんは、どこまでもか弱い女の子でもあった。

傷だらけで目を覚まさない彼女の肩を抱いて、その小ささに驚いた。きつとヤヤカが光魔法で治していなければ生活に支障が出ていただろう。彼女のとった自爆という選択はそれだけの危険を孕んでいた。

ただのクラスメイトに過ぎない私達のために、身体を張ってしまう女の子。

シオンちゃんは強い子だ。

人のために戦うというのはとても難しい。同じことをできる人間なんて、私は他にホムラとヤヤカしか知らない。

でもシオンちゃんはとても弱い。

例えば私とその気になったら、なんの抵抗も許さずに取り押さえられるだろう。実際この間模擬戦を試みたが、あつという間に拘束してしまえた。

多分私はそのギャップにやられてしまったんだと思う。

あるいはシオンちゃんに対して、初恋の人であるホムラに似たものを嗅ぎ取ってしまつたからかもしれない。

自分の身を顧みず、誰かのために戦えてしまう子。

放つておけない。

叶うなら誰にも渡したくない。

私のものにしてしまいたい。

…正直なところ、私は私の感情がわからない。

この終シオンという少女に対して抱いている感情はなんなのか、名前をつけられない。

独占欲、庇護欲、劣情、親愛。

色んな名前が候補になる。

でもきつとそれらの全てであつてどれでもない。

私はきつとシオンちゃんの全てがほしいのだ。身も心も全て私のものにしてしまいたい。

でもそれは強引であつてはだめなのだ。

ありのままのシオンちゃんが、ありのままの私を好きになつてほしい。そうでなくて

は意味がない。

だから、そういうのはよくない。

自戒自戒。

気をしつかり持たないと。

なにせ今、私のベッドでシオンちゃんがすやすやと寝息を立てている。

やっぱり同衾はやめたほうが良かったかも。

このまま手籠めにしちゃえばって私の中の悪魔が囁いている。私の中の天使は据え膳食わぬはうんぬんとささやき出した。

だめだだめだ。

煩惱退散。 煩惱退散。

だってぜんぜん据え膳じゃない。

今のシオンちゃんは、海辺で退治した怪異によって酔っ払い眠りこけてしまっただけなのだから。

◇◆◇

ベッドから抜け出してエアコンの温度を一度下げる。きつと外は蒸し暑いだろう。

締め切った窓の内側は、いつもより少し速いシオンちゃんの息遣いだけが響く。

ベッドライトの灯りを頼りに椅子に腰掛ける。シオンちゃんの無防備な顔はちよっ

と赤い。まだアルコールが抜けきっていないのだろう。時折居心地悪そうに身じろぎしている。

思い返してみれば、今日の怪異は危険極まりないものだった。

強いわけではなかった。ただただタフで面倒なだけ。多分幼馴染二人は今もそう思っているのだろう。

でも違うのだ。あの触手は明確にシオンちゃんを汚そうとしていた。触手で締め上げて粘液で自由を奪って、そしてあろうことか――

「……ん……」

シオンちゃんが寝返りをうって、かけ布団がずれ落ちる。今着せている私の予備のパジャマはサイズがどうしても合わずに色々はだけている。

これはよくない。エアコンは寒すぎるくらいに効かせているのだから、風邪をひいてしまう。掛け布団の位置を直す。

シオンちゃんの状態にはとどころ鬱血した痕がある。手首足首、脇腹、ふともも、お尻。触手に絡みつかれていた場所だ。大事に至る前に怪異は消し飛ばしたのだが、どうしてもその時の光景が脳裏をよぎって仕方ない。

あの時は本当に怒っていた。あそこまで怒りを感じたのは生まれてはじめてだった気がする。もうブチギレだ。

酒精に濁った虚ろな瞳で、シオンちゃんは確かに助けを求めていた。

気付いたときには私は必殺技を撃つていて怪異は消し炭。その場には粘液でベトベトになったシオンちゃんだけが残されていた。そしてすぐに酔いつぶれて寝てしまった。

あのあと海の家でシャワーを借りて、念入りに粘液を洗い流してあげたところ、ときおり目を覚ましてはいた。しかし要領を得ないことをむにやむにやつぶやいたり、トイレに行くなどしたあと再び寝こけてしまった。

できれば家に返してあげたかったのだが、あいにくシオンちゃんは一人暮らし。眠りこけたまま一人にすることはできないので私が家で一晚保護することになったのだ。

「……ん……う……」

またシオンちゃんももぞもぞと身じろぎ。顔にかかっていた髪を横に流してあげたらずぐに落ち着いた。いつものジトつとした目は鳴りを潜め可愛らしい寝顔を晒している。

無防備だ。

今に始まったことではないが、シオンちゃんは無防備だ。自分に無頓着であると言ってもいい。

別に害意に対して無頓着というわけではない。敵意の類には誰よりも敏感に反応し

ている節すらある。しかしこれが好意となると途端に鈍感になる。この朴念仁め。

「私がどういふ目で見てるかなんて、知らないんでしょうね」

当人が気づいていないし、私もまだ告げていない。いつかシオンちゃんに告白できる日を夢見て、地道にアプローチをしかけていくほかないだろう。

むにむにと頬を弄りながら呟く。起きる気配はない。あまつさえ頬を手に擦り寄せてきた。

そういう思わせぶりなことされると勘違いしちゃうぞ。

効きすぎたエアコンで流石に体が冷えてきた。私も早く寝よう。

先客のいるベッドに潜り込んで布団をかける。いつもの抱きまくらはクローゼットにしまっっちゃった。もつといいものが目の前にあるからね。

シオンちゃんの体は温かくて、冷房がガンガンに効いた部屋の中では丁度いい湯たんぽみたい。

今日のシオンちゃんは一晩抱きまくらの刑。私の目の前でそんなノーガード晒した罰だと思つてほしい。

「……ん……」

そんなことを考えてたら、シオンちゃんの方から抱きついてきた。そういうところで



すよ。あまりにあざとい。

いやわざとやってるわけじゃないんだらうけど、わざとじゃないことが余計駄目だ。  
今日落ち着いて寝れるかな…？

## お目覚め

目が覚めたら眼前に胸があつた。しかも私のではない。

「あ、起きましたか？ おはようございます」

ミナミだ。しかも抱きしめられてるだけじゃなくて、自分から抱きついてる。

え、なにこれ。なんでこんなことになってるんだ？

必死に昨日の記憶を掘り返すと出てくるあれやこれやの出来事。海辺に現れた怪異の退治中に、匂いだけで酩酊デバフを食らって、それで。

「思い出しちゃいました…？ こわかったですよね」

そうだ思い出した。あわや苗床 e n d だった。思い出すだけで怖気がする。

あんなもので色々とロストするのなんて受け入れられない。そもそも苗床 e n d だと殺されることなく、一生触手に犯され続けるといふ最悪のバッドエンドだ。

ミナミたちに助けてもらえなければ、自分がそうなっていた。

だけど、そんなことより重要な問題が――

「大丈夫。大丈夫ですよ。もう心配ありません」

密着していたからだろう。身震いしたのがミナミに伝わってしまったらしい。背中

に回されていた腕に力が込められる。引き寄せられて頭をぼんぼんさせたら、わけもわからぬけどなんだか安心できる気がした。

あれ、なんで私はミナミのベッドにいるんだっけ？



「…ありがと…もう大丈夫…」

「そうですか。私はこのまま続けてもいいですが」

「…それは…恥ずかしい…」

どうにかミナミの手から抜け出してベッドから出る。子どもみたいに扱われたら流石に恥ずかしい。精神年齢は前世のぶんもあるし高いので。

記憶を整理してみれば、昨日怪異を退治したあと、ミナミの家で保護されていたんだと思いだした。酔っている間のことは覚えていないタイプなのだ。

服をひん剥かれて丸洗いされたのは、まあこの際考えないでおこう。自分の尊厳がちよっと危うくなってしまう。

今はすっぱんぼんの裸の上からミナミの寝間着を着せられてるみたい。私の下着や服は展開中のダメージのフィードバックを受けて、粘液でどろどろになってたらしい。

現在洗濯中だ。

くつ、こんなことなら水着のまま展開するべきだった。

「ご飯どうします？ ついでなので一緒に用意しますよ」

「…いいの…？」

「ええもちろん。とは言っても簡単なものしかできませんが」

折角なのでお言葉に甘えることにした。お腹空いてたし。

◆◆

簡単なものしかできないというミナミの言は、普通に嘘だった。あれ、普通簡単なものっていったらトーストとコーヒーとかそんな感じのはずだよな。

わざわざ高校生が朝から出汁とって味噌汁作るとは思わなかった。

「…シオンちゃんは、昨日のこと覚えてるんですよね」

「…うん…」

ミナミから昨日のことを聞かれた。もちろん覚えている。

「その、危なかったですよね」

「…うん…」

そうだ昨日のは非常に危険な状態だった。あんなのが結末になったら死んでも化けて出そうだ。

「シオンちゃんは何されそうになったのか分かってますよね。ごめんね、怖い思いさせました」

怖い思い？

ああいや、確かに怖い思いはした。

でもなんだか、認識に相違があるような気がする。

「私達がもつと気を使っていればあんなことにはならなかったのに」  
やっぱりなにかずれている。

ミナミは私の身を案じているのか？

ああそれなら納得だ。

認識を擦り合わせなくてはならなさそうだ。

「…それは…ちよつと違う…」

「なにがですか？」

「…私が怖かったのは…異能部の活動停止…」

私が一生苗床になるのは、正直どうでもいい。

私が怖いと思ったのはその後。

犠牲者を出した異能部がその責任を問われて解体されると言うエンディングだ。

すべてのバッドエンドで共通するのが、この異能部の解体だ。街を守るのは国の怪異

科に代わり、主要登場人物たちも思い思いの進路を選ぶようになる。

そうすると卒業前の襲撃イベントまでストーリーがスキップされ、異能部なき中央都は阿鼻叫喚の地獄絵図になってしまう。

私が恐れたのは、そのエンディングだ。

「え、いや、ですがあのままだとシオンちゃん」

「…私は…苗床として弱い…大丈夫…」

怪異に苗床にされた母体は、その異能の出力によって産まれる怪異のレベルが増減する。

私ごときが苗床になったとして、別に犠牲なんて出ないだろう。

それ自体はミナミが心配するようなことではない。

「わ、私はそんな話をしているんじゃないですよ。シオンちゃんが危ない目にあつたら心配なんです。異能部じゃなくて、シオンちゃんを心配してるんです」

「…なんで…?」

「なんでって、私たち友達でしょう? 仲間を心配しない人がいますか」

友達?

私とミナミが?

昔そんなようなこと期待した覚えもある。

でも、やっぱりだめだな。

「…友達…じゃない…」

「——え？」

こんな薄汚れた身で、幼馴染み三人衆の友達？

きっぱり無理だ。

ミナミは優しい人だから、こんな人間相手にも手を差し伸べてしまうのだろう。でも私はどこまでいっても異物でしかない。

私ではミナミたちに釣り合わない。  
とても友達なんて、無理だ。

## お家凸

「友達じゃない？」

「それ本当にシオンちゃんが言ったの？」

昨日言われたことをホムラとヤヤカに相談した。正直泣きそう。もしかしてシオンちゃんに嫌われてるのかもしれない。

「本当に言われました。き、嫌われちゃったんでしょうか……」

「えーいや、それだけはないと思うよ？」

ヤヤカの慰めが身に染みる。

昨日シオンちゃんから友達じゃない発言を頂いたあとの記憶は曖昧だ。ショックが強すぎたからだ。

確かお昼前には乾いた服に着替えて帰っちゃった気がする。今度お礼させてほしいって言ってたっけ。

「私、ちよつと馴れ馴れし過ぎたんでしょうか」

「いやいつも満更でもなさそうな顔してたでしょ、あの子」



「でも友達じゃないって言ってる、やっぱりそれって私のこと嫌がってるってことじゃ……」

自分で言ってる悲しくなってきた。言葉も尻すぼみ。

そしたら腕を組んで難しそうな顔をしていたホムラがくちを開いた。

「シオンは嫌がってるわけじゃないぞ」

「そ、そうでしょうか……」

「というかそもそもその話、シオンがわざわざ友達じゃないって言うこと自体違和感あるだろ」

それは、たしかにある。

「アイツ人を傷つけることは絶対喋らないからな」

「じゃあアレも傷つけるつもりなく喋ったってこと？」

「そうだと思っ」

シオンちゃんは優しい子だ。例え不満があったとしても絶対に口に出そうとしない。仮に出すときでも、相手を傷つけかねない話だけは絶対にしない。

「なあシオンはどんな顔して喋ってたんだ？」

「えーと、思い返してみれば、なんだか諦めてるといふかなにか嘲っているような雰囲気がありました」

「じゃあそれだ」

「それというと？」

「諦めだよ。ミナミと友達になりたくないとかじゃなくって、シオンが友達になるのを諦めてるんだ」

それはどうしてだろうか。友達になるのを諦めている？

私の疑問を汲み取ったのだろうホムラが話を続ける。

「少し話は逸れるんだけどさ、前から疑問ではあったんだよ。シオンって赤の他人である俺たちのために身体張ってくれたよな」

「そうだね」

「私達、あのときはただのクラスメイトでしかなかったのに、助けてくれたんですよね」  
「だな。でもその赤の他人ってところがおかしいんじゃないかと思うんだ」

コトリとグラスの氷が落ちる。ホムラは真剣な目をしたままだ。

「あのさ、本当に見ず知らずの赤の他人のために身体張る人間がさ。高校に入るまで全くの無名なんてことあり得るのか？」

「…それは、そうですね」

「そういえば私達、小中学校のころやんちゃしてたから結構有名人になっちゃったもんね」

「そうだろ？　じゃあシオンだって多少知られてもおかしくないだろ。そのはずなのに誰一人シオンのことを知らなかった」

たしかにそうだ。

シオンちゃん、ホムラのように誰彼構わず助けようとする人ならもつと有名になつてないとおかしいはずなのだ。

「じゃあこう考えたほうが自然だ。俺たち三人は、シオンにとって特別な存在なんじゃないか？」

「…特別って？」

「さあな。でも俺たちわりと有名なわけだし、どこかで知られてたんだろう。そして仮にそうだとしたら、俺たちと友達じゃないっていうのも意味合いが変わるんじゃないか？」

「小中学校の頃はやらなかった無茶を、やってしまうほど特別な相手。そういう人と友達になりたくない理由があるとしたら」

「…自分じゃ恐れ多くてなれない、みたいな感じですか？」

「まあそれが一番妥当なんじゃないか？　自分たちで自分のことを特別って言ってるのかなり恥ずかしいが」

なるほど。

そういう考え方もあるのか。

たしかにもしその通りならシオンちゃんの表情にも説明がつく。何かを嘲るような寂しい顔は、その実自嘲の類だったのかもしれない。

というかホムラはそういう話になると、いきなり聡明になる。

その聡明さをもつと恋愛方面でも発揮できればいいと思う。

「でも実際のところシオンちゃんがどう思ってるのかわかりませんよね」

「そりやそうだ。そういうのは直接本人に聞かないとわからないからな」

「そういえば私達、全然シオンちゃんのこと知らないね。小中学校の頃の話とか、趣味とか家族さんとか」

たしかにそうだ。

本人が自分から語ろうとしないから今までスルーしてきたけど、私達全然シオンちゃんのこと知らない。

「じゃあそれもまとめて調べちゃえばいいんじゃないか？」

「どうやってですか？」

「うーん、そうだな。じゃあこんなのでどうだ？」

そうしてホムラはシオンちゃんのことよく知ろう計画について語りだした。



あれから数日後。私達は相も変わらずファミレスにいた。反省会兼今後の怪異対策会議のためだ。

「…家にくるの…?」

「そうです。たまにはいつもと違う場所でやるのもよくないですか?」

「…なにもないよ…?」

私から提案してシオンちゃんのお家に行くことにした。聞くところによれば、シオンちゃんは一人暮らししているらしいし、突然行つても大丈夫だろう。それに家にいったらシオンちゃん的生活も知ることができるかもしれない。

ホムラとヤヤカにもあらかじめその旨を伝えてある。ヤヤカは携帯ゲームを持ってきているみたいだし、完全に遊ぶ気マンマンだ。

というか元はと言えば全部ホムラの入れ知恵だ。人の部屋には個性が出るから、人となりを知るには丁度いいらしい。それに思い出の品なんかを話題にあげて昔の話を聞ければもつといいとのこと。

そして私たちはシオンちゃんの家に向けて歩き出した。



シオンちゃんの家はアパートの一室だった。間取りはI L D Kだろうか。なんだか一人で暮らすにはちよつと大きめな感じ。

そしてなにより印象的なのが生活感のなさ。まるでつい最近引越してきたような具合で、モノが全然ない。

テーブル、教科書類、カバン、スマホの充電器。部屋の中にあるものはすぐに数え終えてしまいそうなほどに少ない。

「シオンちゃんって下宿だっけ？ こっちには来たばかりな感じ？」

それならこの生活感のなさにも納得かなと思っただけど、シオンちゃんはふるふると首を横に振っている。

「…実家…(´▽｀)…」

「実家、ですか」

にわかには信じがたい。

だって、ここが実家？ 人なんて住んでなさそうなくらいの雰囲気なのここが？

それにシオンちゃんは一人暮らしだと聞いている。

実家で一人暮らしとは、どういうことだろう。

なにか複雑な家庭環境の雰囲気を感じてしまう。

「…聞く?…昔の話…」

「言いたくなければ大丈夫ですよ。でももし教えてくれるなら嬉しいですよ」

「…おもしろい話じゃ…ないよ?」

「それでもです」

「…わかった…」

ピツと音を立ててエアコンの電源が入る。28℃だった設定温度を何℃か下げている。

道すがら買ったお菓子とジュースを用意して、私達はシオンちゃんが語りだすのを待った。

## チヨロい人間にはゴリ押しが有効です

前世の記憶を断片的に思い出したのは、たしか5歳の頃だった。

そして、そのときには私の家庭はすでに手遅れになった後だった。

5歳の誕生日前に、両親とシヨツピングモールへ行つていたときのことだった。誕生日プレゼントはどんなのがいいかなつておもちゃコーナーを見ていたはず。

そこに唐突に出現したのが怪異。ザコといつていいレベルの弱い怪異だったが、当時一般人である私たちにとつては避けられない死と同義だった。

すぐに通報したもののただの人間である私たち一家に逃げるすべはなかった。

結果私を庇つた父は死に、母は心に深い傷を負った。

誕生日は入院中に迎え、祝ってくれる人は誰一人いなかった。

それからは母と二人で暮らしていた。

精神を病んだ母は、まず国の怪異課を糾弾した。

しかし怪異課は十分すぎるほどの警戒を行っており、その上で発生したイレギュラーな事故であつたことが証明されてしまう。



それでも怪異課へ当たり散らす母を、祖父母はついに見限ってしまった。頼れる家族との縁を失って、ようやく母は怪異課への糾弾が見当違いであると悟ったが、なんにせよ手遅れだった。

そんな母が次に糾弾したのが、私だった。私を庇った結果として父が死んだのでそれは正当とっていい怒りだった。

お前さえいなければ。お前なんかがいなかったから。

全くもってそのとおりだった。

全ての暴力は正当な復讐だった。

しばらくして母は私をいらないものとして扱うようになった。今で言うネグレクトというやつだろう。私は断片的に蘇る前世の記憶を駆使して、なんとか一人でも生活ができるようになったため、そこまで苦ではなかった。

母はどこかで男を引つ掛けたらしく、あまり家に帰らなくなっていた。

中学2年の頃だっただろうか。母の虐待が露見し、私は児童相談所によつて一時保護されることになった。自宅への退所後、母はほとんど家にいることがなくなり、いつしか荷物をまとめてどこかへ行つてしまった。

行き先も連絡先もしらない。

このアパートは母と暮らしていた生活の残骸だ。



前世の記憶についてははぐらかしながら、私は昔の話をした。なんだか出来事だけを箇条書きにしたら悲劇的に見えるけど、主観としてはそうでもない。

前世の記憶があつたぶん冷静でいられたし、怪我や空腹への対処はずいぶん楽ができた。

それに母の怒りは正当なものだ。私というこの世界の異物のために、愛するものが死んだのだ。殺されなかっただけでも十二分に恩情ある対応だったといえる。

だから気にしなくてもいいのに。

やっぱり3人は優しすぎるんだ。

3人ともゲーム内のメインキャラクターなだけあつて、人情に溢れた魅力的な人なんだ。

わざわざ私のためなんか泣かなくてもいいのに。

「…辛かった、ですよね」

「…そんなに…」

ミナミに抱き締められていた。そんなに力を入れられるとちよつと苦しい。

肩越しに聞こえる涙声がミナミの心情を物語っている。泣いているのだ。私の昔話なんて聞いて、泣いてくれている。

…たしかに全く辛くなんてなかったという嘘になる。

でも仕方ないことだった。あの環境は自分の犯した罪への当然の仕打ちだったから。父を死なせ、母の心を死なせた。

拭い去ることのできない私の罪。

それを思えばなんと優しい罰だろう。

「…それに…希望もあった…」

そう、希望も確かにあったのだ。

今でも鮮明に思い出せる。

小6の時のことだ。街路のモニターにニュースが映っていた。その内容とは、今の幼馴染み三人衆のちよつとした活躍。子どもながら怪異を撃退し、学校みんなを守ったのだという。

「…昔…三人のニュースを見た…」

「私たちの、ですか」

「…すごいと…思った…世界には…きれいなものもあるって知った…」

前世の記憶が、その三人を主人公たちだと見抜いていた。

世界には美しいものがある。そしてそれは案外身近なところにいて、誰も助けなければ儂く砕けてしまうと知っていた。

私の目標はその時決まった。

ヤヤカを待ち受ける死の運命を、必ずや打倒する。

世界の異物なら、異物らしくズルをして三人を助ける。

それだけを目標に勉強をして高校を受験したし、異能も頑張つて鍛えたし、奨学金も申請した。

それで私の罪が雪がれるなんてこと決してないけれど、美しいと思つた人たちを守るのは、きつと素晴らしいことのはずだから。

「…今までがんばれたのは…みんなを知つたから…」

ヤヤカの死を回避するために、私はあらゆる努力をしてきた。果たしてそれは成つた。

あとはヤヤカとホムラの恋路をただただ応援するのみ。

私は報われている。

薄汚れた身で、望外の願いを叶えている。

私は間違いない幸福な人間なのだ。

だから、そんなふうに。

「…泣かないで…」

「…無理です。シオンちゃんはいつから泣かなくなっただんですか？」

たしか前世の記憶を思い出してからは泣いてない。精神的には大人と違っていいから、みつともなく泣いたりはいしない。

だから最後に泣いたのは5歳の誕生日前だったろうか。

「…5歳になる前は…泣いてたと思う…」

「それなら私が代わりに泣かなきゃ駄目です。こんなの泣かなきゃだめですよ…」

「…ふぎゅ…」

背中に戻されていた手に一層の力が込められる。ちよつと苦しいあまりに密着しているから心臓の拍動すら聞こえてくる。

「ねえシオンちゃん。私たちと友達になってください」

「…むり…私じゃむり…」

私は異物だ。ここにいないべき人間ではない。

だから、対等な関係ではいられない。

友達なんて無理な話だ。

「…つりあわない…」

「釣り合わないってなんですか！ 私が、私たちがシオンちゃんに友達になってほしい

んです」

「…でも…」

釣り合わない。私と三人では価値が違い過ぎる。

「私たちの願いを、シオンちゃんは聞けませんか」

「…それは…」

「私のワガママを聞いてくれませんか？」

言い方がずるい。

こんなにお世話になっている人からの頼みを聞けないのかという脅しと何ら変わらない。

「どうしてもイヤだつて言うのなら、いいよつて言ってくれるまで何でもします。私は何しでかすかわかりませんよ？」

うわ、これはもう完全に脅しだ。

ミナミメンヘラルートの気配がほんのり漂ってきてる。

これはちよつとマズイかも。

「…イヤなわけじゃ…ない…」

「じゃあ決定です。今から私達はお友達。ホムラもヤヤカもそれでいいですよね」

あ、コラ。二人ともなに頷いてるんだ。私は嫌ではないって言っただけで、いいなん

て言っていないぞ。

まったくもう。人ひとり死なせておいてのうのと生きてる人間と友達なんて、普通なりたくないでしょ。やつぱり三人ともとんでもないお人好しだ。

「私達はもうお友達です。復唱してください。今すぐ」

「…でも…」

「でもじゃありません！」

「…わたしたちは…トモダチです…」

それにそんなに強引に押しされちや引くしかない。今後やつぱやめましようとか言われたらそのときに友達解消すればいいだろう。

ちよつと悲しい話ではあるが、まあその時は仕方ない。普通に分不相応だからね。

そうやって半ばゴリ押し気味に幼馴染み三人衆＋異物はお友達になった。

私はやめたほうがいいと思うんだけどな。

## 立ち退き

家が燃えた。

いや燃えたと言ってもボヤ騒ぎ程度のものだった。大事になる前に消火はされ、実害もほとんど出ることにはなかった。しかしながら、その原因と言っても過言ではない私はオーナーに立ち退きを迫られてしまった。

このままでは高校一年にしてホームレス。流石にそれはヤバい。どうしてこんなことになってしまったのか、順を追って話そう。



自宅でシャワーを浴びていたときのことだった。

もう真夏で暑いのだが、私は長風呂が好きなので湯船でゆったりしていた。家族が家にいるわけでもないし、一人で風呂を専有しても誰にも怒られない。

湯船もそこまで大きいものではないが私は小柄なので相対的に大きく感じる。前世



で浸かってた風呂よりもなんだか贅沢に感じて気分もいい。

そんな時だ。なんとなくいつも聞こえているBGMに不穏なものを感じた私は、急いで風呂から上がり屋外の駐車場に向かうことにした。

現場についてみればどうにも不穏なBGMは大きくなるばかり。なにか怪異が出る予兆を感じる。これはまずいと思って怪異課に通報と異能部に連絡をした。

すぐさま近辺には警報が鳴らされアパートの住民も慌てて避難した。

私はささつと展開を済ませて怪異課の人と通話。本来なら私は非戦闘員なので、原則避難することが求められるが、事態が逼迫していたので現場待機。

『異能部の柘シオンさんですね。こちらは怪異課の者です。現在現場に急行しています。間に合わないかもしれません。その時は——』

「……できる限りのことは……します……」

『そうですか、ありがとうございます。危険を感じたら直ぐに避難してくださいね』  
BGMは更に騒々しさを増していく。だがなんとなく弱そうな怪異の気配がする。

星見カイト先輩の占いにも怪異課の予測にも引つかからなかったということは、出現を隠蔽できるほど高位の怪異か、それとも弱すぎて探知が難しいかのどちらかだ。今回のそれは後者みたい。

パリパリと眼前の空間がひび割れて、中から姿を現したのは背中が燃えている狼。

カテゴリーとしてはザコ中のザコ。群れることが前提の怪異なはずだが、今回は単体で出てきた。

『——出現しましたね。こちらでも確認しました。300秒以内に現着します』

「…それまで時間稼ぎ…?」

まあやつてやれないことはない。というかこれなら一人でもどうとでもできる。

多分このザコは私の異能の力に引き寄せられてこの場に出現したのだろう。異能持ちはその場にいるだけで怪異の出現を誘引する効果があるのだ。

ちはみに異能持ちがいない地域だと、ほぼランダムに出現するようになってしまい対処が困難になる。全国に怪異課から異能持ちが派遣されているのは、怪異の出現を予測しやすくするためでもあるのだ。

そして強い異能持ちほど強い怪異を寄せ付ける。逆に言えばザコの私に寄せ付けられた目の前の怪異は、必然的にザコだ。

「…たおせるよ…私でも…」

『わかりました。ではくれぐれもお気をつけください』

そうして私は目の前のザコ怪異と戦闘を開始した。



結論から言えばその戦いは泥仕合だった。燃える狼の攻撃は私にかすりもしないが、私の攻撃は狼にまるで効かなかった。私の攻撃力<sup>A</sup>が怪異の防御力<sup>D</sup>を下回っているように、槍が全然突き立たなかった。多分ゲーム的には最低保障の1ダメージが量産されてただろう。

そうこうしているうちに怪異課の方々が到着。あつという間に殲滅してしまった。

しかしその際に不手際があったようで、狼の背の炎がゴミ置き場に燃え移り、あわや火事という事態になったのだ。

これに対してオーナーが激怒。異能持ちは怪異を寄せ付けやすいということを知っていたらしく、私は立ち退きを求められてしまったのだ。

こればかりは仕方ない。体質みたいなものだから治しようがないのだ。

私に寄せ付けられて出現する怪異はザコばかりだから大丈夫と説明しても、現に火事一步手前の事態になったのは事実。こんな危険人物を置いておけないと追い出されてしまった。

まあ全国的に似たような事例は多いらしい。異能持ちが一人暮らしをしているケースが多いのも、似たような理由からだし。

「…っていうわけ…月末には家をでなくちやいけない!」

「それは、災難だったな…」

一応怪異課の方々の根回しにより、格安のアパートの目処が立っている。しかし高校から遠く通学が大変になってしまいそう。

今住んでいる家もあんまりいい思い出がないし、出ていくのはやぶさかではないが不便が増えるのはいただけない。

ホームラたちとも遊ぶのが難しくなってしまう。そう3人に伝えたら難しい顔をしだした。

やがてミナミが口を開いた。

「…それならウチに来ますか？」

「…どういうこと…？」

「シェアハウスってやつです。部屋は空いていますし、光熱費とかは折半でいけばなんとかなるんじゃないですか？」

だめでしょ。不純異性交遊だ。

肉体的には異性ではないが、私も心は男の子。狼だ。

えつちなことをすると異能の出力が上がるというエロゲ特有の要素があるため、異能持ちの異性ととの交遊は咎められないどころか世間的には推奨されているのだが、まあそれはそれ。

原作ではミナミルートを開拓したホームラがミナミと同棲するようになるため、ミナミ

宅は人ひとり迎える余裕があるというのは知っていたが、それでも迷惑をかけるのは忍びない。

シエアハウスは却下で。

「…だめ…めいわくかける…」

「かからないですよ。私の家、一人だと広すぎますし寂しいんですよ」

「…でも」

「そうだ。それなら家の家事とかも手伝ってくれませんか？ 掃除とか大変で困ってたんです」

ミナミがグイグイくる。

申し出はありがたいけど、うーん、流石にそこまで迷惑かけるのは良くないし。

「じゃあお試しです。ちよつとだけでいいんで家に来ませんか？ それで肌に合わなかったらなしくて」

うーん。ミナミもなかなか諦めてくれないな。

それならそのお試しとやらに乗ってみようかな。

ちよつとだけお泊りして、やっぱり合いませんでしたごめんなさいして出ていくのだ。幸い怪異課の方から紹介してもらったアパートの契約までは時間があるし、ちよつとだけならいいかも。

多分ミナミは人と一緒に暮らすつていうことを甘く見ている。

そのへんをちゃんと理解してもらうためにも、お試しは丁度いいかも。

「ね、お願いです。家来てください。ほんのちよつとでいいですから。必ず満足させますから」

「…ちよつとだけなら…」

「やった！　ありがとうございます！」

ミナミが露骨に上機嫌になった。というかありがとうございますつてなんだ。家を追い出されて困つてたのは私なので、お礼を言うのは私だろう。

ホムラもヤヤカもなんだかちよつと苦笑いしている。

そうと決まれば荷物をまとめて出ていかないと。

## チヨロい人間は甘やかしておけばすぐ墜ちる

ミナミの家にお泊りして一週間近く経つが、由々しき問題が発生していた。居心地が良すぎるのだ。

「シオンちゃん髪の毛さらさらしていいですね」

今は風呂上がり髪を乾かしてもらっている。ドライヤーでふわって感じに。

いやーこれは甘やかされてる。お世話されてるって感じがして大変やばい。このままじゃ墮落しそう。

ドライヤーなんていつもhighで適当に使ってたから、lowで時間かけて乾かすなんて初めてだ。というか人にやってもらうのは気持ちいいな。頭撫でられているみたいでちよつと気恥ずかしいが、心地良い。

「はい、いいですよ」

「…ん…ありがと…」

そんなことしてくれるミナミも風呂を上がって寝間着に着替えたあとだ。石鹸とシャンプーのいい香りが漂ってる。火照っているのか顔も少し紅潮していてセクシード。たぶん写真に収めたら高値で売れる。やらんけど。

一緒に風呂に入ろうという誘いは丁重にお断りした。これでも前世は男。JKと風呂に入ることに浪漫を感じないわけではないが、流石に良心が咎める。

男は狼という例に漏れず、私の心はウルフだ。変な気を起こしたりしないように自衛していかないといけない。こんなにお世話になっているミナミに、下心を持つて接したら罰が当たりそうだしね。

「またマツサージしてあげましょうか？」

「……ん……今日は大丈夫……」

ミナミは原作の頃からオカン気質が強い子だった。なんというか世話焼きなのだ。私の外見が子供っぽいのが琴線に触れているのかもしれないが、やたら世話を焼かれる。

お泊り初日はマツサージなんかされてとんでもないことになった。あんまりにも気持ちいいものだから完全に前後不覚になったし、そのまま寝落ちしてしまった。整体でもかじっているのだろうか。ミナミのマツサージには要警戒だ。ぐでぐでに溶かされてしまう。

それにしてもミナミ宅の居心地のよさは半端じゃない。部屋は広いし、ミナミの作るご飯は美味しい。あー墮落しそう。というかもうしてる気がする。

ちよつとだけ泊まって、あとは肌に合いませんでしたごめんなさいって出ていくつも



りだったのに、出ていく気になれない。むしろこここそ私の魂の実家だったのかもしれないってくらい住心地がいい。

「それでシオンちゃんは今後どうします？ ウチで住みませんか？」

「……うん……」

ひよいと抱えられて着地したのはミナミの膝の上。お腹に回された手だがつちりホールドされてしまった。湯上り後の体温が伝わってきてあつたかい。

ミナミはなにやら私をぬいぐるみと勘違いしているらしく、最近よくこういうことをするようになった。女の子っぽくて私はアリだと思えます。解釈の一致を感じる。

どうせなら私じゃなくて、部屋の隅っこにおいてある滅茶苦茶デカイクマのぬいぐるみを抱えればいいんじゃないかと思わないでもない。絵的に映えそう。アレ抱いてるところ見たいな。

まあ私は部屋のエアコンが効きすぎていて寒かったので、このぬくもりが丁度よく感じる。

冷房の温度をあげないかと聞いても、ミナミはこれくらいがいいらしい。気持ちはわかる。ガンガンにかけた冷房のなかで布団に潜ったりするのは最高だからね。炬燵でアイスを食べるような感覚だ。

「私はシオンちゃんがウチに来てくれたほうが、寂しくなくて嬉しいんですね。もし

あのアパートに行っちゃったら寂しすぎて泣いてしまうかもしれません」

「…冗談が…へた…」

「冗談じゃないですよ。そういうこと言う人にはこうです！」

「…っ…!?!」

素直な感想だったのだが、ちよつと怒らせてしまったかもしれない。くすぐるのはやめてください。あつ脇腹はだめ。そこ弱い。うなじもだめです。うそ、ぜんぶだめ。

「…あ…え…!?!」

「正直なところ寂しかったんですよ。こんなに大きな家だった一人だったので」

「…まっ…やめ…」

「シオンちゃんの前で言うのも失礼な話ですけど、ウチの両親は海外にいて全然帰ってこないですよ。ずーっと一人ぼっちです」

手を止めてから喋ってください。こっちは撥つたくてそれどころじゃない。ふぎやー！ こういうとき自分の非力が恨めしい。全然逃げ出せない。

「あ、ごめんなさい。シオンちゃんはくすぐったがりさんでしたもんね」

「…ふーっ…ふーっ…」

やつと解放してくれた。いや、まだ膝の上だがくすぐる手は止めてくれた。抗議の意味を込めて背後を振り返ったが、ミナミの顔に反省の色は見えない。くすぐすと笑って

いる。

最近ミナミのスキンシップが激しい。推しの子の一人と親密な仲になれているって言うのは正直役得だし、嬉しいと感じるところもある。でも擦るのはナシだ。前世に比べて感覚が鋭敏なので私にはよく効く。こんなことが頻繁にあつたらそのうち酸欠で死ぬかもしれない。

「それで、どうですか？ シオンちゃんさえよければ一緒に暮らしませんか？」

正直に言えば、一緒に暮らすのはアリだと思っている。

よくよく考えてみれば、ミナミの好きな人が何者なのか調べるなら同棲できるこの状況は非常に有利だ。好きな人いるのにクラスメイトとシェアハウスなんてしている現状に、強烈な違和感があるがまあそういうこともあるだろう。

これだけ密着して生活していれば、多少は好きな人の情報だって仕入れられそうだからね。

あ、そうだ。今度ホムラにもミナミの好きな人について聞いてみるか。私よりもしかしたら情報握っているかもしれない。

いやーこれでミナミの好きな人情報集めにも目処が立ちそうだ。

別にミナミに甘やかされている生活に屈したわけじゃないよ。

ほんとだよ。

「…わかった…いいよ…」

「本当ですか！ 嬉しいです」

ミナミは大喜びしている。私が一方的にお世話になっただけなのに、なんだか申し訳ない気分だ。

光熱費やら食費やらは折半だけど、家賃とか払ってるわけじゃないしこれじゃあ養ってもらってるようなもの。なにかしら他の手段でお礼をしないと。

とは言っても私からできるお礼なんてたかが知れているのが困りどころ。

「…ありがと…お礼は…なんでもする…」

「え、それ本気ですか？」

「…まじ…めっちゃまじ…」

もちろんマジだ。こんなによくしてもらってるんだからいくらでもお礼はする。

多少の無茶振りだつてやってみせるつもりだしね。推しの子の一人からの要求ならむしろ役得だ。なんだつてやるつもり。

「……………じ、じゃあお礼は保留って方針で」

「…おつけー…なんでも言ってる…」

でもなんだか変にプレッシャーをかけてしまったみたい。ミナミは長考の末、お礼の内容を保留にした。

まあなんでもいいけどね。

# 人の振り見て我が振り直せ

夏休みの課題をさっさと終わらせようと、俺たちはまたミナミの家に集合した。課題をやったり、ゲームをしたりとグダグダと時間を過ごす。

そしたらミナミとヤヤカが席を離れている内に、シオンがなにやらちよいちよいと袖を引っ張ってきた。

珍しくシオンが俺一人に対して聞きたいことがあるようだ。

「どうしたんだ、なにかあったのか？」

「…うん…聞きたいこと…ある…」

そういえば最近になってシオンの雰囲気は少し変わったな。なんとというか、ミナミに懐いているような気がする。

もともとミナミは積極的にスキンシップをとろうとしていたのだが、シオンは恥ずかしがってよく逃げていた。頭を撫でられそうになるとするりと逃げていく様子を、これまで何度も見てきた。

それが最近なくなってきたのだ。頭を撫でられても気にしないし、なんならミナミが

膝をぼんぼんと叩いたらその上に座りに行くようになっていた。まるで人に心を開くようになった猫みたいだ。

…その無防備さが、母親から得られなかった愛情の代償行為であろうことを、俺は理解している。シオンに自覚はない様子だがきつとそうなのだろう。こういう面において俺はやけに察しが良くなってしまふ。

この前シオンの過去について本人から聞かせてもらったが、俺としては衝撃よりも「ああやっぱり」という納得が先行した。

前から気になってはいたのだ。

あのぼつぼつとした喋り方はなんなのだろうと。きつと幼い頃の精神的な外傷に由来している。

高校生らしからぬやけに小柄な体格はなぜなのだろう。多分成長期の栄養失調が原因だ。

なぜあんな自己犠牲を厭わないのだろう。おそらく家族に愛されなかった経験に基づく精神性が理由だ。

ああくそ。俺はこういう益体もない邪推ばかりしている。

シオンは今、幸せそうだ。ならそれでいい。過去は消えなくても未来の幸福を願えるのならきつとそれでいいはずだ。

いま必要ではない思考を意図的に無視する。

「なんだ？ 何でも言ってくれ」

「…ん…その…」

妙に歯切れが悪い。シオンはきよろきよろとあたりを見回してミナミたちが帰ってこないことを確認すると、ようやく口を開いた。

「…いるんだって…」

「何がだ？」

「…ミナミに…その…好きな人…」

「…え、それマジ？」

ミナミに好きな人が？

にわかには信じがたい。

でもシオンはきつと嘘は言わないだろう。そしてその好きな人に心当たりがないかと聞きたいのだろう。

記憶を精査する。ミナミの好きな人。いや、どうだ？ そんな人いるか？

…。

…。

…。いやいるわ。一番それっぽいやつ。目の前にいるわ。



え、もしかしてそれシオンでは？

そういえば最近やけにシオンを気にかけていた。ミナミは誰にでも優しい人間だが、言い換えてみれば誰も特別扱いしないタイプだ。俺とヤヤカは幼馴染なぶん特別扱いではあったが。

そんなミナミが、やけに入れ込んでるのがシオンだ。なんか今同棲しているし、やたら激しいスキンシップもシオン以外にやっているとところを見たことない。

なるほど考えてみれば、シオンは俺たちのピンチを颯爽と救ったヒーローみたいなものだ。そのときに惚れてしまったなんてことももしかしたらあるのかもしれない。

思えばミナミはこれまで好きな男がいたなんて話は聞かなかつたが、女の子を恋愛対象に見ているからなのかもしれない。そういう前提で考え直せば、今のミナミの行動もより理解できる。

アイツ、シオンを落とすつもりだ。性的に。

「…ない…う…心当たり…」

シオンの顔をまじまじと見る。最近になってようやくわかつたが、シオンの顔は意外と雄弁だ。表情の変化はほぼないが、思っている事自体はすぐに顔に出る。

だからその捨てられた子犬みたいな顔も、よくわかつてしまう。本人はきつと無自覚なのだろう。なんで自分がミナミの好きな人なんて気にしているのかよくわかつてな

いまま、手当たりしだいに調べているに違いない。

「うーん、俺はよくわからないな。でもなんでシオンはそんなこと気になるんだ？」

「…なんで…なんでだろ…？」

案の定だ。

シオンは完全にミナミに絆されている。多分本人も自覚がないままに、ミナミのことを好きになっている。だから気になって仕方ないんだ。

まだシオンのなかで、その『好き』と『憧れ』がうまく区別ができていないのだ。シオンは昔の俺たちの活躍に対して、変に憧れを持ってしまったのが原因だ。自分の感情をうまく理解できていない。

ふーん。なんだこいつら相思相愛じゃん。

「まあ俺も気になるし、機会があったら調べてみるよ」

「…そう…ありがと…」

ちよつとそわそわしているシオン。この子は自虐がすぎる部分があるからきつとミナミも難儀するんだろうな。



「ミナミ、ちよつといいか？」

「どうしたんですか？」

運良くミナミと二人きりになれたのでちよつと話をする。ミナミの好きな人についてはほぼほぼ確信しているが、念の為確認しておきたい。

「シオンから聞いたよ。好きな人がいるんだってな」

「あー、えつと、はい。いますね、好きな人」

「シオンだろ、好きな人」

「…なんでそういう察しの良さを自分の恋愛で発揮できないんですかね」

「どうやらビンゴだったらしい。」

「それならさっさと告白しちまえばいいんじゃないか？ シオンも多分嫌がらないぞ」

「それができたら苦労しないですよ。シオンちゃんは自分の価値を低く見積もりすぎる子なので」

まあたしかに今のミナミが告白したところで、シオンは冗談だと思うだろう。アイツは愛されるということに慣れていない。愛されるだけの価値なんてないと思っただろう。

「じゃあどうするつもりだ？」

「理解わからせます」

「そうか、じゃあわからせてやってくれよ」

そうだ。シオンにはわかってもらう必要がある。自分は人から大切に思われている人間だとわかってもらわなくてはならない。自分を無価値だと判断しているその精神性を是正することがきつと必要だ。

そんなことを考えていたらミナミから反撃が飛んできた。

「というか、私のことばかりじゃなくってホムラもそろそろ恋愛と向き合うべきなんじゃないですか？」

「なんのことだ？」

内心ぎくりとしたが、とりあえずしらばっくしておく。

でもだめだった。

「あなたにも好きな人、いるでしょう？ 私がわからないとも思いますか？」

「…敵わないな。いつからわかってた？」

「ずーっと前からですよ。何年幼馴染やってきたと思ってるんですか」

…まあ、正直？ 好きな人はいる。いるけどさあ、なんというかそういうのちよつと怖い。

これまでの関係とか考えたら勇気が出ないし、なにより向こうにその気がなかったら

と思うとぞっとする。

「ホムラもはやく答えを出したほうがいいと思いますよ。あの子もいろんな人から人気がありますからね。うかうかしていたらかっさくらわれますよ?」

「耳が痛い話だな…」

うーん、そうだな。

たしかにそのとおりだ。

金髪の幼馴染を想う。湧き上がる感情の正体を俺は知っている。知っているくせに怖がつて見ないふりを続けてきた。

俺も、自分の気持ちとそろそろ向かい合うべきときなのかもしれない。

## 難しいことは考えないほうが楽

お昼ごはんを食べて皿洗い。さきつと家中の掃除も済ませた。洗濯物もたたみ終わったししばらくは暇だな。

ぐてーつと横になって伸びをする。手のひらからかすかにセロリの匂い。昼に食べた生春巻きの具材に使ったからだろう。筋を取っているときに爪の間に匂いが染み付いてしまったようだ。

ミナミがテレビの電源をいれた。夏の甲子園が開幕しているらしく高校球児の熱戦が生中継されている。

「ありがとうございます。二人で分担すれば家事も楽ですね」  
気づけばもう3時前だ。おやつに甘いものでも食べたいな。

この前ヤヤカにもらったチョコでも食べよう。

ポトルコーヒーと牛乳を冷蔵庫から出して、一対一に割ったコーヒー牛乳にする。安っぽい甘みと苦味がちょうどよく共存していて私はこれが好きだ。ミナミは7対3くらいに割っていて私のとは色合いが違う。

ヤヤカにもらったチョコは、なんだか大仰な箱に包まれている。フランス語だろう

か。よくわからない言語で説明書きみたいなのがされてる。ヤヤカの実家から送られてきたやつのお裾分けらしい。

遠慮なくいただく。

ひよいっと口の中に放り込んだチョコをそのまま噛み砕く。中からどろりと溶け出す濃厚な蜂蜜の香り。あ、これ美味しい。

高そうなチョコだから今日は一個だけにするけど美味しい。どんどん食べたくなるし、気分もなんだかうきうきしてきた。

「…あれ、これってボンボンじゃないですか？ 蜂蜜酒の味がします」

「…そうなの…？」

ふーん、これボンボンっていうんだ。たしかにお酒の味がした気がする。

口の中に残る蜂蜜の余韻をコーヒー牛乳で洗い流す。いやー甘いもの食べたら気分が良くなってきた。ミナミも一気にコーヒー牛乳を飲み干したみたい。グラスがからっぽだ。あと膝の上にも誰も乗ってない。からっぽだ。

そういうええいつも私ばかり膝の上に乗せられてたけど、ミナミだって乗せられてしめるべきなんじゃないかな。あれ結構恥ずかしいんだよね。人にやるばかりで自分はやられないなんて思っていないでしょう。

ムクムクとイタズラ心が湧いてきた。

思い立ったが吉日とはよく聞く。さつそく私の膝の上に座らせてみよう。きつと面白い顔をするに違いない。想像しただけで笑えてきた。

「…シオンちゃん、もしかして酔ってます?」

「…ゼーンゼン…」

ぐいぐいと背後から手を回して引つ張る。うーん乗せられない。私がミナミより小さいからうまく行かないのかな。仕方ないプランBに移行しよう。

ミナミを座らせるのが無理なら寝かせればいいのだ。いわゆる膝枕。これなら身長なんて気にせずできそう。

肩に手をかけて強引に引き倒す。いや強引とは言ったが、実際には困惑した様子のみナミが自分から寝転がったただけだ。

「たったアレだけなのに見事に酔ってますね」

「…よつてないよー…」

そうそうこの視点だ。上から見下ろすというちょっとした優越感。気分がいい。

ミナミが寝転んだまま手を伸ばしてくる。頬を撫でる温度が少しひんやりしていて気持ちいい。

それにしてもミナミは顔がいいな。作中でメインヒロインやるだけのことはある。ヤヤカが人間離れた人形みたいな美貌だとすれば、ミナミは日本男児が抱く幼馴染み



幻想そのもの。こんなにキレイだと引く手数多なんだろうな。

多分ミナミに告白されて堕ちない人間はいないだろう。優しいし、可愛いし。気になるな。ミナミの好きな人。本当にそんな人いるとしたら、きつと簡単に射止めてしまうんだろう。優しいし、可愛いからイチコロだ。

うーん、なんだかもやもやするな。推しの子が巢立っていくのを見るのは少し悲しい。ミナミの好きな人はこれまで色々調査してもわからなかったから、きつと私がよく知らない人なのだろう。そういうぽつと出にミナミを取られてしまうのが悔しくて仕方ない。

「ヤヤカはこうなるとわかって渡したんでしようね。まったくもう」

なんとなくミナミの頬を手で挟む。むにむに。いつもやられてるぶん私からお返しだ。手からセロリの香りがするって言われた。もつと念入りに手洗いしておけばよかったかな。

ミナミは横になったまま私の体をぺたぺたと触ってくる。いつものことだがくすぐったい。

そのまま口を開いた。

「…ねえシオンちゃんは好きな人いないんですか？」

「…いるよ…ミナミとホームラとヤヤカ…」

「うーん、そういう好きではなくって恋愛的な意味の方ではないんですか？」  
なんだそりゃ。

恋愛なんて言われても私にはよくわからない。そんな資格ないし。

「…恋とか…わからない…」

「そうですか」

あ、でも愛ならわかるかも。

他人の無条件な幸福を願えることが愛だって話は聞いたことがある。それなら私は三人衆の幸せを願えている。これは愛かもしれない。原作愛ってやつかな？

「…でも…三人のことは…愛してる…？」

「なんでそこで疑問形になっちゃうんですか」

もそもそと体勢を変えるミナミ。あの、膝の上でうつ伏せになられるとんだかいけないことしてるみたいでいけないと思います。くすぐりたい。

お腹に顔を押し付けられた。なんだこの可愛い生き物。彼女は原作で、ヤヤカを失って傷心中のホムラを支えるべく奮起していたためこういつた甘えた感じの仕草は全然しなかった。なんだか新鮮。

「私もシオンちゃんのこととは愛してますよ」

「…それは…だめだよ…」

「どうしてですか?」

いや、だって、だめでしょ。

私と三人衆ではやっぱり人としての価値に差がありすぎる。街のヒーローと事実上の人殺しが仲良しこよしなんて事自体、すでにだめ。

それに、私が他人に愛されるなんてことあつてはならない。そんなの認められないし、耐えられない。

「…どうしても…」

「答えになつてないですよ」

私は愛されるべき人間ではない。そのはずだからだ。

だってそうじゃないと、愛してくれなかつた母に手を上げてしまいそうだった。

悪いのは私で、正しいのはお母さん。

そうじゃなきゃ耐えられない。耐えられなかつた。

「なんとなく考えていることがわかりました。やっぱり答えなくてもいいです」

「…ほんと…?」

「はい、悲しいことは考えなくていいんです。考えただけ損ですから」

そういうものなのだろうか。

でもどうしても考えちゃうんだよな。一回でも自分の感情を直視してしまうと、その

歪さに目が逸らせなくなってしまう。

もやもやする。

もしもの仮定が頭の中に列挙されていく。もし私が悪くなかったとしたら。もし母が悪かったとしたら。もやもやする。

「そんな悲しい顔するくらいなら考えなくていいんです。それが難しいなら、考えられなくしてあげます」

「……わ……」

飛びつくようにしてのしかかられた。体勢を崩して私は仰向け、ミナミはその上に馬乗り。あ、この光景前にも見たことがあるかも。

脇腹や首元に伸びてきた手が、壊れ物を扱うような繊細さでいじくり回してくる。くすぐりたい。ジタバタしても逃げ出せない。

肋骨をなぞるようなフェザータッチで頭は真っ白。声も出せない。た、たすけて！

テレビから流れる甲子園の実況と、私の声にならない悲鳴で部屋が満たされる。しぬしぬ。ギブアップです。もう許して。

しばらく続いたくすぐり地獄によって、私はすっかり考えていたことを忘れてしまっただし、疲れでへろへろ。

多分余計なことを考えていた私への気遣いのつもりなのだろう。でもくすぐるのは

やめてください。死んでしまいます。

## 浴衣はスレンダーな人に向いているらしい

なんだか最近ホムラが積極的だ。なんとというか、言葉選びだったり行動だったりやヤカの好感度を意識したものになってる気がする。

この男、エロゲーの主人公なだけあつて気遣いもできるし察しがいい。ついさつきも立ち上がり際にヤカカの頭をぼんぼんと撫でていた。普通の人間にはそういうボディタッチはハードルが高いのだが、自然体でやってしまうのは流石としか言いようがない。

つい最近まで一緒につるんでる悪ガキですみたくないな雰囲気だったのが、急に甘酸っぱい感じになっている。これはホムヤカカップル成立まで秒読みと見た。

聞くところによればミナミがホムラに発破をかけたらしい。うかうかしていると他の男に取られるぞつて。よくやったミナミ。ナイスすぎる。

「そういえばもうすぐ夏祭りですね」

「あつそうそう！ 花火もやるんでしょ、みんなで行こうよ！」

「そうだな。毎年行ってるし今年も行くか」

お、きたきた。夏祭りイベント。

ここで好感度が一定値を超えているヒロインと夏祭りにいくと、告白フェイズに入ることができたりする。とはいえ流石にホムラとヤヤカの関係はそこまで進行してなさそう。

まあそれでも一緒に祭りを楽しめば一気に距離も縮む。このイベントは見過ごせない。

「シオンちゃんは行ったことあります?」

「…ない…」

「じゃあ一緒に行きましょう。きつと楽しいですよ」

もちろん同行する。出歯亀根性丸出しなので、ホムラとヤヤカの雰囲気存分に観察したい。早くくつつかないかなー。

「ところで浴衣とかって用意してますか?」

「…?…Tシャツでいいよ…」

「ダメです。絶対ダメ。今度一緒に選びましょう、わかりましたね? はいお返事」

「…えー…」

「着付けとかは手伝いますから、ね?」

「…はい…」

圧に押されて屈してしまった。浴衣とか興味ないしめんどくさいんだけど。でもミナミさんその笑顔はやめてください。なんだか怖い。

三人衆の浴衣姿には需要があるけど私のはいらんやろ。自分でも言うのはアレだけど、私は子どもっぽい外見だし似合う気がしない。似合ったところで私は別に嬉しくないし。

確かミナミは自前で浴衣持ってたし、ヤヤカも実家にあるんだったか。ホムラと私はレンタルになるのかな。こういうの用意したことないから全然わからない。いくらくらいかかるんだろ。

でも三人衆の夏祭りに一人だけTシャツ着た人間が混じってたら、せつかくの思い出が台無しになりそうな気がしないでもない。それなら浴衣着たほうがいいか。

なんなら私だけ夏祭りへの参加を見送った方が、みんなの思い出的にはよりいいんじゃないか？そう言おうと思っただけど、なんだかすごく怒られる予感がしてやめておいた。

まあ適当に浴衣を見繕っておくか。



浴衣はミナミと一緒にレンタル店で探した。どれにしようかな神さまの言うとお



りーって指差しで選ぼうとしたら滅茶苦茶叱られた。泣きそう。

というかミナミは自前で用意できてるのに、わざわざ私の浴衣選びに付いてきてくれたんだな。案の定あれやこれやと見繕ってもらうことになって随分時間がかかってしまった。

最終的には音符のマークがついた落ち着いた色合いのやつに決定。へー、浴衣って言ったら花柄のイメージだったんだけどこういうのもあるんだ。

そして夏祭りイベント当日を迎えた。

浴衣はミナミに着せてもらって、前髪にはヘアピンをつける。ピンとか持つてなかったけどミナミが貸してくれた。三日月の形をしたおそろいのやつだ。

足には下駄だ。スニーカーじゃだめだって予めダメ出しをされていたので仕方ない。これ歩きにくいな。

「ぬぐぐ、これなら落とせるでしょ!」

「おい、おいコラヤヤカ。流石にそれは大人気ないって」

夏祭り会場は人でごった返してるし、たくさんの屋台や出店があった。ヤヤカは早速射的で遊んでる。というかアレは身を乗り出し過ぎなのでは？

屋台の店長っぽい人もすごい苦笑いしてる。ギリギリを賣めた姿勢からヤヤカが引き金を引く。腑抜けた音を立てて飛び出したコルク弾は、お菓子の箱にぱこんと当

たった。でも残念ながら落とすには至らなかった。

ムキーっと地団駄踏んでいるヤヤカは幾何学模様の水色の浴衣。爽やかで涼し気な印象だ。彼女の目立つ金髪と相まって、海外から旅行に来た外国人みたい。

ホムラはまあ普通に浴衣だ。野郎の着てるものなんてみんな気にしないでしょ。見るならやつぱり女の子だよね。

ミナミは黒地に三日月模様があしらわれた感じの。なんだが私の浴衣とデザインが似ているような気がしないでもない。いやよく考えたらミナミの浴衣は自前のなので、私を選ぶときにミナミのやつに寄せられたのかな？

それにしても眼福だ。やつぱり可愛いね。胸の大きい人は和服が似合わないって聞いたことがあるような気がするけど、普通に二人とも綺麗だ。

ほら、ホムラもヤヤカに気の利いたこといいなよ。似合ってるよとか。

「それにしても、三人とも浴衣がよく似合ってるな。キレイだと思うぞ」  
違うだろ。

ちやんとヤヤカに面と向かって褒めなきや駄目だ。

範囲でくくって褒めてるんじゃないや適当感は否めない。ヤヤカの好感度を狙い撃ちしなさい。

内心ぐぬぬって思ってたが態度には出さない。夏祭りはまだ始まったばかり。二人

の距離を縮めるチャンスはまだまだある。

ということでもホムラとヤヤカが二人つきりになれるように私も頑張るか。

ミナミの浴衣の袖をちよいちよいと引つ張る。伝わってくれ。

「…ミナミ…あれ…あれほしい…」

「うーんと、あれはりんご飴ですね。じゃあ買いますか？」

「…ちよつといつてくる…」

「私もシオンちゃんについていきますね。二人は適当にぶらぶらしててください」

うおーナイスミナミ！

ちゃんと私の意図が伝わっている。これでホムラとヤヤカは二人きり。

ミナミが二人の仲を応援してくれるのが本当に助かる。

「シオンちゃん、人だかりではぐれないように手握つてもらえますか？」

「…うん…」

実のところ人波に攫われそうで困つたので遠慮なく手を取る。これならうつかり押し流されそうになっても引つ張ってもらえるな。ミナミの腕力を見た目不相応に強いからね。

あと普通にりんご飴つてやつが昔から気になっていたので食べてみたい。

そうして私達は出店の前に並ぶのだった。

邪な妄想が捗るけれど裏切りみたいなものだしやめたほうがいい

「どうです、おいしいですか？」

「……うん……」

りんご飴なんて前世含めて初めて食べた。屋台で見かけることはあってもわざわざ買おうとは思わなかったからね。

それにしてもこれはイケるな。飴の甘みと果実の酸味がいい。ちよつとばかりチープな感じもあるが、そこは夏祭りの思い出という補正で誤魔化そう。

ミナミと私はそのまま焼きそばやフランクフルトなど、屋台の品物をちらほら買いながら周囲を散策した。

ついでに立ち寄った神社に賽銭を放り込んでおく。何を奉つてるとかは全然知らないが、こういうのは雰囲気的大事なのだ。適当に「今みたいな日々がずっと続きますように」と祈っておいた。

私が入れたのは5円玉。ミナミは115円入れたらしい。なにかの願掛けかな。  
115円いいこ緑がありますようにってことだろうか。

「ちよつと待つて下さい」

「…なに…?」

「下駄脱いで足見せてください。左足です」

うへ、バレてた。

ベンチに連れて行かれて足を見られる。少し赤くなっていた。

そうなのだ。実はしばらく前から親指と人差し指の間が擦れて痛かった。靴ずれつてやつだ。我慢して歩いてたつもりだったのだが見破られてしまった。

「ごめんなさい、気付かなくて。絆創膏と消毒液はあるのでちよつと手当します」

「…いいよ…大丈夫…」

「ダメです、はいちよつとヒリヒリしますよ」

消毒液がヒリヒリすることより、足を触られててくすぐったいことの方が個人的には問題なのだが。変な声出そう。出ないけど。

「サンダルとか用意してないですし、ここからは私がおんぶしていきますね」

「…大丈夫…」

「大丈夫じゃないです。遠慮しないでほら」

ミナミは異能持ちなだけあって、やろうと思えば信じられないほどの身体能力を發揮できる。それなら私一人くらい軽々背負えるだろう。

でもそれはそれとして迷惑をかけることになりたくないし、なにより恥ずかしいのだが。

硬直している間に、目の前にしやがみこまれてしまったのであとに引けなくなってしまう。しぶしぶ体重を預ける。身体を離していたらバランスが取りにくいと怒られてしまった。ちゃんと密着しないと。

顔を近づけたところから香るミナミの匂い。なんで女の子ってこんないい匂いするんだろう。同じシャンプーとボディソープ使ってるはずなのに私とは違う香り。

「うーん、そろそろ花火が始まる頃ですね。景観がいいところがあるんで移動しておきますか?」

「…うん…」

背負われたまま進む。

周囲の目線が痛い。なんだが微笑ましいものを見守ってる感じの生温かい視線だ。

ホムラとヤヤカにはメッセージを送っておく。そろそろ花火だぞと。でもなかなか既読がつかない。メッセージを確認することさえしないあたり、二人ともいい感じの雰囲気だったりするのかもしれない。これはいいぞ。

そうして到着したのは堤防。ようやく背中からおろしてもらえた。その斜面にミナミがビニールシートを敷いて座り込む。私もその隣に失礼する。

ふと見回した周囲に見慣れた顔。ちよつと遠くに座っている人影に見覚えを感じる。

「…ねえ…アレ…」

「ホムラたちですね。随分仲が良さそうですね」

ホムラとヤヤカが談笑していた。こちらに気づいた様子はない。そして二人ともなにかいつもより親しげ。まるで恋人どうしみたい。もしかして私が思ってたよりも進んだ関係になってらっしゃる？

「そこまではないと思いますよ。ほら二人とも照れが見えますし」

「…そう…？」

よくわからないな。私にはもう二人が付き合ってますって言われても信じてしまいたい。うーん恋愛経験ゼロの私じゃ理解が難しいぞ。

でも幼馴染のミナミの目から見てそうなのなら、きつとそうなのだろう。いつ二人は告白やらするんだろうな。相思相愛つぼいのはもう見ただけでわかるので早く付き合つてほしい。

ドン、と太鼓を叩いたような音が響いた。

ふと見上げれば大輪の花。

夜空を華やかに彩る色とりどりの火花だ。

「始まりましたね」

「…うん…」

「綺麗ですね」

「…うん…」

祭り囃子のBGMと周囲の観客の声が響く。

左手になにかが重ねられる感触。ミナミの手だ。座ってるからはぐれる心配なんてする必要はないのだが、まあいいか。

視線を上げる。

ミナミの横顔は花火に照らされてぞっとするほど美しい。

そしたら花火そっちのけで顔を見つめていたのがバレたらしく、目があってしまふ。はにかんだように笑っていた。

私は呆けたような顔をしていたと思う。ゲーム内でミナミルートを進めていたときの初めての感動に近いものを感じていたからだ。

その屈託ない笑顔を見るのがなんだかいたたまれないような気がする。

それは私に向けられるべきものではないと思う。

「…綺麗ですね」

「…うん…」

目をそらしたのは私から。



さつきも聞いたような言葉に同じような態度で返す。

そうだ、ホムラたちはどうだろう。

見たところいい感じの雰囲気だ。二人とも顔を赤らめて花火を見ている。ヤヤカの手の上にはホムラの手が重ねられているようだ。もうあれ恋人同士じゃん。その距離感はまだ付き合ってるでしょ。

「…二人とも…仲良さそう…」

「そうですね」

なんとなく、自分の手元に視線を戻した。

私の手の上にはミナミの手が重なっている。

ホムラたちを見る。

ヤヤカの手の上にはホムラの手が重なっている。

ふとそれらの二つが、なんだかよく似ているように思ってしまった。

その所作は、恋人同士みたいだななんて思った。

もし私がミナミの恋人だったらと、ほんの少しだけ考えてしまった。

脳内をゲームの知識と映像が走馬灯めいて巡る。テキスト、スチル、CGの記憶たち。

「…っ！」

「どどっしましたっ？」

邪な想像をした。

くそ、最悪の気分だ。

ミナミは絶対そういうつもりじゃない。それなのに、まるで自分が主人公の立場で、ヒロインと接しているかのような妄想をした。

私はホムラみたいに優れた人間ではない。しかも肉体的には女だ。それなのにミナミに対して攻略しているヒロインであるかのような妄想をした。

最悪だ。きつと顔が赤くなっている。

よりにもよって私なんか、ミナミルートの主人公であるかのような妄想が脳を過ぎた。彼女の好感度を稼いでヒロインとして付き合うという想像。

許されるはずがない。

「…顔が赤いですよ、大丈夫ですか？」

「…うん…」

心配そうに覗き込んでくる顔を見れない。まさかあなたでえつちな妄想をしましたなんて口が裂けても言えない。

こっち見ないで。あと手も離して。

顔の熱が引きそうにない。

そうだ。よく似ていると思ったのだ。

さっきのミナミの横顔は告白フェイスを終えたあとOKを返されたときの一枚絵にそっくりだった。

いつまで私はゲーム気分なんだ。

私は主人公のホムラじゃない。ただのモブにすぎないのに、なにを勘違いしてやがる。

自分の中に芽生えた邪な感情を上手く処理できない。私も心は男だからね。女の子でえつちな妄想をすることだってある。でもミナミをその対象にしてはいけないだろう。こんなのバレたら間違いなく幻滅される。

「…何があつたのか知りませんが、ちよつと落ち着いてください」

「…ごめんなさい…」

「え、なにがですか?」

「…なんでもない…」

いや、マジでごめんなさい。

あなたの顔見てエロシンン思い出してごめんなさい。

まあ私の最推しはヤヤカとはいえ、ミナミもまた推しの子だ。もちろん好き。like というよりloveだ。尊いって感じ。

そういう子と主人公よろしく手を重ねるのは、そりゃ妄想が捗ってしまう。捗っちゃ

だめだけど。こんなに良くしてもらつといて妄想のネタに使うなんて裏切りみたいなもんだ。自分で自分を殴りたい。

ああもう、顔の熱がひかない。夏祭りに浮かれて暑くなつたつてことで誤魔化せないかな。

花火が終わつて再びおんぶされることになったとき、どうやら私の顔は茹でダコみたいに赤くなつてたらしい。合流したホムラとヤヤカに心配されたり生温かい視線を向けられたりした。

顔が赤かつたら熱中症でも疑われそうだけどあんまりそういう心配はされなかつた。なんでだろう。

なんだか「あつ（察し）」つて感じだつた。何を察したんだお前ら。ちよつと答えてほしい。嘘、やつぱり答えないで。

そうやって私達の夏祭りは終わりを迎えた。

清楚な顔してる人ってたまにえげつない趣味してる

「おやつどうですか？ まだヤヤカにもらったチョコもありますし」

「…また今度…」



「シオンちゃん、ちよつとこつち来てくれませんか？」

「…また今度…」



「一緒に映画見ませんか？ ゾンビものを録画してあるんですよ」

「…また今度…」



「お風呂どうします?」

「……ごめんなさい……」

「ごめんなさい!?!」



どうにも最近ミナミの顔をちゃんと見れない。原因はアレだ。

この前うっかりミナミのえっちなシーンを思い出したり妄想してしまったせいだ。あの時の記憶が頭をよぎって申し訳ないやら恥ずかしいやらで、とてもじゃないけど顔なんて見れない。

というか今までのスキンシップもよくよく考えたらだいぶエロくなかったか?

膝の上に乗せられてるときとかかなり際どいところ触られてた。肉体は女の子同士だからミナミにそんな気がないことは間違いないが、今同じことをされたら平然としていられる気がしない。

私の身体は子どもっぽいつるぺたボディだが、精神的には成熟している。そりゃあエ

口いこと考えればムラムラもする。そんなのミナミに悟られてみる。ドン引き間違いなしだ。考えただけで恐ろしい。

問題はそれだけじゃない。ムラムラしたところで解消する手段がないのも由々しき事態だ。同じ屋根の下で暮らしている以上、普段何してるかなんて筒抜けだ。勝手知ったるミナミはともかく私が変わったことし始めてバレない保証なんてない。

まあそもそも女の子の自家発電なんてやり方よくわからない。というか怖い。怖いのでやったことない。

ちなみにゲーム内のミナミは、かなりやばめな大人の玩具をクローゼットの中にしちまってたはず。清楚な顔してるのに、彼女むつつりだからね。ギャップがあつて大変よろしいと思います。

いやいやいやそういうところやぞ。そういう風にすぐエロゲーの記憶を掘り起こすのが良くない癖だ。うっかりクローゼットの方向をガン見していた。そんなことばかりしてるから変な妄想に思考が持つてかれるんだ。

…もしかして、今もあのクローゼットの中にはヤバめなオモチャ達があるのかな？え、まじ？あのめつつちゃエグい奴らが本当に眠ってるのか？

「…シオンちゃん、どうかしたんですか？」

「…なっ…なななんでもないです…」

い、いつの間に隣に。さつきまでドライバーで自分の髪を乾かしていたはずなのに、気付いたらソファアの隣に座られていた。まさかニンジャの家系ですか？

いや違うな。ドライバーの音が消えたのにも気付かないほど私が妄想逞しくしていただけたのだ。本当にごめんさい。

「そうそう、昨日のロードショーですけど気になるゾンビものだったんで録画したんです。一緒に観ませんか？」

ゾンビものか。生物学的な災害のアレだろうか。死ぬほどずさんな管理体制が悪い癖に、行き過ぎた科学への反動だとか高尚な語りをしてくるよくある映画なのかも。

うーん、いや、別にいいかな。

ホラーやグロいもの、スプラッタなたぐいのは別にそんなに好きじゃない。

いや別に嫌いではないんですよ？ 嫌いではないけどわざわざあえて観たいかと言われるとそうでもないみたいなの？

全然、その、怖いのが苦手とか？ そういうのじゃないですが？  
とりあえず遠慮しておこう。

「…別に…いいよ…」

「良かったです！ ちょっと雰囲気出すために灯りも落としますね！」

しまった！



言葉選びをしくじった。いいよってやつどちらにも意味を汲み取れるのがよろしくない。これじゃあ許可か遠慮かわからないじゃないか。

ひざ掛けをかけられエアコンの設定温度が更に一度下げられる。うえー雰囲気作りガチ勢か？ 羽織るための毛布も持ってきてるし、飲み物もおつまみもある。

でもうきうきと録画一覽を漁るミナミを見ると、水をさすのもちよつとイヤ。絶対ちよつと悲しそうな顔しながら、仕方ないですねって映画を諦めるだろう。優しい子だから。

仕方ない。ここは一肌脱いで鑑賞会に付き合いますよ。別に怖くないが？

「…あれ、これでしたっけ？ 日付的に合ってそうですね。じゃあスタートします」

…うん？ なんかこれホラーものの映画めっちゃストックされてないか？ しかも私が一緒に暮らすようになってからの未読ばかり。

ミナミさん、そんな花も恥らう乙女って顔しときながらホラー映画の鑑賞が趣味だったのか。しかもこれ私に気を使ってか、同棲中はその趣味も封印していた感じだ。

…いや。

いやいや。それは、流石に、申し訳ない。申し訳ないなこれは。

よし、決めた。シオンさん決意しました。

今度からその溜まった映画たち、私から観たいって誘うようにします。だってミナミ

さん、その映画気になってるでしょ。気を使わせてしまってるのが恐らく私以上に、私から消化に付き合うのが筋というもの。

別に怖くなんてないしね。よゆうよゆう。

『バウツ!!!』

「…???」

「…! シオンちゃん怖いのが苦手でした?」

「…ぜんぜん…よゆう…」

いきなり決意が折れかけた。

え、なにこの犬。正中線で二つに裂けた。こわ。うそ、こわくなんてない。

思わず身震いしたのがバレたのか、抱き寄せられその上から毛布がかけられる。肩に回された腕から体温が伝わってくる。

そうなんです。実は寒さのあまり身震いしたんです。恐怖によるものではないので悪しからず。

『でも見たのよ! 犬の怪物、モンスターがいたの!!!』

『何言ってるんだお前は。とうとうおかしくなっちゃったか? 俺が見てくるからそこに座ってろ』

『ダメ、ダメよ外に出たら…外にはあの怪物が…』

『…うわぁー!!?!』

「…!!!」

「ふ、ふふ…可愛いですね」

え、この映画のどこが可愛いんだ？ 今おっさんが、し、死んだんだぞ。ぜ、絶対これ食われてる。咀嚼音してる。やだ。もうやだこんな映画。作った人間正気じゃないよ。そんな楽しそうに観てるミナミもやばいよ。サイコだよ。

やだ。

こんなのがあと100分くらい続くの？

画面見たくない。

「…音しか聞こえないほうがかえって怖いらしいですよ？」

もうやだ。おうちかえる。

あ、ここおうちだった。

たすけてミナミちゃん！

夜ひとりトイレいけなくなっちゃう！

## 他力本願

「数1数Aはこの前確認したし、あと現文と生物基礎のプリントもやってたよね」

「社会系のやつも軒並み終わってるし大丈夫そうだな」

夏休みも終わりが近い。大量に出された課題のたぐいはとつくの昔に終わらせてある。むしろ昔過ぎてなにやったか覚えてないぞ。学期が始まってすぐに確認テストがあるから少し心配になってきた。

「あ、やべ。英単語の確認してなかった」

「テストは成績に含まれないからいいですけど、勉強して損はないですからね。今のうちにやっておきますか？」

「うへえ、やりたくねえー」

英単語といえば、ウチの高校では発音もチェックされるんだよな。私は大の苦手。口がうまく回らないのでカタカナ英語みたいな発音になってしまう。でいすいずあぺん！

「シオンちゃんも練習しておきましょうか。特に発音のほう」

め、めんどくさい。苦手なものは苦手なのでやっても仕方ないと思う。滑舌の問題は

いかんともしがたい。

それに拙い発音を聞かれるのも結構堪える。恥ずかしい。

ここはなんとか話題をそらしておかないと。

「…それより…そろそろ時間…」

「時間ですか。うーん、まだだいぶ早い気はしますけどね」

「まあ早いに越したことはないんじゃないかねえの？」

「それもそうですね」

やっただぜ。発音練習からは逃げ出せた。

そして時間というのはアレだ。怪異の出現時間のことだ。先輩によって予測された怪異の出現時間がそれなりに迫っていた。今回は一年生に出動要請が来ているので予め持ち場に移動しておく必要がある。

ちなみに今日出現するのも雑魚ばかりだ。そのため私の実戦訓練の場として使ってもらえる。

万が一ひとりで怪異と戦うことになった場合に備えて、できるだけ自衛能力は高めておこうとのことだ。私は体を動かすことも嫌いじゃないし、なによりミナミ達の足を引つ張るような事態を起こしたくないので鍛錬は喜んでやる。

仮に私が怪異にボコボコにされたり捕まりでもしたら、皆悲しむんだらうなっってこと

は最近薄々気づいてきたからね。たぶん再起不能にならない程度の軽い怪我としかしただけでも心配される。3人とも優しい人だから。

ということと今日の目標は決まりだ。

現れてくる雑魚を一人でも怪我なくあしらって、他の三人に倒してもらおう。なんか消極的っぽく聞こえるかもしれないが、どうやら私の攻撃力では自力で怪異を倒すのが難しいみたいなので仕方ない。

襲われたときも怪我なく時間稼ぎできるようになれば上出来というわけだ。

そしておおよそ防御という点において、私の異能は特に力を発揮する。

つまり今日の鍛錬は余裕ということだ。



音を聞く。

予兆を聞く。

私の音楽を聞く異能はある種の後出しジャンケンみたいなものだ。相手に先に攻撃を仕掛けさせ、その予兆を把握することで最適な防御を選択できる。

小鬼の体当たり。動作に移る前に私はすでに半歩引いていた。

棍棒の振り上げ。その先に私はいない。回避行動はとづくに終了している。

小鬼の飛びかかり。槍の穂先でその出鼻をくじいている。刺し傷にはなっていない

が打撲痕が顔に刻まれていた。

相手が何をしてくるのかわかる。それが戦闘においてどれほどのアドバンテージを生むだろう。

私の身体能力はホムラ達とは比べるのもおこがましいほどの差がある。それは単純な筋力に留まらず動体視力などもだ。

しかしそこまで突飛な差が生まれない点があるとすれば、それは思考速度だ。異能持ちは一般人より思考が速いとされている。それでも個人差はそこまで大きくないのだ。

ホムラ達の戦闘時の反応が異常に速いように見えるのは、単純に条件反射と天性の戦闘カンの賜物だ。特になにか深く考えたりしているわけではない。その思考速度は私と大差ないはずなのだ。

だから、そこで勝負する。

一般人を遥かに超越した思考速度を武器に、聞いた予兆から最適な防御手段を選択し実行に移す。私にはそれができる。

「…シオンちゃん、危なくなったら言うてくださいいよ！」

「大丈夫だって。ほら囲まれないよう適当に間引いていくぞ」

「ミナミはちよつと過保護すぎるよ、ちよつと落ち着いて」

少し離れたところで小鬼の群れをどつかんばつこんと吹き飛ばしている本物の超人

たち。

ああいうのと比べてしまえば私のこれは児戯そのもの。3人とも雲を割るとかそれくらいのことならやってしまうからね。一種の兵器だ。異能が一般人に危害を加えないようにできていて良かった。

小鬼の目元にそよ風を送る。部長に使ったときは軽くあしらわれたのだが、この辺の小物相手なら結構有効だ。お前たちもドライアイにしてやる。

怯んだ小鬼に槍を突きこむ。二股の槍が胸元に突き刺さり——いや刺さってないな。刺さってはないが衝撃に転倒してゴロゴロと転がっていった。

「おーやるねー！」

「でもこのままじゃ囲まれちゃいますよ。ちよつと間引きます」

「いやミナミは過保護すぎるからな？」

この前つぶやいたーのアカウントを取得して私の槍の評判について調べたことを思い出す。

『音叉』『さすまた』『少なくとも槍ではない』『羽根のない扇風機』など散々な言われようだった。二度とつぶやいたーなんてやらん。

離れた位置から弓の通常攻撃のSEがする。一段階チャージされた貫通性能のある攻撃だ。ワラワラとよってきていた小鬼の群れを間引くつもりらしい。



直ぐ側まで近づいていた小鬼を貫く矢を見る。小鬼の喉元を貫通したあとは特になにか巻き込むわけでもない軌道だ。

そこに槍を介入させる。イメージは矢の側面に絡めるように。

巻き付くような槍の動作によって進路が大きく逸れる。キレイに直進していた矢が、錐揉するような不格好さで別の小鬼を貫いた。

見た目以上の運動エネルギーを保有する重たい矢に肩が外れるかと思ったが、どうか目論見通りにいった。自力で火力を出せないのでミナミの矢を使わせてもらった。

ちよつとドヤ顔。

どうよこれすごくくない？ 他力本願極まりないけど。

「おーすごくいいすごくいいー」

「…なんか珍しい顔してるな」

「可愛いでしょう?」

まあ自衛の訓練はそこそこ上手く行ったしこれでいいでしょう。

あとは皆さんお願いします。ちやちやつとぶつ飛ばしてください。

私は観戦します。

その後の怪異はミナミの放った必殺技で一掃された。

いや羨ましいなー。私もあんな必殺技使ってみたい。

い  
い  
な  
し。

## 映画とポップコーンとコーラ

映画を見たいなと思った。最近話題のロボットアニメだ。断じてホラーではない。

主題歌やCMの名台詞が切り抜かれネットミームと化すほどの有名どころ。動画投稿サイトの広告などでもよく見かけるうちに、一応観ておきたいなーと思ったわけだ。

さて、一人で行くのもなんか味気ないし誰か誘おう。

ミナミはこういうアニメが好きそうな雰囲気ないしナシ。ホムラは多分好きだろう。

早速連絡してみよう。

『この日空いてる?』

『あー悪いちよつと用事がある』

素早いレスポンスで断られた。残念、予定があつたらしい。それならばヤヤカはどうだろう。

黙ってればお嬢様だけどその実お転婆なので、こういうロボットものとかもノリノリで観てくれそう。完全に偏見だが。

『この日映画一緒に観ない?』

『ゴメン！その日は用事があつて！』

『そつか。ホムラも用事あるみたいだし、日付が悪かつたかな』

ヤヤカも即座に既読がついて返事が帰つてきた。でもだめっぽい。

『たまたまね、たまたま用事が被つたんじやないかな。それよりミナミも割とその手のアニメイケるほうだから誘つたほうがいいんじゃない？』

『知らなかつた。ありがとう』

少し間を空けて再びの連絡だつた。

意外なことにミナミもロボットものイケるらしい。

「…ミナミ…この日ひま…？」

「はい空いてますよ？」

うん、ちよつと待てよ。

ホムラもヤヤカも特段なにか予定があるっていうのは、かなり珍しくないか？

部活も一緒だし、遊ぶときは幼馴染み全員集合だしで、ミナミがハブられることはない。  
い。

それに用事が入るときはふたりとも前々から喋つてることがほとんどだ。

そんな二人が全く同じ日の同じ時間に予定を…？

妙だな。

「……………この日…ホムラとヤヤカが予定あるらしい…」

「それがどうしました？」

「…あやしい…」

「怪しいって…」

怪しいやろがい。

これもしかして二人でデートしてるのではなからうか。ちよつと詳しく聞いてみよう。

『ホムラの用事って何？』

『大したことじゃない』

『参考までにおしえて』

『まあ面白い物とかかな』

微妙にぼかさされた。ホムラはこういうことはハッキリ言い切るタイプだからなんか怪しい。

ヤヤカはどうだろう。

『なんの予定なのか聞いてもいい？』

『大したことじゃないよ。ショッピングモールいくだけかな』

『ついてつてもいい？』

『ちよつとじつくり買物するつもりだから、また今度ね?』  
これも怪しい。

絶対これふたりとも同じシヨッピングモール行くやつだろう。デートであることは  
確定的に明らかだ。

「…ほら…ほら…ミナミ…これ…!」

「こら、そういう詮索はだめですよ…ってこれはなんですか…映画のお誘い…?」  
ちよつと叱られた。

確かにそうか。プライベートの侵害だもんな。

いやでもめつちや気になる。これ絶対デートだよ。

そしてミナミは私のメッセージを睨んでいた。ホームラに送った映画のお誘いが気  
なるらしい。

ふーん、本当にこのロボットアニメに興味があるみたい。めつちや真剣な顔だ。

「シオンちゃん、私この日ひまです。一緒にお出かけしましょう」

「…おっけー…映画…?」

「はい、映画でもなんでも大丈夫です」

お、何でも言ったな。私はそういうの聞き逃さないタチだ。

迂闊に口を滑らせたミナミが悪いんだぞ。

「…じゃあ張り込みしよ…」

「張り込み？」

「…ホムラとヤヤカ…多分デート…」

「ああそういう。野次馬ですか？」

出歯亀ともいう。

だって推しの子のデート回だぞ。そりや気になるだろう。

どうしても見たい。

都合よくヤヤカの行くと行っていたショッピングモールでは目当ての映画も放映されていない。待ち時間には二人の後でも付けてみたい。甘酸っぱい雰囲気を取扱いたい。

「…たしかに、私もホムラたちのことは気になりますし。付けちやいますか」

「…うん…!」

よし、ミナミもちよつと乗り気だ。当日の予定は尾行と映画鑑賞で決まりだな。



「シオンちゃん、それはいったい…?」

「…変装…」

それとはサングラスだ。やはり尾行するなら変装は欠かせないし、変装にサングラスは欠かせない。これら2つは表裏一体だ。

「また適当なこと言って…楽しそうだからいいですけど」

そういうミナミもいつもより大人びた服装だ。落ち着いた色のワンピースでかなりぱつと見大学生くらいに見える。

私もミナミに頼んでちよつとセクシーな感じのコーディネートをしてもらった。いつも子ども扱いされているのでその認識を逆手に取って変装しようというわけだ。

プライベートでスカートなんて履きたくないと駄々をこねさせてもらったので難航したが、ホットパンツとダボついたロゴ入りTシャツになった。

私の体が起伏に乏しいのでむしろボディラインを隠したほうがいいのかどうか。なんかいつもと大差ない恰好な気がしないでもない。

スマホでなにやら調べていたミナミが周りを見渡し始めた。つぶやいたーで何かを調べていたらしい。

ホムラとヤヤカ、ついでにミナミは有名人だからな。外出していると勝手に写真を撮られたりするし、そういうものがアップロードされることもあるらしい。

なんとというか肖像権的に問題しかない行為な気がする。今日も『異能部の二人いたww』なる文言とともにアップロードされていたようだ。写真の背景を見るに割と最近



にフードコートに出没していたようだ。

私達もフードコートに移動してこそこそと辺りを見回す。

「…ミナミ…ほら…ほら…!」

「あれは、デートですね。間違いありません」

「…すごい…あれがデート…」

案の定というかなんというか、普通にデートだ。「待たせた?」「今来たところだよ」とかやっただらうか。どうなんだろ。同じバスで来ただらうしやってないかな。

二人は仲良く向かい合って食事を取っている。

お互いの注文したものを少しずつ交換してるのも見えた。くそつ、そこはあーんくらいやってくれ。

「流石にふたりとも恥ずかしがると思えますよ。ところでたこ焼きはなにかけます?」

「…なんでも…」

フードコートに並んでいたミナミが帰ってきた。私は席取りで座っていたのでその間ずっと観察していた。

じれったいな。

ふたりともめっちゃうぶな雰囲気を感じる。仲良さそうなのになちよつと余所余所しい。とかいっつの間になんな恋人どうしつぽくなってるんだらう。告白とかしたの

かな？

「…多分ですけど、夏祭りの帰りですよ。私達と別れたあと二人で帰っていったのでその時だと思っています」

はえー、見たかったな。野次馬根性丸出しで少し恥ずかしいけど、それでも見たかった。

どこまで仲は進行してるんだろう。キスとかはまだっぽい。手は繋いでるんだ。

「…はいシオンちゃん、お口開けて。まだ熱いので気をつけてくださいね」

「…あむ…」

たこ焼きだ。爪楊枝で割って冷ましてあったから火傷しないくらいの熱さ。こういうのはたまに食べると美味しいよね。猫舌なので飲み込むのに時間がかかるけど。

ミナミは世話を焼くことが大好きみたいでこういう事を結構前からする。高校でもお菓子を口に放り込んでくれていたし、家でおやつを食べるときもよくしてくる。

昔はこれも恥ずかしかったが慣れた。ミナミが楽しそうな顔してるし別にいいかなって感じた。

コソコソとホムラたちの方を見ていた我々だったが、向こうは食事を終えたらしく席を立ってしまった。先にフードコートにいたのはあつちなので当然ではあるが。

「…いつちゃった…追う…？」

「うーん、そろそろ上映時間も来てますしやめておきましょう。それに二人ともあの様子なら心配なさそうですしね」

私は野次馬根性で見てたが、ミナミはなんだか保護者的視点で見てたらしい。流石だ。

そして腕時計を確認したところ確かに時間が迫っていたのでシアターの方へ移動する。

ポップコーンはミナミと半分ずつに分けて、飲み物にコーラ。やっぱりこの二つがないと映画観に来た気がしない。

あと映画の内容は普通に面白かった。前評判ではヒューマンドラマ的な側面が強いらしいのだが、よくわからなかった。このアニメの前知識が少なすぎて何言ってるかわからなかったからね。

でもバトルの描写が凝っていてカッコよかった。

ミナミも思った以上に気に入ってくれた様子。立体機動を取る相手への弾幕の張り方になにかインスピレーションを感じたとのこと。今度練習してみるとか。

よくわからないが得るものがあつたらしいのでヨシだ。

## 筋肉痛の予感

ボウリングをしようということになった。映画の半券を持っていくとーゲーム無料なのだから。今生ではやったことないので久しぶりだ。

ホームラ達を尾行するのもこの辺までにしたほうがいいとのこと。まだ追いかけるつもりだったのだが、結構真面目なトーンで窘められてしまった。

もし見つかったら雰囲気壊してしまうし、なにより不誠実だからやめたほうがいいとのこと。今度会ったときに実は尾行していたことを伝えて一緒に謝ろうと言われてしまった。

おっしやる通りだった。その言葉自体はミナミが自戒を兼ねて言ってたみたいで責められてる感じではなかった。でもその方が悪いこととしてしまったって感じで悲しい。結構ガチな感じで凹んでいた私にミナミが提案したのが、さっきのボウリングだったというわけ。

ちなみにボウリングが終わったらそのままカラオケだ。私の絶対音感を見せてやろう。

「シオンちゃん、多分それは無理ですよ」

「……………たしかに…」

ミナミが選んでいたボウリングの玉と同じやつを持ち上げようとして固まった。なんだこれ重すぎる。よく見たら16ポンドと書いてある。そりや重いわ。

ミナミが軽々と持ち上げてるから全然気にしてなかった。よく持てるなこんなの。流石は異能持ち。

異能持ちはスポーツの公式大会へ参加できないとかいう制約があるのも納得だ。怪物じみた身体能力の人間が参加したらゲームバランスがおかしくなってしまう。

え、私？ まあ私も異能持ちだけど出力が弱いし、方向性も足の速さとか感覚の鋭さに割り振られてるから大したことない。筋力は見えた目相応だ。

結局選んだのは7ポンドのやつ。これでも重いが、これ以上軽いものとなればもうお子様用のしかなかった。生来の女の子なら何も思わなかったりするのかもしれないが、男のプライドにかけて子ども用は選べない。

そしてえっちらおっちら玉を運んでレーンについたとき、予想外の顔ぶれに出会ってしまった。

「ん、あれ、ミナミとシオンじゃん。どうしてここに？」

「あホントだ。しかも隣のレーンだね！」

なんか見慣れた二人がいた。そうか二人もたまたまボウリングに来てしまったのか。

これは気まずい。

三人は私にはよくわからないアイコンタクトを交わしていた。なにか幼馴染同士で通じるものがあるのかもしれない。

でもそんなことよりデートの雰囲気ぶち壊してしまったことを謝らないと。

「……その……ごめんなさい……」

「え、なにが？」

「……二人が……一緒に遊んでるんじゃないかなって……」

「えっと、どういうことだ？」

「あ、誘われなかったから寂しかった感じ？」

「……その……ちがくて……」

上手く口が回らない。助け舟を求めてミナミを見上げる。

よく自分から話しましたと言わんばかりに頭をぼんぼんと撫でられる。

そして優しく微笑んで私の言いたかったことを代弁してくれた。

「私達、実は二人が何してるのか知りたくてちよつと後を着けてたんです。フードコートのあたりですね。二人には不誠実なことをしてしまいました。だから謝りたいです」「あーなるほどそういうことか。別に気にしなくていいぞ。予定伝えてなかったオレも悪いし、映画のことも断っちゃったしな」

「私こそゴメンねー。シオンちゃんハブにしたわけじゃないの」

なんか私がおぼられて拗ねてるみたいだな捉えられ方してないか？ いや、確かに映画を二人に断られたことが寂しくなかったとは言わないが、そんな構ってもらえないと死ぬウサギのように思われていたのなら心外だ。

これでもボツチ生活には慣れている。例え三人にハブられたとて普通に……いや、どうだろ。流石に三人に見捨てられたら泣くかもしれない。今生で泣いた覚えはないため初めての涙になりそう。

「シオンちゃんどうしました？」

「…なんでもない…」

考えていることを読み取られたのかミナミが心配そうな顔。なんだお前はエスパーカー？

よくよく自己分析してみたら私は三人衆にかなり絆されているっぽい。特にミナミには。胃袋掴まれてるし。

三人には絶対に嫌われないようにしないと。自分の精神衛生上重要だ。

そしてホームラとヤヤカがボールを持って戻ってきた。ふたりともミナミと同じ16ポンド。

ボールを置くところに重厚なカラーリングの玉が3つ、そして蛍光色の私の玉がぼつ

んと置かれている。なんだこれ場違いすぎる。

案の定ヤヤカはプロ顔負けのフォームで毎回ストライクを取ってくし、他の二人も負けず劣らずの見事なスコアを叩き出していく。

私？ 私は手先の器用さだけに自信があるので、完璧なコースに毎度いれているのだが、速さと重さが全然足りない。驚異のスプリット率でスコアが伸び悩んだ。

そうして合計3ゲームやったのだが、右手がくたくただ。もう全然力が入らない。ホムラ達は5ゲームやるつもりらしいのでお先に失礼させてもらう形になった。



「上手いですねー」

「…ふん…」

上手いというのは私のカラオケの話だ。

私は滑舌が悪いし感情を込めて歌うというのも苦手だが、機械的に音程を合わせるのは完璧と言ってもいい。ボーカロイドの曲なんかはむしろそういう歌い方がマツチするものもあるので、そういう曲を選んでいく。

褒められるのは嬉しいことだ。それもミナミが相手ともなれば特に。思わずドヤ顔



にもなる。

対してミナミの歌い方もめちゃくちゃ上手い。ゲームだと声優さんがイメージソング歌ってたし、なんとなく上手そうな気がしてたが実際に聞いてみると惚れ惚れする。力を入れてラブソングを歌っているのを聞いていると思わずこちらが恥ずかしくなるくらい情熱的な感じだ。なんか選曲も意外だし。

「シオンちゃんそのダンスなんですか？ 楽しそうだからいいですけど」

「…変…？」

「変ではないですけど、いきなり真顔のまま踊りだしたのでびっくりしました」

歌いながらダンスした結果見事に息が上がった。思いの外疲れる。もうやらない。

アイドルってすごいんだなって思った。

「どうせならデュエットしませんか？」

「…いいよ…」

「じゃあこの曲で。男性パートは私がやります」

ミナミはまたラブソングをいれていた。意外とロマンチストなのかな。

私のこのつべりした歌い方と対照的で、ミナミはやっぱり情熱的。こぶしとかビブラートの回数がぐんぐん増えていく。私はゼロが並んでいた。

「ふふ、録音しちゃいました。消したほうがいいですかね？」

「…べつにいいよ…好きにして…」

「ではお言葉に甘えて」

スマートフォンをちらちらこちらに向けていたりしたのは録画のためだったか。写真とかに残るのは好きじゃないけど、ミナミならいいか。

そうやって私達はカラオケでしばらく時間を潰して、夜も外食で済ませてから帰った。

幼馴染み三人衆そろって遊ぶのもいいけど、こうしてミナミとふたりきりなのも新鮮で楽しいね。

またいきたい。

えっちなことはいけないことだと思います

夕方ご飯を食べ終えたあと、そのままホラー映画の鑑賞をした。最近映画ばかり見  
てるな。

現在は観終わったあと。私はミナミの膝の上で武者震いしていた。いやー思わず鳥  
肌が立つくらいに緊迫感ありましたね。

すみません、背筋が凍って寒いのもう少しこのままでいいですか？ いや怖いわけ  
でなくてですね。人肌の温もりが丁度いいというだけです。ほんとに。

「シオンちゃん最近元気ないですよね？」

「…そんなことない…」

お腹や頬をむにむにともみ続けるミナミがそんなことを言ってきた。私元気ないよ  
うに見えるか？ お腹揉まれてるあたりもしかして太ったのかな。いや全然そんなこ  
とないわ。我ながらびびつくりするほど細い。

「その…なんだか肌のハリが良くないような気がします」

「…そう…？…いつもどおり…」

あ、やべ。これは自覚があるやつだ。

これ完全に寝不足ですね。

いやだつてさ、私たち同衾してるんだぞ。それってやばくないか。あのベッドも原作だと情事の戦場だったはず。そんなところでミナミと一緒に寝てるって、えっちじやん。

割と今まで普通に寝れてたのがおかしいんだ。この前いらんエロシーン思い出したせいで一緒に寝てるのが恥ずかしくて仕方ない。ミナミも私も抱き癖があるらしく、気付いたらコアラムみたいにひつついてるのもだめだ。

罪悪感と恥ずかしさと、こんなこと考えてるなんてバレたらヤバいつていう焦燥が混じつてなかなか寝付けなくなつてしまった。

…しまった、いらぬこと考えたせいでこの格好自体も恥ずかしい気がしてきた。後頭部にあたるやわい双丘の感触。おいおいおいまじでそういうの意識したら終わりだぞ。

「…あふっ…」

「それじゃあお風呂ですかね。シオンちゃんカラスの行水ですし…」

おいミナミさんその手やめてもらえませんか。そうそれへの周りのくるくる撫で回してる指のことです。無意識なのかもしれないけど、やられた方はたまつたものじゃない。

がっしりとホールドされていて止められないので、身動きして不快を主張する。不快というかくすぐつたいてことだけど。

それにしてもカラスの行水か。まあ私は長風呂が好きだけど、ミナミ宅で暮らすようになってからはちやちやつと出るようにしてる。

だって私が浸かった湯船にミナミが入るんだぞ。さもなくば逆。それはなんだか悪いじゃん。汚いとか思われたらショックだし。

私はミナミが浸かった湯船、全然平気だけど。でも逆もそうとは限らない。

あとバカ正直に寝不足が肌荒れの原因ですーとか言えない。なんで寝付けないんですかとか聞かれたらゲームオーバーだ。詰む。

そうやって下らない思考を巡らせていたらミナミが口を開いた。

「やっぱりお風呂ですかね。よし決めました」

「…なに…?」

「お風呂一緒に入りましょう」

…今なんて?

◇◆◇

「…だめ…」

「でもシオンちゃんお肌荒れてますし、ちゃんとケアできてるのか気になるんですよ」

「…どうでも…いい…」

「それこそだめです。もう高校生なんですから自分の見た目はちゃんと意識しないと」  
「…うう…」

私こと鈴木ミナミとしてはこのままそれっぽいこと言っておけば、お風呂に入れるんじゃないだろうかという思惑があった。シオンちゃんは頑固そうに見えて意外と押しに弱いのだ。

実のところ肌荒れの原因は察している。多分夜ふかしだ。

最近シオンちゃんは夜の寝付きが悪い。抱き寄せると顔を赤くして逃げてしまうのだ。前はこんなことなかったのに。

こうなったシオンちゃんはしばらく挙動不審になる。ちらちらこちらを伺ったかと思えば、明後日の方向に視線をやったり、頭を抱えて丸くなったりする。

そういう反応が面白くてつい抱き寄せてしまう私にも、肌荒れの責任はあるかもしれない。

自分で言うのは気が引けるけど、私は昔からモテるタイプだった。男達がどういう視線で私を見ているのかだつて経験を通じて理解している。

だからシオンちゃんが私に対してどういう目で見ているのかだつて薄々気づいている。流石に確信とまでは行かないが、シオンちゃんは多分私を性的な意味で意識してい

る。

それを理解しておちよくっている私は、とんでもなく性格が悪いのだろう。こんな気分になるのは初めてだ。好きな人に悪戯したくなる小学生男子ってこんな感じだったのかな。

「…でも…だめ…」

なんだかんだで脱衣所まで追い込んだシオンちゃんは、先程から同じ答えばかり返していた。

だからちよつと傷ついたようなフリをして聞き返す。多分こうすればシオンちゃんの状態が軟化するからだ。かなり良心が痛むけど。

「なんでだめですか…?」

「……………だつて…はるかしい…」

「……………それは、見られるのがですか?」

思っていたより何倍も破壊力のある一言だった。だめって言っている割には服脱いで下着姿だし、誘っているのかもしれない。いやいやまさか。そんな。

脱いだ服で胸元を隠して上目遣いをしているシオンちゃん相手に、澄ました顔で返答できた自分を褒めてあげたい。

でもこれではつきりするかもしれない。そんなに見られるのが嫌なのなら手を引く

べきだ。ことを性急に運ぼうとした私が悪いし、嫌がるのを無理やりというのはちよつとよくない。

いやどうだろそれはそれでアリな気がしないでもないが。でもそういうのは同意があつてこそ。シオンちゃんがどうしても嫌つていうのなら、やめたほうがいい。

そう思つていた時期が私にもありました。

「…そうじゃなくて…」

「と…と？」

「……見るのが恥ずかしい…ごめんなさい…」

見られることではなくて見ることときた。それは、その、私をそういう目で見ているということでもいいだろうか。というか大丈夫？ シオンちゃん自分が言つてることちやんと理解できてるかな。

とりあえず私は気にしないから大丈夫でゴリ押しした。



何度見ても細いなと思う。頼りない肩幅に筋肉も脂肪も少ない手足。出るところが出てないけど引つ込むところは引つ込んでいて、全体的にスラリとした印象。どことな



く猫みたいだ。

いつもは真っ白な肌はすっかり上気していて桜色だ。

ついさつきまで一緒に湯船に浸かっていたのだが、シオンちゃんは先に出てしまった。それに絶対にこつちを見ないようにしている。

椅子に腰掛けたシオンちゃんは手探りでシャンプーのボトルを取ると、そのままガシと乱雑に洗い始めた。

「ちよつ、ちよつと待って下さい」

「…なに…?」

「えつと、いつもそんな感じなんですか?」

「…なにが…?」

あ、あまりにも雑すぎる洗い方だった。普段からそんなシャンプーの仕方なのにあんなにサラサラだったのか。羨ましい。

いやいやそうではなく。これはよろしくない。こんなやり方では髪が傷んでしまう。仮に傷みにくい髪質だったとしても直すに越したことはない。

「これはよくないです。これじゃあ髪が傷んじやいます」

「…どうでも…うん…どうしたらいいの…?」

この子どうでもいいって言おうとしたな。先程の反省を踏まえてか途中で言い直し

だが、絶対身だしなみに気を使つてない。

仕方ないので直接教えてあげよう。

「ちよつとそのままできてくださいね」

「…え…?」

湯船から上がつてボトルを掴む。手のひらの上で少し泡立ててからシオンちゃんの頭に触れた。

案の定シオンちゃんはあたふたと慌て始め、でもどうしたらいいのかわからなくなつた様子で大人しくなつた。耳まで真っ赤だ。

頭皮を傷つけないようにやんわりと揉むように洗う。力は必要ない。指の腹で優しくやるだけでいい。

「かゆいところないですか?」

「…うん…」

背筋をピンと伸ばして強張っていた体から力が抜けていく。どことなく心地よさそうだ。

それにしても細い体だ。いつも触つてるから体格とかはバツチリ把握しているのだが、直接こうして見ていると心配になる。腰回りとか両手でつかめば、指がぐるりと一周してしまいそう。

あばらもうつつすら浮いているしもう少しご飯食べてもらえるようにしないといけないかも。シオンちゃんも少食すぎるしね。

「じゃあ流してきますよ」

「…うん…」

泡を流して軽く水気をとる。

トリートメントに手を伸ばしたところ、鏡越しにシオンちゃんが不思議そうな顔をしているのが見えた。

「…なにそれ…」

まさかこの子トリートメント使ってなかったのか。

同棲を始めたときに、シオンちゃんが自宅から持ってきたシャンプーがどう見ても男物だった時点でちゃんと叱っておくべきだった。

いや正確には叱った上で私のを共通で使うことにしようということでも落ち着いたはずだった。髪質が似てるし大丈夫だと思つての判断だったが、言葉足らずだったかも。

結果使つてたのはシャンプーだけ。それでも普段からあの仕上がりだったのは生まれてつきか。やっぱり羨ましい。

「これもちゃんと使つてください。これくらいの手にとつて髪になじませるんです…そうそう、そんな感じで。5分くらいしたらお湯で流せば大丈夫です」

シオンちゃんは素直に言うことを聞いてくれた。

この子は気分が良くなったときはなんでも言うことを聞くようになる。具体的にはお菓子を食べてるときだったり、褒められたときだったり、頭を撫でられたりしたときだ。今回でそこにシャンプーをしてもらったときも追加されることになった。

シオンちゃんがおたおたと髪にトリートメントを馴染ませているうちに、ボディソープとスポンジを用意。

「じゃあ洗いますよ」

「……だめだめだめ……」

「うーん、それじゃあ背中だけにしときます」

「……………それなら……」

猛烈に抵抗されたのでこのへんで妥協。もとより体を洗うのはちよつとハードル高いかなど思ってたし、あんまり子ども扱いして嫌われるのもいやなので妥当な落とし所だ。

案の定シオンちゃんは体の洗い方も雑だったので逐一注意したり、鏡越しに見られていることに気付いて茹でダコみたいに真っ赤になったりしたが、なんとかシオンちゃんの風呂の入り方は矯正できそうだ。

あと私もシオンちゃんに背中を流してもらおうことにした。

おっかなびつくり触れてくるシオンちゃんが可愛かった。



根本的な問題として、シオンちゃんが夜寝付けなくなっているのがある。いくらお風呂の入り方を変えさせてもここが治らなければどうしようもない。

布団をもう一つ用意すれば解決するのだが、ちよつと、それは、うーん最終手段ということで。寝不足が続くようなら可哀想だし、最悪そういう選択肢も取る必要があるかもしれない。

でも一応秘策のようなものもあるのだ。

「……ここからそっちには……いかない……」

「なんですかそれは。落ちちやいますよ?」

「……だめ……ミナミは……わかってない……」

ベッド上でシオンちゃんが境界線を作っていた。なんでもここから先には進まないとのこと。明らかに私の領土が大きすぎるし、肩幅分くらいしか領土のないシオンちゃんはベッドから落ちてしまいそうだ。

ほつぽつとシオンちゃんが言うには、ベッドで抱き合って寝るのは不埒なのだとか。

そういうのは好きな人以外にはだめで、これは不純異性交遊なのだという。

なんだろう。たぶんお説教してるつもりなのだと思う。でも不純異性交遊って…不純じゃないし異性じゃないでしょ。かなり混乱しているみたいだ。

本人はひどく真剣な表情で言ってるぶん、かなりシユールだ。

「…わかった…う…えっちなことは…いけないこと…」

「はあ」

「…よし…じゃあおやすみ…」

言いたいことを言い終えたらしく、横になつてしまった。しかもベッドの端まで行つてるし、それたぶん足はみ出してるとよね。

そんな状態で安眠なんてできるはずがない。ここは私のプランでどうにかしよう。

シオンちゃんの主張する境界線は、あくまでそこからシオンちゃんが出ないだけで私から侵入することを拒むものじゃない。だからごく自然に手を伸ばして引き寄せる。

「…だめ…こら……」

「こらつてそれはこつちのセリフですよ。そんなところで寝れるはずないでしょう」

ジタバタと暴れるのを抑えつけて抱き込む。それでも抵抗しようとしたので足で踏んだ。体格が違うし筋力でも差があるのでこうなつてしまえばシオンちゃんに勝ち目なんてない。

それを悟って抵抗を諦めたシオンちゃんの背中を、規則的にぼんぼんと叩く。

「ね？ ほら大丈夫ですから」

「…むう…」

自分で言っておいてアレだがなにが大丈夫なのだろう。それっぽいことを言っただけなのだが、シオンちゃんが力を抜いたのでよしとしよう。なんだか安心しているみたいだ。

シオンちゃんはかなり抱かれるのが好きだ。特に抱き潰されるほどめいっばい力を入れてあげると安心する傾向がある。ホラー映画を鑑賞するときに見つけた。世紀の大発見だ。

もつとも本人は認めたがらないだろう。でも体は正直な様子ですぐにすやすやと眠りについてしまった。

「寝ちゃいましたか」

「…んう…」

今までは逃げ出すのを許容してたのがだめだった。恥ずかしかって逃げるのをちゃんと止めて、落ち着くまであやすことが必要だったのだ。

そしてシオンちゃんは寝てしまえば可愛いもので、すりすり頬を寄せてきた。まるで小動物みたいだ。普段のジトツとした目と無表情もいいが、こういった安心しきった

子どもみたいな顔も可愛らしい。

そういった二面性がこの子の魅力なのかもしれない。

シオンちゃんの知らなかった一面を知ることのできる暮らしは、とても楽しい。退屈しないし、なにより日に日に懐いてきてくれることが嬉しくて仕方がない。

でも同時に思うのだ。

「でも、このままじゃいけないですね」

この中途半端な日々をいつまで続けるつもりなのだ。

シオンちゃんは自分の価値を理解していない。かけがえのない人であるとはわかっていない。

いやもしかしたら分かっているかもしれないが、それに実感が伴っていない。

だからこのままでは駄目だ。こんな悠長に行動で好意を示し続けたとしてもシオンちゃんには正しく伝わらない。

言葉が必要だ。

全ての退路を断ち、議論の余地なくシオンちゃんを追い詰める言葉がある。私の好意を誤解なくうけとって、その上で判断してもらえるような言葉を紡ぐこと。私に必要なのはそれだ。

実のところその言葉はもう決まっている。ただ伝える日が来るのを待っているだけ。



そして告白を決行する日も、私の中では決まっていた。

「覚悟してください。必ず私に振り向かせますから」

「…うう…」

柔らかなほほをつついた。狙われているなんてつゆもしらないだろう当人は、顔をかめて身動きしていた。

夜が更けていく。

嫉妬なんて犬の餌にもならないのでしないほうがいい

夏休みが終わってしまった。なんだかあつという間だった気がする。

始業式翌日の確認テストなるものにほけーつとしながら解答していく。高1前期の範囲なんてたかが知れている。それに成績には反映されないのだから適当でいいや。

それにしてもこの教室は暑いな。というかミナミの家が冷房効かせすぎていただけか。

「よし、まだ時間欲しいやつはいるかー？ それなら自分のを上にして前のやつに渡してけー」

「お前アレ解けた？ 大問3のやつ」

「あれムズかったよな」

「裏のやつも結構しんどかったけど」

「え、裏？ そんなのあつたっけ」

「お前……」

担任の合図で最後のテストが回収されていく。裏面白紙回答事故を起こしたらしいやつもいた。成績に反映されなくて本当に良かったな。

そして委員会などの役職決めや席替えが始まる。完全ランダム制の席替えによって私は中央最前列というところでもない場所に連れてこられた。最悪だ。

周りの人たちもよくわからない奴らばっかりだし、三人衆とはかなり離れた位置に来てしまった。

見れば3人とも早速周りの人と談笑してる。こ、これがコミュ力というやつか。私はほとんど喋ったことない人とお喋りできるタイプじゃないので静かにしておこう。

しかしこんな位置ではたむろするのにあんまり向いてないな。今までは最後尾窓際とかいうパーフェクト位置だっただけあり、この落差に耐えられそうにない。

「……あ……」

急に喋った私に周りの男子が驚いている。いやすまん。悪かった。

というのも急に聞こえていたBGMが変わったからだ。日常パートから出撃準備のやつへの唐突な変わり方。間違いない、怪異がでる。

無断で席を立った私に担任の先生が注意をしようとしたところでもなにか察したらしい。

「トイレか」

トイレではない。

ホムラ達も顔つきを変えて臨戦態勢だった。

「…中規模…たぶんグラウンド…もうすぐくる…」

「分かりました、先輩たちにも連絡しますね」

「私は怪異課に伝達を」

「というわけで先生、急用ができたんで俺たちはちよつと外に出ます。避難誘導の方はおねがいします」

そうして校内には警報が鳴り響く。

出現した怪異は浮遊する巨大な本みたいなやつだった。ホムラが出現と同時に必殺技で焼き払いワンパンチで終わってしまった。ちよつと不憫。

やっぱりこの三人、原作での推奨レベル帯を大きく越えてそう。ラスボスの討伐はレベル40くらいが必要とされるが、多分すでに60は軽く超えてる。

私？ 私はたぶんレベル1ホムラより弱いよ。

悲しいね。



昼休みになった。私は今一生懸命弁当を食べているところ。

前期だと私の机の周囲は集まりやすかったから、三人衆が勝手に寄ってきてくれてい

たのだが、今期は最前列中央。流石にたむろするには適していない。

それぞれ自分の席で周りの連中と駄弁りながら弁当を食べている。もちろん私にお喋りする胆力なんてないので黙々と処理していた。

私とミナミの弁当は週替わりで交代しながら作る事になってる。今週は私でかなり雑に作った。朝ごはんに用意したものと昨晚の残りを詰めて、ごはんと冷凍のコロッケをいれただけ。

ちらりと後ろを振り返る。ミナミは隣の席の男子やその他隣接した席の子とおしゃべりしながら弁当をつついている。

ふーん。ずいぶん楽しそうですね。

私を放っておいて。

なんだか面白くない。

黙々と弁当を処理する。量はミナミの半分くらいのはずなのに、減るペースは私のほうが遅いらしい。自分の小さな口が恨めしい。

先に食べ終えたららしいミナミは自分の席でそのまま談笑を続けていた。なんだかいライラする。こっちは一人で寂しく弁当つついてるのに。

自分でもなんでこんなに頭に来てるのかよくわからない。たぶんコミュ力のある人への嫉妬だ。私もそういう陽キャ属性に生まれたかった。

やつとの思いで残りの白米をかきこみ、お茶で飲み込んだ。これで完食。席を立つ。ミナミは廊下側の後ろの席だ。ヤンキー座りしてソシヤゲで遊んでる男子達や、椅子を向かい合わせにして喋っている女子たちの間を抜けてその席までたどり着く。

「し、シオンちゃん、なんか怒ってます？」

「…おこつてない…」

近づいてきた私の様子になにか感じ取ったらしいクラスメイトたちは、おしゃべりをやめて道を作ってくれた。無事に空いたミナミの席までつかつかと寄つて、膝の上に座る。

「やっぱり怒ってますよね…？」

「…おこつてない…」

怒ってるんじゃないやなくて、これはコミュ障の僻みのたぐいです。そのコミュ力への嫉妬です。

…私は何をやってるんだ？

「その、樫さんごめんなさい。ミナミを盗ろうつてもりじゃないの」

「…しらない…」

「なあ悪かった、そうだこの椅子使うか？　すぐどくよ」

「…いらない…」

周りのクラスメイトが口々によく分からない言い訳をしてくる。何を言ってるんだお前たちは。私はあくまでコミュ力に嫉妬してただけだし。そもそも私の行動は意味不明な八つ当たりだ。

なんでこんなことしてるんだろ。自分で自分の行動の理由がよく分からない。

少しミナミに持ち上げられて位置を調整される。家での生活で確定したベストポジションへ着地。定位置と化した膝の上でしっかりとホールドされる。

そうそう、これでいいんだよこれで。

「ごめんなさい、今度からは一緒にお昼食べましょうね」

「…でも…椅子たりない…」

「それは、ほら山口さんの椅子借りればいいんじゃないですか。ね？」

「おう別にいいぞ、どうせ教卓前でゲームするし」

そう言ってるのは山口なんとかくん。早昼を食べて休み時間にソシヤゲで盛り上がってる連中の一人だったらしい。これは好都合だ。明日からその椅子借りることにしよう。

ぼつちで食べるご飯より複数人で食べたほうが美味しく感じるし、弁当の量とか適切かちやんと確認したほうがいいからね。毎日この席まで行こう。

なんだか不自然にイライラしてた気分が収まっていくのを感じる。なんであんなに

無性に腹が立ってたのか不思議なくらいだ。

私の中の拗らせた陰キヤ根性が恐ろしい。

陽キヤに嫉妬したところで得るものなんかにもないのね。  
これからは気をつけよう。



## 背中に乗ってふみふみするマッサージは子どもの特権

最近ミナミが忙しそうにしてる。図書委員に任命されたところ早速仕事を押し付けられたようだ。読書の秋ということで図書館のイベント用ポスターを制作している。

私も手伝った。イラストを書くのは割と得意なので、ちよこちよこ絵を描き込んだ。

でもポスターだけじゃなくて配布用の資料だったりも必要らしく、色々用意している。

流星にそこまで手伝うのは、部外者である私にはできないし暇になってしまった。

そう、暇なのだ。

一人で暮らしていたときは別に暇であっても何も思わなかった。でも今はなんだか手持ち無沙汰で仕方ない。

「うーんとこんな感じでいいんでしょうか…」

ノートPCでワードを開いていたミナミが独り言を言っている。そうやって作業ばかりしてるからちよつと寂しい。いつもみたいに構ってくれないのだ。

ミナミはテーブルの前に座布団を敷いて座っている。あれではいつもの定位置に潜

り込むことができない。なによりそんなところに座ったら画面が見えなくて邪魔になつてしまう。それはよくない。

そうして欲求不満の日々が続けば、流石に私も我慢の限界だ。

「…どうしたんですか、シオンちゃん」

「…なんでもない…」

コアラみたいに背中にしがみつく。甘い香りと人肌の温もりを感じる。いつもはこれに包まれていたのだから、このままじゃ不足だ。ぐりぐり顔を押し付ける。

私は何をしてるんだろう。

最近、自分の感情と行動を制御できなくなっている。前までこんなことなかったのに。遅めの思春期だろうか。

自分の感情を見つめ直せば漠然とした不安が横たわっている。不安。不安か。私は何が不安なのだろう。

それはもちろん決まっている。

ミナミの好きな人についてだ。

ミナミには好きな人がいる。本人が言っていたので間違いない。仮にその人とミナミが付き合い始めたりでもしたら、私はどうなるのだろう。

ミナミは外泊とかするのかな。もしそうになったら私はここで一人つてことだろうか。

一人で過ごすのにこの部屋は大きすぎる。きつと寂しくなる。

いやだなあ。

ミナミがどこぞの馬の骨とも知れないやつと付き合うなんて、認めたくない。でもミナミの恋路を邪魔するのはそれ以上にイヤ。

あーもう泣きそう。推しの巢立ちがこんなに辛いなんて思わなかった。

「よし、終わりました。印刷は明日にします」

「…うん…」

「まったく、どうしちゃったんですか」

いつまでも背中から離れなかつたためか、引き剥がされてしまった。猫でも持ち上げるようにして運ばれた先はやっぱり膝の上。

お腹に伸ばされた腕をしっかりと抱え込んで離れないようにする。手を開かせてむにむにとマッサージする。さっきまで作業してたんだからその労いだ。

細くて長い指だ。爪は綺麗に切りそろえられているし、肌にシミの一つもない。

…やっぱりよくわからんやつにミナミを渡したくないな。心底そう思う。

「そろそろお風呂入りますか。いい時間ですし」

「…うん…」



「…っ…」

「うーん、ちよつと凝つてますね。シオンちゃん猫背気味だから変な負荷かかってるんじゃないですか？」

風呂上がりにはミナミからマッサージをしてもらった。もとは私がミナミの作業の労いとして、足圧のマッサージをやってみたのだがそれのお返しらしい。

私の体重は30キロ台だしミナミは超人なので、背中に乗ってふみふみしても全然大丈夫だった。コリをほぐすのに指圧したところで私の筋力じゃたかが知れてるしね。

メインヒロインの背中を踏むという状況に言いようのない背徳感があったけど。

「このへんですかね？」

「…あう…」

ミナミは普通に指圧だった。手のひら全体で肩甲骨の下あたりを押し込まれて変な声が出る。あー気持ちいい。

背筋がほきほきと音を立てて姿勢が矯正されていく感覚。凝り固まっていた筋肉がほぐれてあるべき姿に戻っていく。

するとゆつたりと体重をかけるだけだった手付きが変化し始めた。全体をほぐすよ

うな圧力から、ピンポイントで狙撃するような圧迫へ。

手がするりと背筋を撫であげ首のあたりで止まる。ぞわぞわと這い上がる言いしれない感覚に身震いしてしまう。ミナミの親指が狙いを定めていたのは後頭部と首の間点。髪の毛の生え際あたりだ。

体のツボというのは概ね左右対称にあつて、指圧もまた左右を同時に捉えることが多い。頭ごと掴むようにして指が押し込まれる。力はそこまで入っていない。だが首筋を下から押し上げるような圧迫に目の前がチカチカする。

「……く……う……」

「痛かつたら言つてくださいいね？」

首筋から順に肩へと手が下りていく。今度は首と肩の間点。少しコリのある筋肉へと狙いをつけた指が、ぐりぐりとえぐり始める。

強くはない。痛いわけでもない。ただ背筋を震わせるようなおびただしい激感が、肩から全身へ放射状に抜けていく。思わず身をよじつても指はびたりと追いかけてきて離れる気配もない。飽きもせずえぐり込んでくる。

声が出ない。

あまりの感覚に悲鳴の一つでも上げないか自分でも心配になるくらいだったが、漏れ出すのは掠れた音ばかり。あられもない声を出すよりかは万倍マシではあるものの、

静止の声すらあげられないのはいささか不安ではある。

「ちよつとバンザイしてくださいね」

「……」

うつ伏せのまま腕を取られた。そのまま上の方に持ち上げられまさにバンザイの姿勢になる。抵抗しようとは思わなかった。これからしてもらえることがもたらす快感を、一度経験しているからだ。淡い期待が反骨心を削いでいた。

腋窩に指が添えられる。ともすればくすぐったささえ感じる感触に息を吞めば、背中に跨るミナミがくすりと笑ったのに気付く。脇のくぼみを奥へとぐいぐい押し込まれる。痛みにも似た電流が背筋を走り、カッと頭が熱くなる。血流が促進されてじつとりと汗が滲んでくる。

「やつぱりこどもですね」

「……ふ……う……」

指が外れ二の腕へと向かう。さつきまでの弱点を狙い撃つ圧迫が終わりやわらかく揉むだけになった。筋肉も脂肪も薄い二の腕がやわやわと揉み込まれる。

完全にやりすぎでしょ。私の大雑把なマッサージなんかとは練度が全然違う。

ミナミは今からでも整体師にでもなったほうがいいよ。これは金を取れるわ。なんなら今からでも払いたいくらい。

いつの間にかピンと反り返っていた背中を脱力させる。迸る快感をどうにかやり過ぎた結果だった。よし、そろそろやめにしてもらおう。お返しにはもらい過ぎだし、これ以上は本当に骨抜きにされる。

された経験があるのでこれは間違いない。

ということでもミナミさん、そろそろ背中から降りてもらえませんか？

「なに言ってるんですか。肩周りだけで終わるはずないでしょう」

「…え…？」

「はい力抜いてください、あとは足腰をやつてきますよ」

「…あふ…」

しゅるりと寝間着の上を滑る手が、次の狙い所を捉えていた。静止の声を上げるべく肺に入れた大気があえなく漏れる。

…え、まじでやる気？

まあ私としてはイヤじゃないんだけどね。気持ちいいし。でもそれはそれとして私ばかりやってもらってるのが気後れすると言いますか。あといいよヤバくなったときに自力で抜け出せないのがちよつと恐ろしいと言いますか。

だからこのへんでご遠慮したいんですが——あう



骨抜きにされた。もう私の体はぐてぐでだ。

「……う……」

大変な目にあつた。体のそこかしこがじんじんと熱を帯びて熱い。かといつて不快な暑さかと言われるとそうでもない。体の内側からぽかぽかと温まって血行が良くなっているのを実感する。

もはや一步も動きたくない。執拗に揉みほぐされた腰背部、臀部、下腿、足裏は蕩けそうなほど心地良くてふわふわとしている。今立ち上がっても腰が抜けてしまいそう。

特にあれがやばかつた。腰と尻の間辺り、つまり仙骨付近を押し込まれたやつ。びりびりと爪先から脳天まで激感が走り抜け頭が真っ白になった。あうあうと情けない悲鳴が口から溢れるのを抑えられなくてとても恥ずかしい。あんなの反則でしょ。

うつ伏せに突つ伏したまま動けない私をミナミが片手で撫でてくる。マツサージのつもりはないらしく、手持ち無沙汰を解消するために触ってきているだけのようだ。よかつた。これ以上やられたらいいよ頭がバカになってしまう。

「シオンちゃん、なにか食べたいものとかつてありますか？」

「……………とくには……」

ミナミがスマホ片手に話してくる。喋るのも億劫だったがどうにか返事だけはした。



作業して疲れたであろうミナミを労うはずがどうしてこんなことに。肝心の当人をちらりと覗けばずいぶん楽しそうな顔をしている。心なしか顔もつやつやしてる気がする。

あ、私の視線に気づいたミナミがこっち見た。なんだか悪戯っぽく笑うと首筋を撫でていた手つきが変わる。耳たぶを親指と人差指で挟んでこれみよがしに撫でまわされる。

これはやばいぞと身を硬くしたところでくりくりともみ始めた。目の前で火花が散りぞりぞりと理性が削られていく音を幻聴した。どうにか逃れようとするが指に挟まれてる以上逃げ場なんて当然ない。丹念に耳たぶを捏ね回されて頭がおかしくなりそう。

「……あう……う……」

「ふ、ふふふ、シオンちゃんは本当に可愛いですね」

やめろー！今はどこもかしこも敏感になっていて洒落にならない。て、手つきがイヤらしいすぎる。へんたい。いや別にマッサージみたいなものなので変態扱いは完全に言いがかりだが。

切羽詰まっている私の顔をわざわざ覗き込んで、ミナミが喋りだす。

「そういえばシオンちゃんは週末暇ですか？」

「…あえ…」

「もし暇だったら一緒にどこか出かけたくなって思ってたして」

「…あ…め…」

こくこくと頷く。確かにその日は普通に暇だからだ。さつきからなにやら調べてたのも、もしかしたら外出先の情報かもしれないな。

「よかったです。あと、もう一つお願いなんですけど」

「…ん…」

ミナミの手付きが緩んだ。少し余裕を取り戻した私に対して、ミナミはなにやら覚悟を決めたような顔をしている。なんだなんだ？

「その、帰ってきてからの夜、時間空けてもらっていいですか？」

「…なんで…？」

「えーっと、その日のお楽しみとかサプライズってことで」

要領を得ないがなにやら秘密にしておきたいらしい。それにしてもわざわざ夜にも時間をとるのはなんでだろう。いつも休日夜なんてフリーだしあえてそんなことする理由がよくわからない。

まあいいや。昔なんでもお願いをきくって約束してたし、断る理由もない。

「…いいよ…次の日も空いてるから…なんでもして…」

「そう、ですか。よかったです。ありがとうございます」

もう少し話を聞けば、その日の外出にホムラとヤヤカは来ないらしい。私とのふたりきりという訳だ。なんかデートみたいだなんて思った。

まあそんなわけないけどね。

ところでミナミさん。そろそろ手を離してくれませんか？ あんまりそれやられてると頭が変になりそうなんです。

え、だめ？

そうですね…じゃあせめて優しくしてね…

顔も性格もいい女の子に告白されて落ちない童貞はいないわけ

週末になってミナミと一緒にブドウ狩りに行った。今の時期が旬らしく結構人気があるスポットなのだとか。

巨峰やらなんやら鈴生りのブドウたちをぶちぶち千切っては頬張ってきた。甘酸っぱくて美味しい。食べ放題なので元を取ろうとたくさん食べてきた。

周りには家族連れやカップルが多かったから浮くんじやないかなと思っただけどそんなことなかった。高校生二人で近所の日帰り旅行なんて割とありふれているらしい。前世陰キャだった私としては滅茶苦茶意外に感じる。

そのまま隣接してるワイン工房を見学したり、お土産のブドウジュースを買ったりして帰ってきた。ワイン工房行った時アルコールの匂いに当てられて、柄でもなくミナミにだる絡みしてしまったが謝ったら許してくれた。

家についてから、今度ホムラとヤヤカに会ったときに渡すお土産だけ整理してさっさとお風呂に入る。最近はミナミと一緒に入ってたのだが、なにやら準備したいことがあるらしく別々に入浴。先にミナミが入って、今は私の番。

ついに一緒に風呂に入るのが嫌になっちゃったのかななんて邪推してみる。準備したいことなんて実は言い訳に過ぎないのかも。

いや、まあ私としても裸を見るのも見られるのも恥ずかしいし、別々に入るべきだとは思ってた。思ってたけど、いざ一人で入浴するとなると、ちよつと寂しい。

湯舟でばちやばちやと一人で波を立てる。いつもなら後ろにミナミが座ってたから寝転ぶくらいに背を倒すなんて出来なかった。ぐーつと伸びをして開放感を味わう。

「……………」

気持ちいいはずだ。私は風呂に入ることがもともと好きだし、長風呂も好き。湯船でだらけてれば落ち着いた気分にもなる。そのはずなのに、やけに物足りなさを感じている。

こんなこと前までなかったのに。どうしてだろ。

お湯は熱めなのに物寂しい寒さのようなものさえ感じる。身を包むような温もりが欲しくてたまらない。

最近の自分の感情がわからない。独りでいることなんてごく自然で、当然のことだった。むしろ独りでいることに落ち着きすら得ていたはずだ。

それが今はどうだ。たかだか風呂に一人で入っただけで寂しさを感じたり、高校での席の位置が遠くなってしまったくらいで落ち込んでいる。意味がわからない。

「…でよ…」

自分に言い聞かせるようにひとりごちる。いつも長風呂が好きだったのに、今日は少し速かった。

◆◆

ミナミはなにやら縁側で準備とやらをしていたらしい。ここからは見えないがなにか用意していた様子があった。私が風呂から上がった時点で準備は終わっていたらしく、今は髪を乾かしてもらってるところ。

何をしていたのかなんて聞かない。件のサプライズとやらがこれだろうし、聞くだけ野暮だ。椅子に座ってドライヤーをかけてもらう内に手持ち無沙汰になって手を伸ばす。ミナミのパジャマに包まれた太ももに触れたのでそのまま布を掴む。

「シオンちゃん、もしかしてまだ酔ってたりしますか？」

「…ぜんぜん…酔ってない…」

ワイン工房でアルコールに当てられたときの話をしてるのかな。たしかにあの時はくらくらとしたがもう問題ない。そのまま掴んだパジャマをなににするでもなくずつとにぎにぎする。なんとなく、そうしたいと思った。

髪が乾ききったところでミナミが行きましよう縁側に誘う。何をやっていたのか気になるし、手を引かれるままに付いていく。

果たしてそこにあつたのはお団子と。

「今日は中秋の名月です。一緒にお月見と洒落込みましょう」

見事な満月だった。

誘われるままにミナミの隣に腰掛ける。十五夜のお月見とはその年の豊作を祝い感謝する収穫祭の意味があつたのだとか。

自分でたてたらしい抹茶といくつか種類のある団子。もう歯磨きしたあとだったけど食べてしまう。また寝る前に歯磨きすればいいや。

それにしてもお月見か。随分小洒落ている。これをしたいがために夜は時間を開けておいてほしいって言われてたのか。

ミナミの『展開』後のコスチュームや能力は月をモチーフにしたものだし、やつぱり思い入れでもあるのかもしれない。もちもちした食感の団子を頬張りながらそんなことを考える。

日中は軽いものばかり食べていたのもありパクパクいけるな。花より団子ならぬ月より団子とばかりに自分の取り分を食べていく私を、ミナミが微笑ましげに見つめてくる。

最後に抹茶で口の中を雪いで完食。美味しかった。

「……ちと……ごま……」

「お粗末様です」

ミナミが手を伸ばして肩を抱き寄せてくる。それに対して抗わずにされるがままにする。昔はこれだけでドギマギしてたような気がするが今は落ち着いてきた。というかドギマギはしてるのだがそれ以上に安心感があるから落ち着いているフリをできるといった感じか。

縁側に座ったまま上空に視線を向ける。真円の月が煌々と輝いて夜にも関わらず明るい。照明がなくても大丈夫じゃないかと思えるくらいだ。

なんというか、ロマンチックとでも言うのだろうか。お月見とかやろうと思えるあたりミナミは風流でセンスがある人なのだろう。私とは全然違う。人としての格みみたいなものが天地ほどに離れてる。

ちらりとミナミの顔を見る。上を見上げる格好のミナミの綺麗な横顔。おとがいから胸元までの流線が妙に色っぽい。乾かしたばかりの濡羽色の髪が垂れて私の耳元をくすぐる。

あまりの顔の良さに赤面。こんな人間いていいのか。風紀が乱れてしまう。

そんなアホなことを考えていた私に、ミナミが語る。

「ねえシオンちゃん、月が綺麗ですねってやつ知ってますか？」

あーあれか。有名なやつだ。夏目漱石が I love you をそう訳してみたみたい



な逸話のやつだ。それが由来で、月が綺麗ですねを愛していますと同じ意味として使う人もいるのだとか。

「……うん……しつてる……」

「そうですか。それは良かったです」

うん？ 何がどうなのだろう。

雑学検定みたいな話じゃないのかこれ。

なんとなく不思議に思っていた私に、ミナミが爆弾を落としてきた。

「では改めまして。シオンちゃん、月が綺麗ですね」

「……え……？」

このタイミングでわざわざそんなことを言うのか。意味がわからない。からかわれているのだろうか。「私は月が綺麗だって言っただけで、そういう意味じゃありませんよー！」みたいな感じで、ミナミのキャラっぽくないけど、多分そういうことだ。

そうじゃなきゃおかしい。跳ねる心臓を抑えて言葉を選ぶ。絞り出された言葉は、なんとも情けない語彙。

「……からかっている……？」

「いいえ私は本気です。シオンちゃん、好きです。愛します。もしよかったら彼女になつてください」



ことですかね。私達を庇ってくれたときかっこいいなーって思っ  
て、それが理由でしようか」

「…でも…」

「もちろんそれだけじゃないですよ。いつも一生懸命なところも好きですし、優しいところも好き。ちよつと寂しがり屋さんなどところも可愛いですし、すつぽり収まる抱き心地もいいです」

「そうも手放しで褒められると面映い。ただなんか最後の方関係なくないか？」

「それに私はやりたいことをやってきただけで、言わば私利私欲のために動いてきたわけだ。間違っても優しくなんてない。ミナミの見込み違いだ。拙い口を懸命に動かしてそう伝える。」

「そういう風に言えちゃう人が優しくくないなんてことないですよ。本当に優しくくないのなら、黙ってればよかったです」

「…むう…」

「正論だった。」

ふくれっ面になった頬を指でつつかれ空気が抜ける。そのままミナミの手は私の頬を包み、ゆつくりと横を向かせる。ちよつどミナミの顔を正面から見つめることになる。

本当なのだろうか。私のことを好きって、肉体的に私は女だし、性格もいいわけではない。体も貧相で魅力に乏しい。お喋りが上手いわけでもなければ大した特技もない。

こんな私を好きって言われても、実感に乏しくて信じがたい。

でも、本当にミナミがずっと前から私のことを好きになつていたという前提で、これまでのことを思い返してみれば、たしかに納得がいくところもある。

一緒に暮らしたり同衾したりぬいぐるみみたいを抱かれたりとか、あれらはてつきりミナミの趣味だと思っていたが、もしかすると私へのアプローチの一種だったのかも知れない。

というか風呂に入ったとか按摩されたりとかって完全に下心ありきだったので……？ いや流石に自意識過剰の被害妄想か。

「ねえシオンちゃん、周りの人とか自分の資格とかそういうの一旦全部置いといて。シオンちゃんは私の事どう思うのか正直に教えてほしいです」

「…正直に…？」

「はい。嫌ならイヤと言ってくればいいですし、私のことをそういう目で見れないならそう言ってくればいいです。ただ本当のことを教えて下さい」

本当のこと、か。正直な話、ミナミのことは一人の人間として好きだ。前世のゲームでの記憶とか抜きにしても、私は家に住ませてもらってるし、世話を焼かれたりしてる。

これで好きにならないはずもないだろう。

だがその感情を色恋沙汰に持ち込むのは、なんかだめな気がする。世の中にはミナミに相応しい人がいくらでもいるだろうし、私では釣り合わない。万が一本当にミナミが私のことを好ましく思ってくれていたとして、私にはその資格がない。

でもそういう資格とか、ミナミにはもつと相応しい人がいるとか、そういうの置いといて素直な話をするのであれば。

まあ、うん、たしかに好きだ。だから。

「……………すき……だよ……」

そう言った。

多分そうだ。色恋のそれであるかとかはよくわからないけど、好ましく思っていることに違いはない。

「それって、その、オッケーってことでもいいんですか？」

「……………うん……」

「本当ですか！ 嬉しいです！」

潰されそうな勢いで抱きしめられた。ミナミは満面の笑みを浮かべている。

そして、いいよと言ってしまった以上、覚悟しなくてはいけない。ミナミにはもつと相応しい人がいるという思いは変わらない。だから相応しい人になれるように頑張ら

なくてはならない。

男に二言はない。正直私なんかのどこが好きになったのかよくわからないし、ゲームのメインヒロインを張る人とモブの私が付き合うなんてことあつていいのかわからない。

と、とりあえずどうしよう。

彼女とかできたことないし、全然心の準備とかしてなかつたからこういうとき何したらいいとかわからない。えっと、なんかカッブルっぽいことしたほうがいいのか？

やっぱりミナミは女の子だし、ここは私が頑張つてリードしていくべきなのか。

きつとそうだろう。私にも前世男としての矜持がある。なんか恋人同士っぽい仕事をしておきたい。うぶだと思われたら恥ずかしいし。

勇気を振り絞つて、私は頬に口づけた。



その日はミナミの恋人になり、同時にお嫁さんにされた。